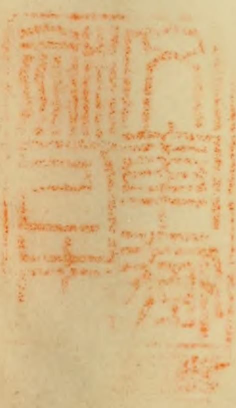


明治文壇回顧錄

後藤宙外著

岡倉書房版

はしがき

舊友で早大教授の長谷川誠也君の誘掖により、昭和八年二月の『藝術殿』に始めて此の『明治文壇回顧錄』の第一回を載せて頂き、同十年三月まで二十回に互つて稿を載せたのであります。それに補訂を加へて、今回、長谷川君と岡倉書房との好意により出版することが出來ました。感謝すべきであります。最初『藝術殿』に此の回顧錄を發表する際の私の心持では、久しく中央の文壇から遠ざかり、筆を執る機會も稀になつた此の頃ではあり、見て呉れる讀者も恐く餘りあるまい、と不安に堪へなかつた。そこで、恩師坪内逍遙先生に竊かに書面を送つて、此度測らずも『藝術殿』に明治文壇の追憶記を書くことになりましたが、退却の潮時を御指示下さるやう豫めお願ひ致して置きます、と申込んだのである。然るに、意外にも、昭和八年二月十三日、同年六月十二日、及び同年七月二十八日との三回にわた

り、先生から推奬と激勵と指導との意味を取まぜた御懇書を頂いたのでありました。その爲めに稿を續ける力を得たことは少なからずでありました。勿論、先生以外にも鼓舞し、激勵し、應援して下さいました方々も少なくは無かつた。その中にも舊友の伊原青々園君、五十嵐力博士、長谷川早大教授、大山功君等は尤なる者でありました。此の際、諸君に對し深く感謝の意を表して置きたいと存じます。

昭和十一年四月二十九日

著　者　識



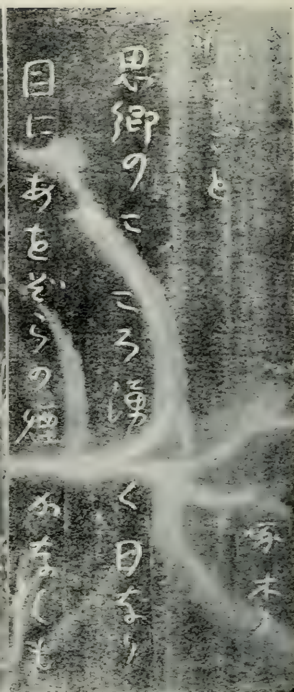
丁酉文社同人創立十週年紀念撮影 明治三十九年十一月十四日
前列左ヨリ水谷不倒 小杉天外 著者
後例左ヨリ島村抱月 伊原青々園



坪内先生中心の老友會同人 昭和六年五月二十三日於星ヶ岡茶寮
前例左ヨリ 松居松翁 坪内逍遙 野崎左文 鳥居清忠 小杉天外
後例左ヨリ 遲塚麗水 高安月郊 巖谷小波 鏑木清方 伊原青々園



中央 坪内逍遙博士 左 同令夫人 右 著者
明治三十七年一月熱海にて撮影



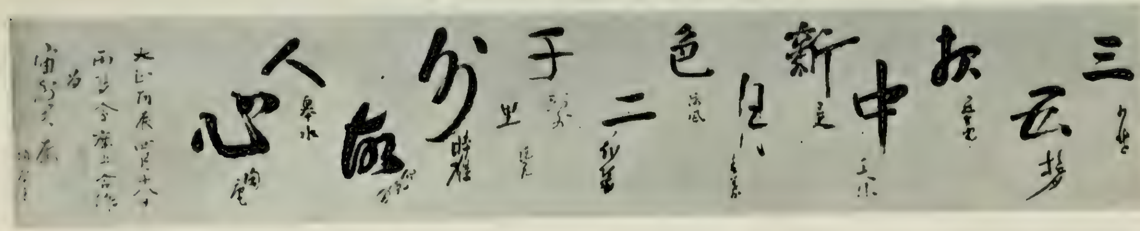
盛岡市天神山啄木歌碑拓本



薄田泣菫
昭和三年六月撮影

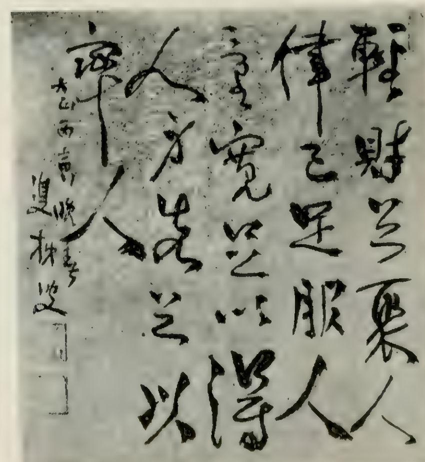


廣津柳浪





西園寺陶庵公雨聲會席上揮毫　明治末頃



坪内逍遙先生遺墨　昭和元年晩春の揮毫

明治文壇回顧錄　目次

—目次終—

明治文壇回顧錄

一、廻覧雜誌と同窓の諸文士

――『友垣草子』と抱月、古白、作麟子等の同人――「塵の身」――「ありのすさび」――『青年小説』――

明治の文壇の片隅に私が顔を出すやうになつた順序をざツと述べさせて戴きます。明治二十七年の夏に早稻田の東京專門學校文學科を卒業しましたが、此の際の卒業論文として私は「散文詩の精髓を論じて美妙、紅葉、露伴の三作家に及ぶ」といふやうな題で管見を書いたのですが、測らずもそれが恩師坪内逍遙先生のお目に留まり、その後半部を「美妙、紅葉、露伴の三作家を評す」と改題して『早稻田文學』に載せていたゞいたのです。當時の『早稻田文學』は日本文學界の最高峯に大燈臺の如くに屹立して輝いてをりました。隨つて私の幼稚な拙劣な論文もお蔭を以て意外にも世間の注意をひき、相當な反響もありまして、微弱な存在ながら、私といふものが一部からは認めら

れることになつたのであります。この論文を世間に紹介して戴く前に、坪内先生は一々親切に措辭や假名遣ひの妥當ならぬところを敎へて下され、その上、丁寧に雌黄を加へ、その理由をも詳細に說明して下さいました。これが私の爲め、一生涯を通じて文章道の補益となつたことは莫大でありました。この以外にも屢〻お宅に、お邪魔をして、何くれとなく御教訓を戴いたことは數へ切れぬ程あつたことは云ふまでもない。

少し跡戻りすることになるが、私どもが文科在學中に文章や詩歌の練習のためと同級生の親睦を厚くするといふ目的で、各〻自筆で淨寫して日本紙二つ折の廻覽互評の雜誌を略ぼ月一回位の割合に出して居りました。勿論休んだこともあるにはあつたが。標題は『友垣草子』と坪内先生がお付けになつたものであつたかと考へて居ります。この雜誌が私ども友人間の心持や眞價を互に知らしめるに役に立つたのは無論のこと、坪内先生に私どもを紹介する手引にもなつたのであります。その故は同人間の廻覽がすむと、最後には坪内先生に御覽を願つて概評をして戴くことになつてゐたからで。この雜誌に執筆した者の中で、今も忘れられない人々は故島村抱月や早大教授を長年勤續した故中島半次郎君――當時號伴麟子、晚年素水と改む――のあつたことは勿論だが、その他に正

岡子規の從弟で、子規は之れを「明治俳句界の啓明と目すべき者」と稱した故藤野潔君も居つた。同君は號を古白と云つて明治二十八年「人柱築島由來」を『早稻田文學』に載せ、その年四月上旬、ピストル自殺を遂げた失戀の詩人であつた。死後短篇「黒神樂」を『友垣草子』から拔いて『早稻田文學』に載せて頂きました。明治三十五年五月子規の編輯で發刊した『古白遺稿』一篇が彼が二十四年の生涯に於ける唯一つ殘した足跡であつたのであります。明治俳壇革新運動の先驅をなし、二十四年頃には進境すこぶる著く、儕輩を壓して子規氏をも驚かした。當時においては破天荒の句として見られた彼の作例に、

今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かな

芭蕉破れて先住の發句秋の風

秋海棠朽木の露に咲きにけり

があつたと云はれる。明治二十五年、同六年、同七年と漸次進んだ古白の俳境はその後、頓に退歩して月並調に陷つた、と、古白君を誰よりも最もよく知つた子規が云つて居ります。子規氏は古白の死ぬ一ヶ月前、即ち明治廿八年の三月初旬、日露戰役の從軍記者として支那に赴き、金州で病を

得て歸り、衰弱を極めて故鄕の松山を訪ひ、正安寺に彼が墓を弔うた。
久氏には「古白の墓に詣づ」と題する長篇の新體詩があります。その結尾のところに、

　我死なで汝生きもせで秋の風

人も詣でず、草生ひつ、
嘲る如き　秋の風
荒るゝが中に、浮世如是
二尺の墳墓　只一つ。

つひに隱るゝ　母の袖、
浮世は汝を　捨つるとも、
汝は浮世を　捨つるとも、
汝を捨つべき、母いかで。

哀切の情が溢れて居ります。幸ひにも私の手許に數冊の『友垣草子』が今も殘つてあります。『古白

稲田文學』その他の雜誌の原稿に利用する爲め目ぼしいものは拔き取つたり、希望に從ひ友人間に分配したりなぞした跡の殘部で、綴目を切つてばら／＼になり一冊も原形のまゝにはなつては居りません。その中に『古白遺稿』に洩れた俳句と歌とが若干保存されてあります。子規が彼の斷簡零墨をも惜んで採錄した心情を酌み取る人には、舊い友人としての私が此等をも捨てかねるのを寛容して戴けることゝ思ふ。作の年代は明かではないが、多分明治二十六年から同七年の春頃までのものと推定されます。

俳句　　　　壺伯

白梅の入日に黄はむ山路かな
うくひすやけやきの梢さす朝日
こしき婦の衣紋くつすや春のかせ
鶯に障子ひとへのへたてかな
あけほのゝ塵なかれけり春の水
春雨やからかさうつす橋十歩

はるかせの青柳にきてもつれけり
赤からむ外に色なき紅葉かな
夕陽をたよりにくるゝもみちかな
鯉はねて折々さそふ紅葉哉
曉は紅葉しにけり富士の雪
落葉して奥の間になりぬ琴の聲

獨吟百句の中

行春や錨をぬきし蒸汽船
行秋や櫛を拾ふて泣く比丘尼

子夜呉歌

さひしさの都にひゝく砧哉

滕王閣

見渡せは眞帆も動かす秋の水

岩黑しゆるき出たる僧ひとり
　ねた鹿の逆毛風吹枯野かな

彼は隨時いろ〳〵な號を用ひた。古白と同音の壺伯とかき、又湖泊堂といひ、枯竹庵、藤屋、竹拐山人などとも云つた。その折々の氣まぐれに任せたものもあつたと見える。彼の歌は『古白遺稿』に五首だけ載つてをるが、二十七年末、周防國大野に同窓の作武雄君（號無得）を訪うた折の作に、

大野在のとある小丘に庵を結ひて行すましたる比丘尼あり一夕無得子とこのほとりの逍遙にそか讀經の聲をきく玲瓏珠を轉ずるが如し此尼に贈る

　風すさふのみとおもひし松蔭に
　　ほうちそわかときくそうれしき

當時古白の最も得意の作で、私どもへの書簡の末にも書いて贈られたものである。『古白遺稿』に洩れた歌を擧げて置きます。

　春かすみ八重のしほ路の空はれて
　　ふしのたかねは雪のあけほの

方丈記をよみて

いしかはやせみのをかはの月をみて
かゝるなかれにすまんとそおもふ

宮城の櫻を見てよめる

ここのへの雲井のうへにさく花は
ふしのたかねの雪かとそみる
さくらはなたゝめのまへのよなりけり
散るてふことはおもはさらなむ
ちるからに人の惜しむをこゝろとて
花やあらしをまたんとすらむ

夜弊さくらの散行

ひとへ二重みへよへいつ重むへなゝへ
八重までちりて殘らさりけり

峯の落花

かつらぎやたかまの山のはるかせに
　行衞もしらす散るさくらかな

　　すみた河にてよめる

すみた河なかれの末にたつなみを
かけにうつせる岸のともしひ

　　戀のうたのなかに

めくりあはむ程はしらねと小車の
こゝろひかれてとしをふるかな
うらみのふかくなり行いそなれや
　とはにみちくるおもひなりけり
人こゝろつらしとおもへはふくる夜を
ゆめもたのますおきてあかしつゝ

庭の山吹をみて

ふるき世のいはれをきけは山吹の
いはぬ色こそゆかしかりけれ

藝妓の鏡もたるかた

むへならく八重つまかさねかゝみくさ
いはぬいろ香をうつしてそみる
自註、山吹のまたの名かゝみ草とそいふよし

花まつころ人の許に

おのつから心のかよふ山しあらは
まつともいはす花をこそみめ

春のくれに人のやとに花のさきたるをみて

くれ行やいそくならひの春ならて
いかにまちてかさくらなるらむ

古白が筆迹のうるはしい事は同人間には有名なもので、二十三四歳の頃、書いたものを今七十に近い私が折々讀みかねる程、草體の書と假名文字がうまい。讀みにくいから巧みだと云ふのではない、全く王朝時代の歌人の筆致をしのばしめるものがある。決してごまかしでは無く、魂を打ち込んで古筆を習得したもので、確かに老成人の筆蹟かと思はるゝ程、垢ぬけのした枯れた雅趣を會得して居つたのである。

兎も角も古白は我等の回覽雜誌『友垣草子』の大立物であつた。この雜誌に私は明治二十七年の卒業間際に「塵の身」と題した小說を掲げました。これが僥倖にも坪内先生のお目に留まり、この位に書けるなら、努力次第では小說家として立てぬこともあるまいと云ふお許しを得たものである。私に取つては一代の運命を決するに與つて力のあつたもので、私自身に取つては終生忘れられぬ事柄でもあつた。この作は後に補訂して明治三十一年一月の『文藝倶樂部』に掲載しました。それは丁度、故島村抱月君が『太陽』に「競すべり」と題する小說を始めて發表した廿九年十二月から、唯一ヶ月後の出來事でありました。右の「塵の身」が坪内先生に認められたのが機縁となつて廿八年の始め（?）から『早稻田文學』に私の小說「ありのすさび」を連載さして載くやうになり、

この作を纏めて、やがて廿九年二月發行の『文藝俱樂部』の臨時增刊『青年小說』に採用されることになりました。鏡花君の「化銀杏」天外君の「改良若殿」花袋君の「無名草」と一緒だつたのです。その前月頃、確か故大橋乙羽氏が牛込辨天町の私の宅を訪はれて「ありのすさび」を『文藝俱樂部』に出すやうにと勸誘して下すつたと覺えて居ります。（昭、八、一）

二、『早稻田文學』から『新著月刊』へ ―上―

――一葉女史の批評と齋藤緑雨――古とんび――甲州旅行――
「闇のうつゝ」――

坪内逍遙先生の御推薦により私が早稻田文學社々員の末班に列するの光榮を得ましたことは、今日から追想いたしまするに、私一代を通じての最大の幸運事であつたかと思ひます。何れの方面に向いても著しい成功を望み得べき素質をもたぬ私としては、兎も角、明治文壇の一角に、微弱ながら或地位を容易に占め得ましたのは、全く同社員に採用して戴いたことが其の階梯となつたのでありましたから。私が同社の編輯事務の一部を擔當致しましたのは略ぼ明治二十八年一月頃からだと記憶して居ります。その以前からも色々同社の御厄介になつて居りましたことは既に前章にも其の一端を述べてある通りの次第で。手許に當時の『早稻田文學』が生憎保存してないので、餘り精確

ではありませぬが、抱月、青々園兩君及び拙者との合著『風雲集』を見ると『早稻田文學』に曾て掲載した露伴氏の「あがりがま」の短評が二十八年一月稿となつて居るから、その頃から一記者としてお手傳ひをしたことだけは間違ないと思ふ。島村抱月君は私よりは約一ケ年程以前から社員であり、伊原青々園君は二十九年一月から社員になられたかと考へられる。此等の事は伊原君あたりが最も確實に御承知の筈であるから、違つたところは御訂正を願ふことに致したい。金子馬治君や與泰資君などは創立當時から逍遙先生の指揮の下に働かれたと思ふ。私どもの關係する頃には綱嶋梁川、島山愼吾の兩君も幾分かは手傳はれて居つたやうである。

私達は方面を定めて彙報欄を分擔し文壇の時事の概況を知るに足るやうに事實の收錄に力めた。その外新刊の短評雜俎欄の漫錄雜筆風のものを主として書いたのであつた。ところが私なぞは無思慮の上に亂暴であつたので、折々突撃的な筆法により意外な失態を來たし、社長の逍遙先生に御迷惑をかけたことも一二度はあつたかと思ふ。その一例は樋口一葉女史の「濁り江」(明治廿八年九月の『文藝俱樂部』掲載)か、又は同女史の「十三夜」(同年十二月の『文藝俱樂部』の「閨秀小說」に掲載)かの二つの中であつたと記憶するが、森鷗外、幸田露伴、齋藤綠雨の諸先輩が『めざまし草』

といふ文藝雜誌に「雲中語」「霹靂車」などいふ欄を設けて當時の創作その他の合評に縱横の筆を揮ひ、事實、文壇の作家を震駭せしめたものである。然るに鈍感な田舍者の私は、それ等諸大家の前をも憚らず勝手な事を書いて往々反抗を試みたものである。盲人の蛇におぢずと云ふ類であつたに違ひない。この人人の『めざまし草』の「雲中語」か「霹靂車」かの中に右の一葉女史の作について非常な賞讃を極めた合評が出たのである。それを私が何かの雜筆でそれとはなしに「ゆもじかつぎだ」とか何とか至極亂暴な雜言を吐いたものである。これが問題となつて、齋藤綠雨氏などは大に憤慨された。その當時の同氏の書簡を見ると、かなり鋭い皮肉でチクリ〳〵と私をやられたものだ。これは寧ろチクリとやる方が當然でこちらが全く不都合であつたに相違なかつた。あのやうに過度の神經質で、敏感な人だつたから私のやうな弱輩の諷刺的短評にも相當にこたへたものと見えて、折々の書面に必ず此等のくだらぬ短評に就いての應酬的な皮肉や、辯解のかいてないことは殆どない位であつた。しかし氏の一面には確に後進を誘掖し指導してくれる親切なところもあつた。又機嫌のよい時には天才肌の例の奇警な名文句を連發して人を驚かせもし、又喜ばせもしたものである。勿論内々に推敲して蓄積したものを機に乘じて吐いたものではあらうが。明治廿九年十月十六日の

書簡のはしに、

「闇のうつゝ」只今拜見致候、おもしろく存候、實は小生「金剛杵」に「宙外最も望あり」と申候節いろいろの異議起り現に或一派の批評家連中とは賭けか致しある次第に候、贊成者は「ありのすさび」を、反對者は「ひたごころ」を證據に致し、今度が勝負と御待申居り候處御强勉の甲斐ありて貴兄にとりてはつまらぬ事なるべけれども小生にとりては嬉しく大いに安心致候「霹靂車」に其事を公言するつもりの處、故ありて續稿掲載を中止致したればそれも叶はず文藝の依賴をも斷り「雲中語」をも脫會致したればおもふ事のいへぬだけがたゞ〱憾に候

猶續々御拜見致度候小生も其内どこからか見參に入るつもりに候（以下略）

十六日　　綠雨拜

宙外兄研北

私の「闇のうつゝ」といふのは明治廿九年十月發行の『新小說』第四號に發表したものである。此の作は春陽堂の支配人佐藤助治氏（後に樋口と改姓）が同年の五六月頃、私の牛込辨天町の宅を訪はれ、春陽堂から來る七月に『新小說』の第一號を出すから小說を書くやうにとの依賴であつた。佐藤氏は坪內先生の御紹介で尋ねて見えたのであつたかと記憶する。そこで私は兩三ケ月の猶豫期間を與へて貰へるやうに話し、出來次第差出すことに約束したのである。そして『新小說』第一號には水谷不倒氏の「さび刀」が掲載されたのである。私は此の『新小說』の舞臺を踏む約束が成立

したので、どうしてよいのか氣が氣でなかつた。無論その時何の腹案も持つて居らぬのである。そこで何處ぞへ旅行して新しい材料を見出さうと決心したが、旅費がない。已むを得ず、大義、親を滅するといふ程の意氣込みで、舊式な獨逸型のトンビを質入し金七圓也を借りて飛び出したものである。六月二十七日新橋から汽車で出發、東海道の御殿場驛から降りて富士山の裾野を徒歩で、籠坂峠から吉田へ辿り、あれから山中湖、河口湖などの沿岸をてくり、御坂峠を越えて黑駒に一泊、三十日甲府に入り、眞黑な鹽出しの鮪の刺肉(さしみ)に膽をつぶし、鰍ケ澤から七月二日、道を轉じて更に身延山に參詣、こゝに一泊して大野に降り、此の水驛より富士川を舟で岩淵まで下つた。その急流には頗る膽を冷やした。けれど無事で四日の夜に歸京することを得た。つまり毎日雨天の中を富士山麓一周の旅をしたのである。この旅中に老爺と娘の二人づれの馬子を籠坂の邊で見かけ、それからヒントを得て、あの「闇のうつゝ」一篇を作り得たものである。特にその馬の鈴の音が興をひいたのであつた。その頃友人はよく私を「後藤は鳶(とんび)を殺し甲州まで飛んだ」なぞとからかつたものである。この古トンビこそは私に取つて思出の深いもので、それは現在老妻の塵よけの仕事着と形を換へて今も保存されて居るのである。こゝで考へたことは、人生は短く藝術は長しとやらいふ諺が

あるとか聞いたやうに思ふが、私どもに取つては藝術の生命は短くトンビの方がより長いとも云へさうである。

緑雨氏のことは伊原青々園君が最もよく知つて居られる筈であるから、左の一寸面白い書簡を抄出して置く位に止める。

酒は先夜ほどなるが下戸にとりて面白く候失敬致候

何子とか申す女の小生に酷肖せるよし人の呼かれ候まゝおれはあんなへんな顔かと今に忘れざる事に候

歸りて御作「三の糸」拜見致候佳きものならぬは貴兄に於ても御自認の事と存候キヨクがなさ過ぎるとも可申候御話の如く赤襟云々は近頃の御失策に候糸をためる云々の語傳へもこゝにはあんまり活用せられざりしやに見受候

「御坐んす」と「二上り新内」とは貴兄のトレード・マークとも申すべきかと内々をかしく覺え候

紫の豆の花咲く垣根哉　これは去年のに候

紫の桐の花咲く小路哉　これは今年のに候

俳は廢也最早やめに致候ことなれども時々口の先といはず鼻の先に浮び出で申候

朝顔や三味の師匠の若づくり　是れ近日の大色氣に候

和歌にも追々新手を出し候小僧さんこゝだよと途中に待受けておつりぐるみ攫つて行くよりは遙に新手に候

作例左に

月やあらぬ春や昔の業平が

くゞりし垣に紅梅の咲く

これを一層簡易にやり候には

天の原ふりさけ見れば仲麿呂の
　まろくも月はなりにけるかな

足曳の山鳥の尾のしだりをの
　ながながし夜を人丸く寝る

絲雨創作に從事すなどあちこちに見え候は嘘に候白素人のむなぐらを取るとも小說を作るやうな惡い事は不致候よしや世界の批評家が一度にワット申したところで夕立程の潤ひもないものと御承知可被下候　匆々

十四日　　　　　　絲雨　拜

宙外詞兄　几下

これは明治三十二年六月のもので、私が牛込の藥王寺前町に住んだ頃、送られた書簡である。私の三の糸といふ花柳界に取材を求めた短篇は絲雨氏の如き通人の口からは間のぬけたものであり、氣の毒にも見え、可笑しかつたに相違なかつたであらう。確かに今より見て惡い心掛けであつたのである。その當時某先輩の訓言に、「傾斜の巷に材料を求むるのは先進作家としては極めて當を得ぬ態度である、その方面は早くは元祿、近くは文化文政以來多數の古今の作家が踏み荒らした領域だから、如何なる人が今後鍬を下しても新開拓の餘地のあるべき筈はない、結局徒勞に終るであらう

と云はれたを背いた報は其の後何年か經過して體驗によりて確かに徒勞であることを知つた。今思ひ浮べても何となく背に汗するの感なきを得ない。今後の若い作者達の爲めに何等かの參考にもと書き加へて置くのも老爺心に外ならぬ。標題と合はぬ内容となつたが、他日これを補ふことに致したい。（昭、八、二）

三、『早稻田文學』から『新著月刊』―中―

――一葉女史意中の人――島村抱月と自殺の覺悟――同君の性格と文藻――

小西平洲と大新聞發行の計畫――丁酉文社同人

前述に私が「ゆもじかつぎ」問題をひき起こしました原因は、單に一葉女史の「濁り江」か「十三夜」について『めざまし草』に據れる匿名批評家等の過褒に對する反感の暴言からであつたやうに云ひましたが、少し違ひました。江見水蔭氏の『自己中心明治文壇史』を見て始めて事の眞相がわかりました。事實は明治二十九年一月發行の『國民之友』の新年附錄の小說について『めざまし草』の匿名批評家の賣言葉に激して放つた買言葉でありました。この新年附錄の顏觸は江見水蔭の「炭燒の煙」星野天知の「のろひの木」泉鏡花の「琵琶傳」拙著の「ひたごころ」樋口一葉の「わかれ道」でありました。『明治文壇史』はいふ。

「これに對しても正太夫は「金剛作」で、

（前略）一口に評すれば『炭燒の煙』は拙作『のろひの木』は惡作『琵琶傳』は愚作『ひたごゝろ』は劣作の何れも雛形なりこれに漏るゝは『わかれ道』のみなれど強ち作の字を附さば賞らざる廉あるを取りて不作ともいはゞや何しろことしは野郎の外れなり殊に役割にすれば白拍子一葉同心水蔭坊天知坊鏡花坊宙外坊但し道成寺は必ず團十郎の勤むるものと早呑込み給ふな常盤座にては伊之助も勤めし事あり。

正太夫齋藤緑雨は、此頃キツイ一葉びいきであつた。張つて居るのだらうと我々は笑つてゐた」（圏點原文のまゝ）

比較對照の仕方が、かなり我々を侮辱したと思はれるものであつたから、血の氣の多い當時のこと故、憤慨の理由が少しばかりはあつたか、と大目に見て戴かれるかも知れません。しかし張つて居つたか否かはわからぬが、緑雨氏が一葉のパトロンを以て任じて居つたことだけは事實であつた。

後年―昭和十年頃―一葉女史當時の親友三宅雪嶺博士夫人龍子女史（號花圃）が某新聞に發表の追懐談に依れば、世間では色々の噂が行はれてゐるけれども、一葉が眞實の意中の人は、其の頃師として敬事した半井桃水氏で、をり〳〵おのろけを聞かされた事もありました、半井氏の方ではあつさりしたもので、氣にも留めなかつたらしいがと云はれた。今より見れば明治年間に於ける女流作家として一葉は全く卓越して居つたに違ひないのだから、之れを先輩として保護しようとした緑

雨氏の態度は先づ以て當然であつたと云ふべきでせう。たゞ相手が女性であつたから、保護者的態度の動機について、色々問題が起つたのは當時としては、寧ろ已むを得ぬ次第であつたかも知れませぬ。

島村抱月君と私とは、早稻田の文科の同期生であつたばかりでなく、約一年餘、同じ下宿にも居つたし、『文壇草子』の同人でもあり、學校を出てからは早稻田文科の講義錄にも共に執筆し、就任の時期は少し私の方がおくれてはゐるが『早稻田文學』の編輯にも提携して働き、また明治三十年四月丁酉文社を組織して、伊原青々園、小杉天外、水谷不倒の諸君と『新著月刊』の經營にも一緒に當たつた。こゝまでのところ、およそ六七年間は、影の形に伴ふやうに同じ道を進んだのです。それ故、同君に就いては、私ばかり知つて、他の人は全く知らぬ事も多少はあるかも知れません。今となつては、二十年前の舊詩巻、十人の酬和九人は無し、ともいへる老の身の繰言として、つまらぬ事かも知れぬが述べさせて戴きます。

私が始めて抱月君と顏を合せたのは、明治二十五年の三月、早稻田の專門學校文學科の第一期生の第一學年、後半期授業開始の教室に於いてであつた筈である。私は此の第一學年の上半期は英語

政治科に居つて、此の月から文科へ轉じたのでありました。この頃は唯顔を見たといふだけであつたが、廻覽互評雜誌『友垣草子』が仲介の役に立つて、追々と親しくなつた。君と最も仲のよかつた伴武雄（號無得）と寄宿舍の二階、東南隅の室に一緒に居られた抱月君を、折々訪ねて款語するやうになつたのは、二學年の頃からであつたかと思ふ。そして三學年の半ば頃からは、牛込原町の私の下宿に君も移つて來られた。

私は二十二歳頃からの抱月君に交際した譯であるが、その時分から抱月君は、既に一見いかにも憂鬱に見える寡默な深沈な態度の人で、學問上の議論などをしても、三分の一位までは語るが、跡は相手の考察に任せるといふ風であつた。兩手でしつかり兵兒帶を抑へるか、或は左の手は懷中に入れて、右手で帶を摑り、深く俯向いて、殆ど相手に顔を見せぬ程であつた。始終考へに耽つてゐるらしくも見えた。笑つたからと云つて、聲を出して哄笑するなぞと云ふことは殆どなく、細い切長な眼のやわらかな光のうちに、微笑を浮べる位のことであつた。しかし、此の微笑した彼の目には、如何にも人なつツこい所があつて、他を引きつける力がひそんでゐた。堅く結んで、容易に開かぬ脣には、意志の強さを示してゐた。外柔内剛で、盛んな鬪志と戰友の屍を踏んで進む程の邁往

の氣象を、溫和な容貌の裏につゝんでをられた。己れの意見を發表する必要のある場合、これを十分に述べるだけの辯舌はあつたけれども 多辯でも雄辯でもなかつた。口に比べると、筆の方は數等儁拔の趣があつた。けれども、彼の抒情の文章には、常に切々たる悲涼の味ひが多量にあつた。時には、それが絶望的に激冷の調子にさへ沈むこともあつた。素質の然らしめた所も多かつたであらうが、彼の過去の惠まれざる生活からの陰影もつきまとつて居たのではなかつたか。

抱月君は極めて貧困な家に生まれて、苦鬪の間に青年期を過したらしい。東京へ出て苦學する以前は、郷里の島根縣石見國那賀郡濱田町の裁判所か、その附近の裁判所かに書記を勤めて一家を支へてゐたらしい。彼の生れたのは同郡小國村であると自ら『同窓紀念錄』に書いてあるが、その後、家族が同郡濱田町に移つたものと見え、私の『金蘭簿』には彼の自筆で生國の項に石見國濱田町としてある。彼の本姓は佐々山で、同家の長男として生れたのであるが、東京へ出で好きな學問を、したい一念から、佐々山の家嗣を弟の雅一君に讓り、出でゝ島村氏を襲うことになつたのだといふ、當時、君が勤めてゐた裁判所の判事に島村文耕といふ人があつて、君の秀才を知り、自分の養子になるなら、學資を給して東京に出して遣る、といふ勸誘に應じたものであつたらしい。私と同宿時

代に、直接に君の口から聞かされたことであるが、養父の文耕といふ人は、義俠心の強い人で、一旦感激すると他の急を救ふといふ氣風でもあつたが、一面には自分の氣にくはぬ事があると、その反動もひどく、怒れば隨分思ひ切つたこともしかねぬ人でもあつたといふ。何か抱月君が養父の感情を損じたことがあつて、爲めに一時學資を中絶されたことがあつた。それは神田邊の英語の學校に通つてゐる時分のことで、その學資の途の絶えたのを極度に悲觀して、いろ〳〵考へた末、自殺と覺悟をきめ、おぼろ月夜に駿河臺のお茶の水の崖上に立つたことがある、と當人自らの物語であつた。いよ〳〵跳びこまうとすると、俄かに夢のさめた心持ちになつて、遂に決行せずに歸つたのであつたといふ。それに解釋を加へて、「世にいふ死神が離れたといふのは、あの心持だらう」とも語つてゐた。その後もこの養子といふ境遇のゆゑに折々惱まされたことが少なくは無かつたらしい。實家の佐々山家のことも彼の關心事としては輕からぬものであつたらう。彼の抒情の文章がをりをり人生の底に潛む悲涼の流れに觸れたのも、此等の過去の環境から來た暗い影がつきまとつてゐたからでもあらうか。

抱月君の初期及び中期の文例の短いものを一一擧げたい。それは私が前に云つた事の證據にもな

り、又彼の文章は早く既に老成の域に逼つてゐた趣も見えて、なつかしさ限りないからである。早稻田の學園を去る間際に「同窓小志」の小引を彼は書いた。それを引いて見る、

> 咸陽の宮殿も霎時結べばこそあれ誰か蜀山の蒼欝を見て預め鉤ふ簷牙の壯を思はんや一炬の灰燼はた歌舞王孫の迹を埋めて越華今に依々たり人間の事去來集散は偏に春雲の淡きが如く殘夢の捉らへ難きに似て假と觀すれば天地と我と本と泡沫夢幻のみ實と觀すれば三年同窓の友垣も空しく解き去るに忍びず抑も我輩何の因縁ぞ奉侍未見の人を以て花月交觀の明となり軈がてまた萍絮袂を分つの運に遭はんとは惟みるに一旦東西南北すれば幾度の秋風心事差ひ易く好會期し難し今に及で往を溫め來を盟ひ之を約するに三年閲歴を同じうしたる我級の小史を以てし以て覺悟能く命の簸弄するに信せて離合共に遺憾なきを得るにあらずんば老いて塞翁馬の嘆あるべし乃ち同窓記念錄成りてわが級の小志を編す。

之れを讀むと、何となく青年の文章としては、餘りに悲涼の味ひの甚だしいのを覺える。

抱月君は明治三十五年三月八日横濱を出發して洋行の途に就かれたが、同月廿八日付で新嘉坡より私に送られた書簡（『滯歐文談』）に收錄に、

> （前略）今朝當シンガポールに着、赤道を去ること一度何分と申す土地の割には、凌ぎよきやうに候、公園といはず、市街といはず、人間といはず、すべて天地の色彩形式が太陽の猛熱烈光を中心として、之れと苦闘し、之れに虐げらるこの標現を有し、強く、濃く、逞しく、目もさむるばかりなる一面と、傷き、疲れ、倒れて、夢の如く眠れる一面との、奇異たる調和を感じ候こと、今さらながら、初見の日には新らしう存ぜら

れ候、人生の意義は苦鬪か、そも〳〵其の終局は敗殘か、遂にかの印度の古美術、古思想が由來するところなど思ひやりて、今夜は甲板の上に例よりも夜を更かし申し候、ソーファーに凭りて薄風の微涼を迎ふるに任すれば、伏し待ちごろの月、檣頭にかゝりて、夜は一時を過ぎ、對岸に明々する燈影の赤きのみ、我が世さまざ〳〵の夢をさゝくとおぼへ候、……

この短文にも彼の一面の特色がよく現はれてゐる。牛込余丁町の坪内先生の玄關から續いた南向きのお座敷で私どもが抱月君と一緒に机をならべて『早稻田文學』の彙報欄などに執筆する際、をり〳〵實驗したことであるが、抱月君は一日の中に幾回となく長々と兩腕をあげて欠伸をする癖があつた。そして時には仰向に疊にねて、手足を一杯にのばし、如何にも世の中があき〳〵したやうな欠伸をすることもあつたのである。この事は私どもが厭世的欠伸だといふ風に感じたばかりでなく、彼が三省堂の辭典編纂に從事してゐた際の同僚達も、同じやうに感じたといふことを、いつぞや中島孤島君から聞いたやうにも思ふ。しかし抱月君としては別に意味があるのでもなく、仕事に倦怠を感じてする欠伸でもなく、心臓が悪い爲めに自然にさうなるのだと云つて居られたかに記憶する。兎も角、强いところもあるにはあるが、蒲柳の質ともいふべき陰氣な人でもあつた。

文章は硬軟ともに自在で、『支那草子』時代にも女の艶書體の批評文を匿名でかいて、寡默な思索

家、謹嚴な抱月の餘技として、こんな藝もあるのかと同人を驚かしたものである。なか／＼の其頃から隅には置けぬ男であつた。

明治二十九年の秋頃、秋田縣大曲町の素封家、小西傳助君が、私の從弟であり、親友でもある關係から、東京で一大新聞を發行して見たいといふ相談を私に持ち込んだ。私も大に乘氣になつて、第一坪内先生に申しあげて萬事御指揮をして戴くことにお願ひ致し、友人の島村抱月、伊原青々園、小杉天外の諸君、それに私の從兄で小西君とも親戚關係の有明文吉君、その他の有力者、經驗家をも加へて、準備に取かゝる方針で、坪内先生のお宅に我々友人だけの内相談會を開き、新聞の題號まで決定するところまで進んだのでありました。然るに、意外な障碍が起つて、遂に此の計畫が頓挫してしまつた。

その後同じ小西君の出資で、柴田資郎君が同年末頃から、開店した神田今川小路の書肆東華堂から、翌三十年の四月から『新著月刊』といふ文學雜誌を發行することになりました。これは小西君の希望から起つたのです。そこで、伊原青々園、小杉天外、水谷不倒、島村抱月の四君に私も加はり、丁酉文社といふのを組織し、これらの同人が右の雜誌編輯を引受けることになりました。私は

編輯の事務主任といふ役割で、牛込辨天町から神樂町二丁目十四番地の俗に温泉横町と呼ばれる大俗な場所に轉居しました。發行元の書肆と事務上の連絡に都合のよい所を選んだのである。そして拙宅に丁酉文社を置き『新著月刊』の編輯所と致しました。

私が伊原君を知つたのは、明治廿八年九月十五日に第一號を發行し、十何號かで廢刊となつた日刊新聞『時論日報』の新社員顏つなぎの場合、京橋區八官町の同社の編輯室で、齋藤綠雨氏の紹介により面晤したのが、そも〳〵の始まりである。この新聞は三十三年頃に至り『やまと新聞』社長になつた松下軍治氏がやつたもので、一ケ月間位日勤した社員の殆ど全部が、俸給を一厘も貰へなかつたといふ始末。彼は僅か一千圓かそこらの金で、東京の中央で日刊新聞をやり出すといふ程、無類に放膽な冒險者であり、又勇氣ある事業家でもありました。世の中には意外に面白い滑稽な豪傑もあるものだと、車代や辨當料を持出した上に、一錢も貰へぬのは少々つらかつたけれど、世間には豫想のできぬ奇拔な事もあるものだ、と何となく嬉しくなり、俸給支拂の催促をする氣にもなれなくなり、唯笑つて袂を分つことになりました。（昭、八、四）

四、『早稻田文學』から『新著月刊』へ —下—

――『時論日報』――緑雨、青々園、天外と『二六新報』――抱月の批評家月旦と緑雨の逆襲――柳浪、薇陽と予との向島松壽園隱棲の頃――

明治廿八年九月創刊の『時論日報』は日刊新聞としては殆ど類例まれなる短命ではあつたが、私どもの個人關係から見れば、此の新聞はかなり意味の深いものであつた。前にも一寸云つた如く、社長は信州人松下軍治氏で、齋藤緑雨氏が編輯部の主幹、野崎左文翁が顧問格、それに小杉天外、伊原青々園の兩君と共に私も社員に採用せられた。伊原君と私とは日勤の定めであつたが、天外君は小說專任といふので出勤はしなかつた。私を推薦したのは緑雨であつたけれども、同氏に紹介の勞を取られたのは、多分坪内先生であつたかに思ふ。緑雨氏との初對面は明治二十五年の一月中、本所區緑町三丁目二十番地四號の同氏の寓所に居られた天外君を訪うた時であつた。當時私に早稻

田の英語政治科の第一學年の前半期を終らうとした頃で、もはや內々文科に轉向の決心をしてゐた時分であつた。天外君が前年の十二月頃から綠雨氏と自炊生活をして居られたとの話であつた。同君を訪ねてゆき自然同室に机をならべて居られた綠雨氏と面會したといふに過ぎない。隨つて綠雨氏としては當時私と顏を合せたことを忘れて居られたのかも知れぬ。兎も角同氏と親しくなつたのは『時論日報』からである。綠雨といふ雅號が既にさうであるが、初めは江東みどりと云つて居つたのも本所綠町に幼年時代から長く住まれた所を追慕するの情から來たものであらう。上田萬年氏が曾て『新小說』に書かれた「明治十七年前の齋藤綠雨君」の一節に、

> 私が綠雨君、卽ち賢ちやんと知り合ひになつたのは明治の十三四年の頃からで、その前からお互に顏は知つて居ましたが、交際は致しませんでした。
>
> 綠雨君の父御は齋藤利光といはれたと記憶して居ます。始め伊勢から上京されて、本所へ來られた頃は、綠町一丁目の故坂谷朗廬先生の舊邸跡へ出來た某病院の留守居をして居られたと存じます。其の後、藤堂堯饒公(今の伯爵の先々代)の御附となつて此老公の散歩の時などには、何時も其御供をしてあるいて居られました。此御附となられると同時に、綠町三丁目の藤堂の長屋で(これは今でもありますが)あつた所へ移られた。

云々と見える。此の綠町三丁目の長屋は私の始めて綠雨氏と面會した家と同じものであつたか否か

は分らぬが、私の訪ねた時の家も何となく長屋風の建物であつたと記憶する。本所區綠町といふものに綠雨氏が强い執着を持つて居られたことだけは確かである。しかし綠町に於ける天外君等との自炊生活は僅か二ヶ月間で解散したといふことである。

『時論日報』社に入るやうにとの交渉を綠雨氏から私が始めて受け、その件につき明治卅八年の九月の初め頃、氏の本鄕區元町邊の下宿を尋ねたのであつた。女中に案内され二階の氏の室に入つて見ると、氏は小さな柳行李を枕にして橫臥てゐるのである。病氣でゞもあるかとも思ひ、一應の挨拶をしたが、氏は臥たまゝ頭を少し動かしたきりで、起き上らうともせず、そして一言も口を開かぬ。たゞマジリ〱例の大きな目で、私の樣子を見てゐるといふ態度だ。どうも病氣ではないらしい。私は少々ムツとしたが、生活問題も後に控えてゐる際だし、直ちに憤つて立ち去るのも餘り智慧がなさ過ぎる。どんな事をするか暫く見てゐてやれといふ料簡で、ジツと堪へて氏のぎよろりとした目の動きやうを眺めてゐた。一寸おどかして見る氣でやつた芝居であつたらしい。私は氏の顏をながめながら竊かに森文部大臣を刺した西野文太郎の寫眞によう似てゐるなと物騷なことを考へてゐたものだ。しかし三十分ばかりで起きあがつてから後には別に變つたこともなかつた。事實、氏の

顏は西野にどことなく似てゐたのである。けれども、笑ふと口元に如何にも愛嬌があつた。その大きな眼には確かに鋭い相をあらはしてゐた。何しろ小心な神經家なので、なか〳〵强さうなことをり〳〵吐いたが、時々氣の毒な程しよげたり、てれたりして頗る滑稽なこともあつた。或時何か文壇に對する不滿不平を荒い語氣で熱罵し、例の皮肉な警句まじりで辯じてゐる最中、氏が愛藏の桑の莨箱にどうしたはづみか、長煙管がコツンと當つた。その大事の、大事の莨箱に少々疵がついたのである。思はず氏はあはてゝ共の疵痕を、さも〳〵怨めしさうに見つめて、そして如何にも殘念さうに撫でまはしたものだ。私はそれを見てゐて如何にも緑雨らしい細心の所が見えて我れ知らず不圖微笑してしまつた。それを直に覺つたものと見えて、莨箱を撫でまはしながら「お家の重寶をだいなしにしてしまつた」と云つて苦笑したものだ。その顏つきが實に長く忘れえぬ印象を私にのこした。

伊原靑々園君と私が初めて對面したのも『時論日報』社の編輯室であつた。その紹介者は緑雨氏であつた。新聞界の老將野崎左文翁とも此の時始めて知合となつたのである。

天外君と私とは同じ秋田縣仙北郡出身ではあるが、私の生れた排田村と同君の郷里六郷町とは、

一里餘の距離があり、私は十一歳の春から十四歳まで横手町にをり、その後は二十歳頃までは多く東京その他の他郷で生活したので、天外君とは故郷で知合になる機會がなかつたわけである。一旦徴兵檢査で秋田に歸り、明治二十二年の二月頃、早稻田專修英語科に入るため、再度の上京をした際、鄕里の先輩の紹介で本鄕元町邊の下宿屋に訪ねて始めて知る人となつたのである。そこには同鄕の學生數人も居つたのである。

靑々園及び天外の二君は『時論日報』社創立以前から旣に綠雨氏とは親しい間柄であつた。直接兩君に書面で最近お尋ねしたところに依れば、靑々園君は、明治廿七年『二六新報』に居られた際同紙改良の爲め綠雨氏を招聘してはとの噺が起り、社長秋山定助氏が自身に綠雨氏を訪うて入社せしめたものであるといふ。この時に他の社員と一緒に、綠雨氏に遇うたが初對面であつたとのことである。そして當時の『二六』社の編輯長は福田和五郎氏であつたけれども、實際編輯を取纏め活版の大組を擔任したものは與謝野鐵幹氏であつたといふ。靑々園君が多勢の社員のある中に、特に綠雨氏と別懇の間柄になつたのは一つには文筆に志があつたのと、また當時兩氏ともに本鄕駒込にすんでをられ、その住所も近く、社への往復に始終道づれになつたりしたので、特に親しくなつた。

その上お互に話が合ふところから頻繁に出入したからであるといふ。

綠雨氏入社の後、天外君に小説を書かせ、自ら雌黄を加へて揭載したといふことである。この關係から折々天外君は同社を訪はれたので、綠雨氏の紹介により同君と靑々園君とが知合になつたかと思ふとのことであつた。

天外君が綠雨氏との初對面は明治廿五年の秋頃であるとの來簡に接したが、天外君の「醉骨錄」「五ツ紋」「哲學者」の三小篇に綠雨氏の「賣花翁」を加へた合著『反古袋』を綠雨氏の斡旋で廿五年の三月に春陽堂から發行せられたと云ふのであり、岩城準太郎氏著『明治文學史』に依れば天外君は明治廿四年『國會』新聞に「改良若旦那」の短篇を揭げたと見えるから、綠雨氏を始めて訪はれたのは恐らく赤城下時代の廿四年頃ではたかつたか。更に垂敎せられたい。

私が『新著月刊』の編輯事務主任になつてから『早稻田文學』記者として自然思ふやうに働けぬことになつたが、それでも明治三十年の八月までは社員の一人であつたことは同誌第三十九號（八月一日發行）の『新著月刊』に揭載した廣告文に「專任記者は坪內逍遙、島村抱月、後藤宙外、伊原靑々園、綱島梁川」とあるので知られる。その後も關係は續いてゐたものと見え、同年十一月發

行の『早稻田文學』第七年第貳號に掲載の「心中天網島」合評の連名には、萮々園、宙外、抱月、不倒、鐵笛、操山、梁川、逍遙、迷羊となつてゐる。しかし何時、私が『早稻田文學』社を退いたのか、今確かに記憶はない。二十八年の夏の始め頃、鄕里から老母と姉が出て來たので、私は急に世帶を持たねばならぬ境遇となつた。そこで、新聞はあまり好まぬのであつたが、『時論日報』に入る氣になつたものである。が、その際には一時、『早稻田文學』社を脫退したのであつたか、或は一ケ月に二三日の出勤ですみ、跡は原稿を送りさへすれば事足る程度のものであつたから、社長逍遙先生の寬大な御諒解の下に、そのまゝ關係が續いて居つたものか。その邊のことは今はハツキリとは記憶して居らぬ。

『新著月刊』の第一號は明治三十年四月三日、神武天皇祭の日を以て發行し、同日向島、中の植半で、文壇及び畫界の諸名家二十餘名を招待して、披露の宴を張り、かなりな盛會でありました。

この創刊祝賀會を終つた後、私は小杉天外君や寺崎廣業畫伯などゝともに隅田川に船を浮べ、上流に漕がせて心ゆくばかり遊んだのであつた。これが廣業畫伯と親密の間柄となる端緒であつたやうに記憶する。或は此の事は少し時がおくれて、明治三十二年六月石橋忍月氏が長崎へ赴任のため

東京を去られる際、場所は同じ向島ではあつたが、枕橋の八百松で送別會を開いた時のことであつたか、その邊の記憶はもうおぼろになつてしまつた。

當時『新著月刊』の賛助員となられた方々は同誌廣告文に依つて見ると、泉鏡花、長谷川二葉亭、磐田綠堂、大町桂月、渡邊金秋、梶田半古、高安三郎、坪內逍遙・饗庭篁邨、三木天遊、宮崎湖處子、鹽井雨江、繁野天來、廣津柳浪、鈴木華邨の諸氏であつた。

同誌第一號掲載の主なるものは、坪內逍遙先生の「二葉楠」(脚本)、「めなしちご」水谷不倒、「化鳥」泉鏡花、「白あらし」島村抱月、それに私の「無相窟」(以上小說)「雨峯鳥語集」繁野天來(新體詩)等であつた。

その「時文」欄は抱月君の擔任で、第一號には「發刊の辭」「社會小說論」「警視廳の詩眼」「批評家月旦」の四篇を掲げた。その「發刊の辭」にいふ。

望むらくは天上一味の火を將つて、彼の石の如く氷の如き俗衆の腸を熔さんか。望むらくは政治道徳の絆を切つて、空を行く天馬が鞍坪に世の成る樣を觀ぜんか。望むらくは飜覆の塵を掃ひ門戸の階を平べ、瞼を把つて造化の平等を談ぜんか。およそ此等の事、吾等の懷抱に近しと雖も、標して一家の旗幟とたすは僭なるべし、吾等はたゞ此の途に躬行精進せんとするのみ。言うて而して行ふ、しばらく是れをして吾等の紋所たら

らしめよ、丁酉文社起こり『新著月刊』出づるの意、豈他あらんや。記して發刊の辭に代ふといふ。

また「批評家月旦」には當時の文壇に於ける各方面の主なる批評家をほゞ網羅しつくした觀があつた。後の文學史家の參考にもと考へ、その人名を列記して置く。

佐々木向雲(『日本新聞』)、原抱一庵(『萬朝報』)戸川秋骨(『讀賣新聞』)、大町桂月(『帝國文學』『中學文集』『八紘』)、依田學海(『めざまし草』)、田岡嶺雲(『青年文集』『江湖文學』『日本人』)、高瀬文淵(『青年文壇』)坪内逍遙(『早稻田文學』)塚越停春(『國民新聞』『國民の友』)、内田不知庵(『時事新報』)、上田敏(『帝國文學』『文學界』)、野口寧齋(『太陽』)の「讀語陽秋」、緒方流水(『世界の日本』)山路愛山(『國民之友』『國民新聞』)正岡子規(『日本』『日本人』)、幸田露伴(『新小説』)、姉崎嘲風(『太陽』)齋藤正太夫『めさまし草』)宮崎八百棲(『國民の友』)森鷗外(『めざまし草』)、森田思軒『めさまし草』)の二十一家。

この人々に對する短評を試みたものであつた。當時問題をひき起した齋藤正太夫氏(綠雨)に就いての短評を見ると、

「厚村の筆端『めざまし草』にきらめく。當に衣きせぬ嘲罵、寸鐵殺人の警句、江戸通、微所細目の穿鑿、吾人はたゞ此の範圍に於て氏を見んと欲す。」

今日より見ても如何にも要領を得た適評で、簡潔ではあるが鋭く灸所を貫いてゐる。この評を讀んで綠雨氏に頗る感情を損じ、『讀賣新聞』や『文藝倶樂部』及び『太陽』で『新著月刊』及び抱月

君の攻撃文を發表したものである。抱月君はなか〳〵負けて居ず、九月發行の『新著月刊』の第六卷に、『解嘲』と題し、

綠雨氏の「おぼえ帳」の中に我が『新著月刊』に載せたる泣菫が「空城白日長」を罵して、曰はく「おまへは濱」に擬したる新體詩を何やらに見たり、作る人も作る人なり、載する人も載する人なり、調子といふもの壱もわきまへず。「小町おもへば」の歌を取れる如きも唯何かなしといふに過ぎざるべし。云々、こゝに調子といふは奈何なる意か知らねど、若し例の「通では先づおれだらう」主義のあさましい了簡から割り出して、端唄の節を論據としての非難ならば笑ふべし。詩の律格と之れを唱歌する上の節とは決して混ずべからず。……氏よ、他を嘲らんと欲せば、少しは學問をも、など今更野暮は云はねど、其れ程に通がりたくば、矢張、例の膳と善との別でも論じて、菊之助と同宿せるを榮とするとか、何とか、罪のない逸話でもかく方、安全の策なるべし。

綠雨が通の奈何なるものなるかは「おぼえ帳」(「太陽」所載)第五を見て知れ、柘榴の田村屋が塩煎餅屋だの島原は新高町だの、西應寺は町の名だのと例へたてゝ「都人ならでは解き難き」ものたりと誇り顔に云へるなど片腹いたし。田舎者が自分の白犬(しろ)の糞と隣の赤犬(あか)の糞とを臭ぎわけるを自慢すると何ぞ選ばん。

と痛烈に罵倒し去つたものである。これは綠雨氏に取つては確かに心臓を刺された程の苦痛を感じたに相違ない。この問題について膝詰談判にでも及ぶつもりであつたものか、私の不在中拙宅を屢屢來訪されたものである。當時私は實のところ旅行と稱して、向島の白鬚神社のうしろに在つた松

壽園といふ某氏の別莊で、下宿屋と鳥料理屋を兼ねてゐた所に廣津柳浪、水口薇陽の二君とかくれて、原稿を書いて居つたのである。こゝで私は翌卅一年一月に發表した「思ひざめ」を書いたのである。神樂町の自宅は場所柄として種々の訪問客が頻繁に襲うて來るので、それを避けて向島行を決行したものであつた。

この私の向島へ逃避の留守宅へ綠雨氏が『新著月刊』へ私が筆記して掲載した「作家苦心談」の綠雨氏に關係のあるものに誤があるといふので、その訂正のため四回も拙宅を訪ねられたといふことは後になつて私は知つたのである。しかしから頻りに拙宅に參られたのは、實は「苦心談」正誤の問題ばかりではなかつた。私をつかまへかねた綠雨氏の鋭鋒は、一轉して靑々園君の方へと向つたものである。當時この件について同氏へ綠雨氏から送つた書簡數通、この頃、靑々園君から、この稿をつくる參考にもならう、と惠贈せられたので、その頃の事情が一層明かになつたのである。同君の厚情に對し、特に感謝して置かねばならぬ。

明治三十年九月八日付で、綠雨氏から靑々園君への書面にいふ。

新著月刊只今一讀

愚鈍なに堪へたり學問せよなど小生大に叱られ申候

「おまへは資の」に就てはいかにも小生は節のことだけ申候なれどもそれはよほど大目に見るつもりに候律格と申すことゝ御拵出しに相成候はゞあの詩はいよ〳〵わるくなり申すべく候

都人ならでは云々と記し候ため通のいかなるものなるかを知れとこれも御叱りに候へどもあれは通を揮廻し候には無之一葉女史も随分の變通家にて凝つては思案に能はずの傾有之候によりわざと擧げたる儀に候其證據は次の項，何かといふと太吉の名の出ることを書添候にて明瞭と存候

元來おぼえ帳はなるべく批判めき候語を避け候考にて入用の節は種々輕いことゝに致置候先日も申上候通りもはや十二月の迄もしたゝめ遣はし候譯にていゝ事ともいわずわるい事ともいはず唯ずん〳〵と記し候過日坪内君が「君がおぼえ帳をよほど區別して書いて居るやうだがあれはいけない人は區別して見ぬだらう」と被申候こと今更おもひ當り候

以上は貴兄へだけの御話にて丁酉文社に向つて答へやうとおもへばいづれ其やうには致候へどもさて彼所謂(「新著月刊」第六號所載の「詩文」中の一篇)の文には何だか一種の毒氣あるやうに小生は見受け候これ即ち先日申上候行違ひの一條が多少根を持つて居るのかと存候

攻撃は結構に候澤山願度候「殺されるにも資格がいる」わけゆゑ小生は少しも攻擊を恐れ候には無之候されど何か物の挾　候やうなるは攻撃する方もされる方もまづいかと存候つまりは御互ひに極端の人身攻擊をやれば埒の明くことに候へどもさうした處でどこに益があるやら小生にはわからず候多分は傍觀者の益と存候

小生が忍ぶと申候おもたる原因はここにあり候

決して小生は辨疏致候にはあらず泥仕合がいやたるのに候先日申上候通りの事實にて小生より度々足を運び居り候にそれを只々わるずみなされ候なればこれ程わかりきつたることに泥仕合はいやなるのに候もとより

小生はいゝ子になりたいではなしどうでも御勝手といへば御勝手たれどそれの揚句が御同様御交際の上に迄
妙なものを置かねばならぬやうになりては實以てつまらぬ話と存候
それよりは斯く／＼の事あり故に斯く看做すと明らかに小生に御聞かせなされて其上にて切るとも突くとも
なされ候てはいかゞや俗に申す一つ鍋のものを喰ひ候御同様の間にそれもいへぬといふこともあるまじくと
存候
先日の書面も丁酉文社の御仁には御見せ相成候ても苦しからずことに二ケ月有餘ウッチャラカシにて其上卑
劣漢などといはれて猶斯く御相談をかけ候には小生もよほどの大理由を有し居候儀に候早々

伊原君　　　　齋藤

その眞劍さとその強いやうな弱いやうな、そして綿密で行屆いてゐるところが見えて、綠雨氏の一側面がよく寫し出されてゐる。今より見ればたわいのない問題とも思はれようが、當時にあつては雙方眞摯な爭ひでもあつた。いづれにしても、三十七年前の一夢に過ぎぬのである。

また同年十月十日付で當時本鄕丸山新町の下宿屋に居られた綠雨氏から靑々園君におくられた書簡にいふ。

夫御歸京はあるまじくと存候へども只今新著月刊一讀例の手紙好きの癖とて又々したため差出し申候
ひとり來て云々の事おぼえ帳にしるし候最近の太陽に出で居り候貴兄も御用なにたるとわかり居れば敢て記
しは致さゞりしものをと存候

鳥邊山のお使傳兵衛云々と御記し相成り候は御見えちがひにあらずやと存候
随感随筆に妙なことと見え申候小生へあてゝのことかと邪推か知らねど考候貴兄へ書面を差上候が「狂奔して仲裁を求」め候ものにや坪内君と十年來の交誼上相談に参り候か「臺所口へ廻り」候ものにや先日も申上候通　御「攻撃」は結構に候へども「御遠慮」はいかゞやと存候
更に念のため申上候先日の書面は御仲裁などゆめにも願候にては無之唯小生が好意のつもりにて正誤云々と申入れ候ことを横喙とか小細工とか先進（少生によりてゝ先進）の手先でゞもあるかのやうに仰せられ候が心ゆかざると次には御攻撃はいくらあつてもかまはねど御互様の私交を傷り候迄には及ばざるやに考候との二つより申上たる次第に候
併し小生はかゝる鬱憤消散主義に改め候により何と言はれても自分のことなどを活字にはせぬつもりに候「とわもての箭が落」ちるぐらゐのことにて溜飲が下り候たらば澤山御下げあるが宜しかるべくと存候
「意氣沮喪」はおもしろく候いかにも小生は沮喪を望み居り候たゞもうおめでたい人になりたくと昨今は心掛け居り候たゞ小生に一の長き目的ありて力足らぬため今日迄くだらなくすごし來り候ことは貴兄なり天外氏なりほゞ御承知と存候に其方々の結社よりこんな事をいはれ候だけを案外と存候しかしそれもすぐ消散に候
旅行と讀書と借金済しとがこれからの小生の任務に候やつとここ迄漕ぎつけ候わけと漕ぎつけねばならぬ譯とは又ゆる〳〵の御話に可致候
折を得て小生もあがり申すべし乍遠方御ひまの節貴兄も御出かけ被下度候浮世噺ばかりといふことに致度候沮喪のほど御驚き下さるまじく候　さて又この手紙迄も「臺所口へ廻りて婦女子の態を學ぶ」ものと御

みとめあらば是非もたし何處迄も御聞へにあづかり可申候　早々

十日

綠　雨

菁々君

この書簡中に見える「隨感隨筆」なるものは多分私の執筆したものかと思ふが、このあたりの同誌は手許にないので確かなことはわからぬ。その後この葛籐は程よく解けてしまつた。私が『新小說』の編輯に移つてからのことゝ思ふが、野崎左文翁が謄寫し、假名垣魯文翁が自筆の序文に、「蟹麵屋大人か寫し得られし百樹の翁が舊稿を見て、あみ結ぶ蜘の糸まき繰返しふみわたるべきかけはしそ是、佛骨老人」と卷頭にしるした山東京山が著『蜘蛛の糸巻記』を綠雨氏から私に贈られたのを、今も襲藏してある。その卷末に、

この書先年左文君より予に贈られしものなり今又宙外君に贈るにのぞみて

燕子花そへて一筆まゐらする　綠　雨

亡き人の筆の跡を見るにつけ、當時のことがいろ〳〵に思ひ出される。綠雨氏は明治卅七年四月十三日、本所區横網町一丁目十七番地金澤たけ方で、寂しく易簀したのであつた。三十七年前の、あの頃の友人で、今現存するのは極めて稀れになつたことも感慨の一つである。

『時論日報』のことあつて六年ばかりの後、明治三十三年頃『時論日報』社長であつた松下軍治氏が再び旗を揚げて『やまと新聞』社長となつた。その頃緑雨氏は以前のことを考へ出したものと見え、自分の責任感から出發して多分松下氏を說いたものかと思ふが、私や靑々園君その他へ松下からの挨拶のしるしだとかいふことで、菓子料十圓也を持參して屆けて吳れたこともあつた。始終金に苦しみ下宿屋の淋しい獨身生活をつゞけて若くして終りを取つた。家庭的には極めて不運な人であつたのである。この淋しい獨身生活の下宿住ひが、緑雨氏をして必要以上に頻繁に知人や友人に手紙を書かせるやうにしたものかと思はれる。自分も手紙を書くのを好きなことが一つの癖であると認めてゐる程に、よく手紙を書いた人であつた。（昭、八、五）

五、丁酉文社時代（一）

――作家苦心談卽諸名家初對面錄――紅葉山人及び其の門下――鏡花、風葉、秋聲、春葉――紅葉のむつき仕合とむつき考――

丁酉文社は明治三十年の干支から取つた社名で、伊原青々園、小杉天外、水谷不倒、島村抱月の四君に、私を加へた五人で組織したものであつた。その機關として文藝雜誌『新著月刊』の編輯を此の社が擔任し、書肆東華堂から之れを發行せしめたことは、既にその一端は述べた。この雜誌の第一號を同年四月三日發刊するに當たり、編輯方法に新機軸を出したいといふ社員の考へから、いろいろ評議の末「創作欄」に小說、脚本、新體詩等を收め、「時文欄」には評論及び「作家苦心談」を收めその外に「梨園欄」と「社會欄」とを設け、前者は專ら青々園君が擔當することになり、「社會欄」には「走馬燈」その他、隨時適當な標題の下に、各方面の名人巨匠の閲歴談や趣味の僅かな悲

間の雜話を採錄する方針で、この欄も主として伊原君の活動の舞臺であつた。が、をり〳〵は私も走せ參じて加勢をしたものである。「作家苦心談」だけは私が專ら引受けて馳せまはり、時には青々園君の援兵を得て、どうにか餘り失態をあらはさずに、誌面を賑はすことが出來たのであつたかと思ふ。「梨園欄」に至つては青々園獨得の穩健な觀察と周緻な調査とを、痒いところに手の屆く筆で縱横に書かれたので、同誌の特色として異彩を放つたものであつた。これと前に既に例を擧げてある通り、抱月君の潑剌たる青年の意氣と、犀利にして雅馴な筆とを以て、理路の透徹した文壇時事の評論をやつたのとは、相俟つて二つの大なる同誌の呼物であつたのである。

右の「時文欄」中の「作家苦心談」の全部と「社會欄」の「走馬燈」及び「梨園欄」に載せたものとの或部分とを取纏めて、明治三十九年九月『唾玉集』の標題で、青々園君と私との合著にして春陽堂から出版した。これには青々園君が『都新聞』に書かれたものも若干加へられてある。が、とうに同書は絶版となつて、今は殆ど知る人もあるまい。

この「作家苦心談」は私に取つては「諸名家初對面錄」ともいふべきものであつた。當時の第一流の諸大家を訪問して、此等の人々の著名な創作の成るに至つた苦心談を聞かせて貰ひ、その筆記

を新著月刊に載せたのである。この動機からお尋ねして、初めてお目にかゝつた方々が多かつたのである。

今この稿を書くのに、先輩の中には普通の場合から云へば、先生の敬稱を用ふべき人も若干はあるが、眞の師匠にあらざる限り、便宜上一様に某氏と云ふことにして置く。

明治三十年五月頃、「作家苦心談」の筆記のために、牛込横寺町の尾崎紅葉氏を訪うて、初めて面晤することを得たのである。私は明治二十年頃からの氏の作は大抵讀んで居り、才人であり、好男子であることも聞いて居りましたが、親しく其の人に接して話を聞いたのは、この時が初めてであつた。かねて想像したよりは、强健さうな體格で、身の長も尋常の人よりは高い方であり、態度も何となく男らしく、所謂キビ〳〵したサツパリとした男ぶりに見えた。文人によくある色の生ツちろい、弱々とした優男ではなかつた。眼のぱツちりした明るい顔で、活氣にみちて居られた。これは後に門下の某君から聞いたことだが、徴兵檢査の際には砲兵科の甲種合格であつたと云ふことだ。これを以て青年時代の同氏の體格と健康との程度が察しられる。

この折には氏の作、「紫」「伽羅枕」「おぼろ舟」「三人妻」「色懺悔」「南無阿彌陀佛」「此ぬし」等

當時いづれも評判の高い作について、その創作の際の苦心談を承り、拙いながら筆記を致したものであつた。そして文學に就いての大體の意見や創作する時の態度、心得、執筆の順序といふやうな事のお話も聞いたのであつた。氏が無名の一書生たる私を引見して、實に親切に、寧ろ胸襟を開いて極めて打とけた態度で、こちらで要求するところに快く應じて話して呉れられたのは、當時として存外な厚遇として喜び、長く感謝した次第でもあつた。

紅葉氏の文章や筆蹟は誰も知る通り、頗る有名なものであるが、その座談のすぐれて居つたことは、文章以上、筆蹟以上であつたと私は考へてゐる。興に乘じて巷間の瑣談、例へば寫眞の失敗談であるとか、狩獵の失策談であるとか、舊友との旅行談なぞといふ、極めて罪のない閑談にも、敢て巧を弄することなく、自然に流れ出る話術の妙は、まるで實際その地に臨んで、その事に接した程に、聞く方の頭に目に見る以上、事件なり、物象なり風景なりが顯前し活躍した。その技倆が具つてゐた。勿論青年時代には相當に修練もし、努力もしたものであつたかも知れぬが、私どもが同氏を知るやうになつた頃には、もう殆ど努力の痕も見えぬ程に老練の域に入つて居られた。いつぞやのお話に、

「どうも我々のやうな居職は運動が足らんものだから、體を惡くする傾があつていけませんね。あなたは何か運動をやりますか。私は少し弓をやつて居るが、忙しくなると、つい止めたり、來客が多いので、自然なまけたりして長く續かんで、いけませんね」

と云はれたことがあつた。

明治三十年頃は確かに弓術をやつて居られた。これは晩年まで繼續して、をり〳〵やられたものと見え、同氏の明治卅四年一月元日から、十月十日までの日記である「十千萬堂日錄」にも、ほんの數度ではあるが、「一射を試む」といふ記事が見える。私がまだ面會しなかつた頃の出來事ではあるが、門下の某君から聞いたことに、紅葉氏はその長男――今の尾崎夏彦さんの兄さん――の生れた頃は、弓術にかなり熱心で、弓之助と命名された程であつたといふ。この弓之助さんは程なく亡くなられた。その時、氏は惋惜の情にたへず、

乳すてに出ればおぼろの月夜かな

の吟があつたといふ。

私が頻繁に横寺町の紅葉氏邸にお伺ひするやうになり、門下の泉鏡花、小栗風葉、徳田秋聲、柳川春葉の諸君とも親密になり、諸君の寄宿舍とも云ふべき簞笥町の藻社の本陣に出入することにも

なつたのは、明治三十年の夏の頃からであつたと思ふ。鏡花君だけは既に別に一家を構へられて、此の紅葉氏の所謂「塾」には殆ど居られなかつたと記憶する。

藻社といふのは、紅葉門下の人々の團體に紅葉氏が特に命じた名稱ではあつたけれども、餘り一般には用ひられずにしまつた。紅葉氏の門下の人々をも同氏の友人等が組織した硯友社員と世間が混同してゐるのを避けしめる意味もあつたかと思ふ。箪笥町の塾と云つても、町名こそ違つて居つたけれども、紅葉邸の狭い後園からつゞく崖のすぐ下にあつたものだ。殆ど同邸の屋敷内といつてよい位のもので、別棟の離れ座敷と云ふ程度の近距離にあつたのである。

その時分は紅葉氏は、もう弓術の方はあまり熱心にはやられぬものと見え、ねつき仕合に頗る凝つて居られたやうに記憶する。確か三十年の夏の頃かと思ふが、麹町區四番町一番地の武内桂舟畫伯邸にねつきの他流仕合大會といふものが開かれた。紅葉氏と桂舟氏とを中心に、兩氏の門下を網羅し、それに兩氏に親交ある人々をも來賓として迎へ、桂舟畫伯みづから地口行燈の繪をかき、紅葉氏はそれに地口の文句を揮毫するといふ、すばらしい意氣込で、盛んにねつきの仕合を行つたことがある青年壯年立ちまじつて、中には諸肌ぬぎになつたり、後鉢卷で大童（おほわらは）になつたりして、ねつき

を揮ふといふ勇壯な競技をやつたものだ。この時、賞與は某子爵の令嬢とかいふ妙齢の美人の手から贈られるといふので、仕合に一層氣あひがかゝり、若い人々の血を湧かせたものだ。何しろ桂舟畫伯の園遊會をかねての催しであつたので、かなりのお祭騒ぎでもあつた。

その頃、桂舟畫伯が取組のねつきの寫生圖に紅葉氏が俳句を、題したものを、私が現に藏收してある。

素はだしの土ふみしだく涼しさよ

紅葉氏が何事にせよ、一旦關係したら、尋常人の及ばざる熱心と執着とを持つ人で、所謂凝性（こりしやう）の人であつた。ねつきに就いても單に遊戲として打捨ては置かず、相當研究の態度を以て臨んだもので曾て故小栗風葉君から贈られた紅葉氏自筆の「ねつき仕合、及びねつきの分類考」ともいふべきものを、今も私は珍藏してあるから、其の原書の通り左に紹介する。

仕合場を坪といふ。

打込名目の事。

打込を分ちて二樣となす。

一　桂打の事。

二　鍬打の事。

（雷外註）柱打とは、まつすぐに打つこと、鍬打とは斜に打つことをいふ。（挿圖は略す）

力に强弱の二つあり。强きはグサ、弱きをヨロケと云ふ。

鍬打の構三つ。上段鍬、中段鍬、下段鍬、鍬打の方向四つ、前後左右、前を向つ鍬、後を本鍬、左鍬、右鍬、

故に一の鍬打は構と方向との名を云ふ、譬へば向つ上段鍬の如し。

仕合の打込には三様ある事。

柱打に向ふに鍬打。

鍬打に向ふには柱打と鍬打。

柱打に向ふ鍬打の事。

强きを打つを當ると云ふ。

弱きを打つをたゝくと云ふ。

强きを仆すをバッサリと云ふ。

弱きを打つを蹶放すと云ふ。

弱く打つたるをヌカリを打つ。

强く打つたるを利を打つ。

相當に打つたるを手頓を打つ。

仆れたるを當てるをトヾメを打つ。

故意に弱く打つを　遊びを打つ。

死を決して當るを　捨身を打つ。

尖の損ずるを砕けると云ふ。
打損じて倒れたるを打倒れ、倒れてトヾメを免れしを跌返すと云ふ。
打折るをひしぐ、自ら折るゝを(　)(　)(　)
トヾメ強くして敵幹を飛すを刎首といふ。
此時は本鍬たるべき事其品三あり。
一　揺首は末(ウラ)を打つ。
一　胴打は眞中を打つ。
一　足(ソク)薙は根方を打つ。
鍬打に向ふ柱打の事。
此時は前後左右の四と上中下の構とあれば打方自ら三十六様の事。
本鍬の時は
本上段柱首、本上段柱胴、
本上段柱足。
本中段 ── ──
本下向 ── ──
九
向鍬の時、
向上段柱首、──、──
九
左鍬の時は
同く九様ある事。
右鍬の時は

同く九樣ある事。

逗を打つ（近）

拐キ出し（遠）

別に圖解があつて、ねつきの形狀に隨つて一々名稱を付し、まつすぐなるを一文字、一とくねしたるを一癖（ひとくせ）、その他リャンコ、弓形、亂れ、件、覗き、大覗き、亂杭（ラングイ）、虎狩、清正公、伸打ち（のびうち）、清正公くづし、威長高（みだけだか）等の名稱を付し、更にねつきの部分名稱をもしるし、握り、握り下、貞ネ、根（ね）等に分ち根を除いての總稱を柄（つか）といふ。又根の形狀によりて分類し、長根、鉈目（なため）、尖り、打切り（ブッキ）の四つとしてある。細く長きをヒョロ、太く短きをボテなどゝも見える。

紅葉氏が隨分の交際の範圍がひろいので來客も極めて多かつた。數多くの俳句關係の會、その他寫眞旅行の會、狩獵會などにまで參加して居られた。そして本領の小說を書くことの外に、新聞雜誌の懸賞俳句の選評、行屆いた各門下に對する指導やら、お世話やら、これ等の爲め意外に多忙な生活を送られて居つたのである。その間に右のやうに「ねつき考」といふやうなものをも作られたところを見ると、忙中の閑を見出す餘裕もあつて、多趣味の上に凝性の人であつたことが十分に窺はれる。（昭、八、六）

六、丁酉文社時代 ―二―

――牛込横寺町――紅葉山人の「十千萬堂日錄」――紅葉の書齋――文章の推敲――口就社からの月給袋――家塾藻社――米坡の白髮染――

牛込の横寺町といへば、明治二十年代のなかば頃から、同三十六年頃までは、少くとも東京の操觚者および出版業者などの通用語としては、紅葉山人、もしくは尾崎紅葉邸といふ意味になつてゐた程に、有名なものであつた。紅葉氏は硯友社創立時代は麹町の飯田町に住まれ、それから牛込に移つてから三度轉居し、その三度目に横寺町に落着いたものであつたといふ。そして終焉の時まで住みつゞけられたものである。が、しかし何時横寺町に居を移されたのか、私はまだ確かな事を聞く機會にあはない。最近泉鏡花君と德田秋聲君とへ、書面で兩君と紅葉氏との關係の開始された年月を問ひあはせたところ、鏡花君からは、明治二十四年十月に紅葉先生へ入門したとの回答があり、

又秋聲君からは、

（前略）私がまだ四高にゐる時分、泉君が紅葉先生の門人になつたことを耳にしたので、（明治）二十四年は確かと存じます。鏡花君は脚氣か何かで、其後歸國してゐたのを、先生が京都へ行つたとき、呼び寄せたのが事實かと思ひます。それが二十五か六年でせう。すると、私が初めて上京して横寺へ行つたのは右年になる譯です。（その時は鏡花君が玄關にゐたのです。私は先生には逢へなかつたのです。）さうすると時日は合ふのです。………

云々との返事が來ましたから、明治廿四年頃は既に横寺町に住居されたのは確かで、恐らくそれよりは何程か以前からであつたに相違あるまい。秋聲君は明治廿五年に學友桐生悠々氏（今『信濃毎日新聞』主筆）と共に上京して紅葉邸を訪うた。が、面會することが出來ずやがて歸國して大阪にゆき、再び東京へ出て博文館の編輯部に入つてから、紅葉氏に親しく接近するの機會を得たのであつたと云ふ。

紅葉氏の横寺町の邸と云つても餘り立派なものではなかつた。當時の氏の社會上の地位や文名の高い割合から見れば、寧ろ氣の毒な程のもので、古ぼけた二階建の假屋に過ぎなかつた。それが横寺町の通りから少し南側へひつこんだところに極めて簡單な門があり、その右側の四寸角程の柱に

尾崎徳太郎の自筆の標札が見られ、突當りの左右が狹い板塀になつて、ほんの四坪ばかりの場所を圍み、門を入つて左側の塀際に、目通り徑五六寸程の枝垂柳が一本あつたのである。「十千萬堂日錄」の三月廿三日の條に、「門前の柳眼漸く開く。淺々の綠最可愛。」とあるのがそれだ。左へ直角に折れて玄關になるのである。格子戸を入ると、半坪程の土間につゞく取次の間は、確か二疊であつたと思ふ。西向の極めて薄暗い陰氣な室であつた。この二疊の室で、鏡花、風葉、秋聲、春葉その他、明治大正の文壇に飾つた諸君が育成されたことを思ふと、實に尊い玄關であつたのである。

紅葉氏の書齋は二階八疊二室を通したもので、南を開いた緣側があり、上段の間ともいふべき、西寄の室の南西の隅に、緣側に對して氏は机を据ゑて居られた。この位置は私の知る限りに於いては、終生變へられなかつたものだ。私の訪うやうになつた頃は、もう隨分と住みふるされて、その上室内の裝飾といふものは殆ど無かつた。たゞ楣間に巖谷一六居士の「雅俗折衷」の四字を題した額が懸けてあつた位の質素さであつた。この額は山田美妙齋の言文一致派に對して、紅葉氏は雅俗折衷の一派を開いたと云ふ意味で、硯友社の同人で、一六居士の令息漣（小波）山人が巖君の揮毫を乞うて紅葉山人に贈つたものである。確か其の意味の識語が書いてあつたと思ふ。この扁額は紅

葉氏終焉に近い頃、後の形見として鏡花君に贈られ、麹町區下六番町の同君邸に保存され、多分今もその書齋にかゝつてあることゝ思ふ。

正月などは例外として、平常は紅葉氏の書齋には、軸物などの懸けられたことは滅多になかつた。書棚といふ程の物も殆ど見えず、——勿論藏書は相當にあつたには相違ないけれども——唯低い抽斗の數多く付いた白木の簞笥が座右にあつて、正方形の樫の机が一面に据ゑられてあるだけ、といふ極めてアッサリしたものであつた。

「我々の書齋は、つまり仕事場なんだからね、風流人のしやれた眞似なんかしちやアゐられない。」

と述懷されたのは、氏自身の書齋の說明になると見てよからう。成程、氏の書齋は確かに仕事場の觀があつた。第一机の手前側は小刀の切疵だらけで、まるで眞魚板以上であつた。事情を知らぬ人には袋物の小細工でもするのかと驚く位のものであつた。その實は例の文章の推敲に苦心慘澹のあまり、書いては消し、消しては貼る、これが幾枚も重なるのだらう文章の推敲と共に紙細工もやるといふ事になるのである。その痕跡が机に縱橫の疵となつて殘つたものであつた。

この文章の推敲といふ場合は勿論、何か考へを凝す時の氏の癖としては、右手の中指の第一關節

と第三關節との間を屢々嚙むことが有名なもので、その嚙む部分が堅い瘤になつて隆起して居つた。或人の說では、氏が青年時代には拳骨で机なぞを敲いたり、四分板を敲き割つたりする事が學生間に流行したもので、負けん氣の氏は痛さも血の流れるのも我慢して友人と競爭をやり盛んに敲き固めたのが、後に瘤となつて殘つた。それが幾分氣になるところから、遂甜めたり、嚙んだりしたのが、何時の間にか癖になり、推敲の際の考へ事の場合には、特に此の癖が頻繁に出るといふ次第であつたとも傳へる。どちらにしても、右手の中指の瘤と文章の推敲との間に密接の關係のあつたことだけは、保證してもよい事實である。

南を開いた書齋の緣側に立つと、氏の所謂簞笥町の「塾」はすぐ眼下にあつた。僅か三四間の後園の下が、七八尺の斷崖になつて、これに三四段の足がゝりを刻みつけ四つ目垣を切り開いて、塾への通路としたもので、こゝに藻社の本部が出來たのであつた。この書齋から南に當たる北町、南町、若宮町あたりの、高臺につゞく、麴町の番町や、富士見町邊の遠景を一眸にをさめ、遙翠、黛樹のおもむき惡しからず、その折々の屋敷町の花も見え、月も自由に座敷に這入るといふ位置を占めて居つたのである。しかし造作等はお粗末なもので、又古ぼけても居つた。終焉に近くなる頃に至

つて、かなりの無理をして、當時の金で約五百圓餘を費し、玄關を新築し、門から正面に南向のあかるい取次の室が、張出するやうに造られ、拂塵その他・造作にも手を入れて、面目を改めたところも少くはなかつた。けれども、此の修繕後住まれた日數といふものは實に短かつた。氏の事であるから、住宅構造や造作の意匠についても、幾多の註文や好みもあつたであらうが、終生借家ずまひで逡られてしまつた。此の點に於いては不滿足であつたかに思ふ。當時創作家としては何と云つても、露伴氏を東の大關とすれば、紅葉氏は西の大關であつたけれども、他の職業に比べて文士は一體に金に惠まれなかつたので、物質的には餘り裕福とは云へなかつた。しかし當時の文學者の全體の水準から云つたなら、紅葉氏などは收入に於いても第一流の部分であつたらしい。江見水蔭氏等の考案になつた當時の文士内閣の役割に、紅葉氏を大藏大臣に擬してあつた位で、氏はどちらかと云へば、文士仲間では堅實な方であり、經濟的の考へも相當に持つて居り、處世上の常識を十分に備へて居られた。それ故、使ふべき金にはケチ〳〵せぬが、締まるべき所は油斷なく締めるといふ流儀であつた。その位に注意しても終に新築の住宅にすむことが出來ずにしまつた。文士の報いられざる時代であつた事がよく見える。『金色夜叉』の名作を結了せずにしまひ、晩年『讀賣新聞』

の日就社を退くことになつたのであるが、紅葉氏の月俸は退社當時まで、百圓を越えずにしまつたといふのは事實である。その頃の金百圓は勿論今とは違つて、かなりに購買の價値が高かつた。けれども一流の藝人や實業家方面の收入にくらべては實に云ふにも足らぬものであつた事は爭へない。死後、氏の全集出版の印稅收入の方が、遙に生前の收入よりは多かつたと聞いたが、確かなことは知らぬ。

紅葉氏はよく我々に云つたものだ。

「男は敷居をまたぐと三人の仇敵にあふ、と昔から云つたものだが、なにも仇敵に必ず遇ふと云ふのぢやない。一旦外へ出ると、いつどこで、意外な事件にあふかも知れない。縱令どんな事にでつくあしても、狼狽しないやうに覺悟をして置けと云ふのですね。出あひがしらに惡友につかまる。逃られない場合もある。それでなくとも、久しく遇はない親友に偶然邂逅する。是非何處かで一杯やつて舊交を溫めたいと云ふこともありますね。だから、私は何時でも紙入に五圓札を入れずに出かける事はない。五圓あれア、他人の事までいかんが、自分の事だけなら恥をかかずにすみますよ。」

此の位に用意周到な人でもあつた。今の五圓では外侮を防ぐに足らぬかも知れぬが、當時は一圓五十錢位の會費で新年宴會が立派に催される時代だから、此の言は確かなものであつた。

氏が日就社の月給を百圓と云つたが、當時この「百圓」の聲が、氏の周圍の後進の文士諸君の耳

にはなみならず微妙な羨しい響に聞えたものだ。それを察してゐる氏は、何時か、笑ひながら門下の某々氏等に月給袋を見せながら、

「この袋をやるから、神棚へあげて、あやかるやうに神酒でも供へることだね。」

とからかはれたものだ。そこに居あはせた私は傍から

「中味のないのにあやかつちやあ、溜りませんね。」

と云つたら、氏も苦笑したことがあつた。當時の百圓はわれ〳〵の間に於いては、確かにそれ程尊いものであつた。氏は日就社の月俸以外に單行本の版權收入やら、俳句の點評料その他、揮毫等の雜收入も少なくはなかつたのであらうが、何しろ交際が廣いのに、任俠肌もあつて、他の世話をも隨分引受けて居られたやうであるから、經常費以外の失費も多かつたであらう。

氏に經濟頭のある一例を思ひ出した。明治三十二年頃のことであるが、氏の考案で「貧交券」といふ、互助融通の趣意から貯金通帳をつくつたことがあつた。會員は氏の周圍の極めて狹い範圍に限ぎられたものので、餘裕のある場合月掛五圓づゝ氏の手許へ預け入れ、已むを得ぬ場合には、預金總額を越えぬ程度に、融通して貰へる組織であつたかのやうに覺えてゐる。この外、門下の人々に

は自分の通帳を貸して急場の凌ぎをつけて遣るといふやうな、便宜も與へて居られたと聞いてゐるこの方面にもなか〳〵行屆いて居られたのである。それから門下の諸君に對しては勿論であつたが、その以外の親しい後進の人々の就職の斡旋や、臨時の仕事を拵へてやるといふ風な世話も、煩はしさを厭はずに、よくされたものであつた。

明治卅年の秋の頃であつた。『新著月刊』の社會欄の材料の爲め、老女優千歳米坡の閲歴談を聞きに、明治座前の三橋亭にたづねた事があつた。米坡は曾て光妙寺三郎氏の細君になつたり、舊幕時代に番組人入御用達を勤め、子分の三百人もあつた俠客千歳與五郎の娘として生まれ、長く花柳界に在つて、艶名と俠名とを馳せたといふ變りものであつた。しかし、私の訪ねた頃は、もう、かなり老いて、凄い程の白髮頭だつた。けれど顏だけは、流石にわか〳〵としてゐたのである。紅葉氏とは同じ芝區神明町に生れた者で、同町內といふ關係から紅葉氏の幼少時代から懇意であつたとか云ふ話で、晩年まで親しくして居つたらしい。

私が米坡に閲歷談を聞かして貰はうとしたら、彼は先づ一枚の短冊を持ち出して來たものである。

「近頃、紅葉さんから、こんな發句を載きましたよ。御覽なさい。」

見ると　美しい例の筆蹟で、

　　秋雨にとくや米坡の白髪ぞめ

「この發句の意味を詳しく手紙に書いてよこしましたよ。私は、すぐに返事を出しましたがね、――白髪になつたからつて、ちつとも淋しい事はない。女がよくつて、藝ができて、程がいゝんだから、この白髪でもなけれア、怪我人が多勢できるのです。痩我慢ぢやアない。ほんたうの事を云つてやりました。」

といふ調子で、氣焔當たるべからざるものであつた。

その中米坡は紅葉氏の嚴君の話になると、調子を落として、しんみりと語つたものである。當時は紅葉氏自身が、嚴君の事に觸れるのを好まれなかつた樣子であつたから、其の話は全部發表を見合はせたのである。しかし今となつては、種々の著述などにも其の事が書かれて居るし、同氏親友の一人江見水蔭氏は『紅葉山人廿七年忌記念展覽會誌』上に「赤裸々の紅葉」といふ題で、講演筆記を載せて、その中に詳しく紅葉氏の嚴君に就いて述べて居られます。けれども米坡が私に語つた點だけは漏らされて居ります。

米坡が聲を落として、シンミリ私に語つたところに依ると、

「紅葉さんは阿爺(おやぢ)に赤羽織なんか着て、あんな馬鹿な眞似をしてゐるからいやだ、と云つてますがね。それアいけない。あなたのお考へが違ふ、と私が云ふンですよ。赤羽織の谷齋と云はれるのは、心持はよくないに違ひない。それア、もつともですがね。あの人が彫刻なんかしたつて、何程のお金にもならなかつたのですからね。倅を大學に入れる事なんか出來る筈はありませんや。しやう事なしにあんな眞似をしたんですよ。その心持を汲んでやらなくちやア嘘です。――紅葉さんも、あの位の大家になつたんですから、芝ッ子の名譽だつて、いつもお目にかゝると、私は、さうは云つては居るんですけれどね……」云々。

親の子を思ふ眞情が窺はれて奥ゆかしい逸話であらうと考へて揭げる。また紅葉氏の徳を損ずるといふ事柄でもないから。（昭、八、八）

七、紅葉山人逸話（一）

――紅葉中心の明進軒座談會――紅葉對鏡花、風葉、春葉等の戀愛論――

紅葉の江戸趣味――雅號の由來――櫻川小學校――衣食の嗜好

明治二十四年以來、紅葉山人の鉗鎚の下に育成されて來た泉鏡花君は、同二十八年頃に至つて、漸くその獨得の光芒を創作の上に放つことになつた。特に同年の春、『夜行巡査』をあらはし、次いで『外科室』及び『鐘聲夜半錄』等を世に問ひ、俄然評論界の問題となり、好評嘖々たるものであつた。その後も一作を出す毎に世の歡迎の度を加へ或期間に於いては、一代の寵兒となつた趣もあつた。丁度この時代の引續きで、三十一二年頃かと思ふ。一二の友人と共に紅葉氏を訪うて、雜談の間に、鏡花君の小說の評判がすばらしい勢であるといふ事が話題となつた。氏はそれに對しては、贊否いづれとも云はず、少し容を改めた趣で、

「今の批評家連中は親切氣があつてのことかも知れんが、餘り若い者をおだて過ぎてはいけませんね。――あかん坊が自分の放屁に驚いて泣くと云つたやうな類もあるからね。」

と微笑されたことがあつた。この類の奇警な諷誡の語を吐かれた例は折々あつたが、これを皮肉と聞けば、皮肉と云へぬこともないが、綠雨氏の皮肉を假りに鋭角的とすれば、紅葉氏のは自ら弧形式で、丸味を具へてゐた感がある。

明治三十年十二月頃の事である。牛込の藥師寺内の明進軒と云つた西洋小料理店で、紅葉氏を中心に門下の鏡花、風葉、春葉の三君に、私も加はつて會食したことがある。偶然ではあつたけれども、今の流行語でいへば、座談會が開かれた形になつたのである。話題は戀愛論から夫婦間の問題に及び、終には良妻論から理想的家庭談にまで發展したものであつた。故柳川春葉君は溫和な人ではあつたが、なか〳〵慧敏なところもあつて、突如、から云ひ出したものだ。

「さうしますと、先生(紅葉)の理想の妻君は『多情多恨』の阿種みたいな女なんですか。」

といふ難問提出に及んだ。これは當時『多情多恨』の女主人公阿種の貞淑ぶりが、紅葉夫人の菊子さんによく似てゐるといふ噂があり、眞僞は不明だが、中には「先生窃かにモデルにしてゐるのぢ

やア無いか、」なぞと云ふものもあつたので、不圖その事を思ひ出して、春葉君、何氣なく云つたものであらう。或はまた多少のいたづら氣も手傳つて、此の問題を持出したものであつたのか、今はその邊の事は明かにする由もない。

流石の紅葉山人も少し雄辯の鋒尖を折られた形でチョットたじろいだ。私どもは窃かに「大將どう出てくるか。」と微笑しながらも、輕い不安と獵奇心とに、目を見張つたものだ。紅葉氏は素知らぬていで、

「マアさうだね。阿種のやうに不人相ぢやいけない。餘り淋し過ぎてはいけないね。もう少しさばけて、外の者には云はなくつても、「ヨウー」てなことを、たまには云つて吳れなけアこまる。だがね、添つてる中には、段々いゝ所をめつけ出して、缺點は目につかんやうになるから、餘りひどいんでもなけア、我慢の出來るものなんだね。男は飽くまで强いところがあつて、情も强くなくッつちやアいけない。情が强いたつて、何も蛙を踏んで、お辭儀をしなくたつていゝ。」

と受け流したものである。

この結尾の「蛙を踏んで」云々は一種の諷刺ともしやれとも皮肉とも、云はゞ云へるであらうが如何にも弧形的に丸味があつて、少しも毒氣のない所が紅葉式である。

紅葉氏は慶應三卯年に芝の神明町に生れたといふのであるから、確かに江戸ッ子たることは間違がない。翌明治元年八月、江戸は東京と改稱されたとは云へ、私どもさへ直接見てゐる、明治十四五年頃までの東京は、所謂文明開化の風は一部には吹いて居たとしても、まだ外廓だけでも、諸大名の屋敷や、旗本屋敷など、昔の江戸の面影を多分に保存して居り、海鼠壁に出窓の長屋に圍まれた此等の邸宅の嚴しい殘骸によつて、以前の樣子も、大體は窺ひ得たものであつた。純粹の江戸人の家庭には昔の遺風もそつくり殘り、江戸魂も殆どそのまゝ持續されてゐたと云つてよい位のものであつたらう。紅葉氏は新教育を受けた人ではあるが青年時代の全部は江戸趣味の空氣中に陶冶されたと云つてもよからう。隨つて江戸ッ子である事を、窃かに誇りとして居られた。又江戸趣味を解すると云ふことも、自ら大いに誇りとして居られた。これも事實である。芝の神明町が誕生地であると傳へられてもゐるし、一說には、同區の片門前町で生まれたとも云はれる。今そのどちらであるか、俄かに決定する譯にはゆかぬが、兎も角、江戸ッ子であると同時に、芝ッ子であつた。そして此の二つのものを誇りとして居られたと云ふことも事實である。芝公園の西北方今紅葉館のあるあたりの丘陵を紅葉山といふのがあるが、紅葉山人の雅號は是れから取つたと云ふは、餘りにも

世間に知れ渡つた事柄である。又青年時代に用ひた別號に緣山といふのもあつたがこれは增上寺の山號三緣山から取つたものである。どちらも芝ッ子たることを標榜したものと云つてもよからう。

氏が晩年の短篇合卷の標題に『芝肴』といふのがある。當時、私は直接、その意味を氏に質したことがあつた。「芝浦で撈れた小魚の寄せ集めものを俗に芝肴といひますよ」との說明であつたから、つまり雜纂の義に用ひたものであるけれども、故鄕忘じ難しの心持も加味して選んだ標題であつたと思はれる。

紅葉氏は少年時代には、芝區の櫻川小學校に學び、中等敎育は、同じく芝の三田英學校で受けられたと聞いて居る。大學豫備門に入るまでは、全く芝に生まれて芝に育つた譯である。三田英學校と云つても、當時は三田にあつたのではなく、仙臺屋敷から大通りを隔てた西側の某大名屋敷跡にあつたものである。多分、今の田村町邊であつたかと思ふ。櫻川小學校と云つても櫻川町にあつたのではなく愛宕下町四丁目邊にあつたかゝ思ふ。明治十四五年頃には、私は芝區愛宕町及び愛宕下町邊に住居したので、おぼろげながら目擊した記憶がある。紅葉氏は此の少年時代をすごした、思出の多い櫻川小學校を晩年まで忘れず、なつかしく思つたものと見え、明治三十四五年頃、同校の

招きに應じて講演に赴かれたことを聞いてゐる。その直後、私は同邸に行きあはせて、同校に於ける講演の樣子を聞かせられたのである。その講演の梗概も聞いたのであるけれども、もう忘れてしまつた。が、たゞ氏が正直に、

「私なぞの話は江戸流のスラングが多くて、一般の聽手(きゝて)にはわかりにくいと云ひますね。――何しろ今は地方出の人が多いから、私どもの言葉には普遍性を失つたものが多い、といふことになるんですね。から云ふ批評も參考にはなりますよ。」

としんみり語られたのであつた。

しかし、幾回同校で氏が講演されたかは不明である。明治卅四年四月三日の日誌（『十千萬堂日錄』）に、左の通り書いてゐる。

三日。快晴。神武天皇祭也此日向島に二六社の勞働者大懇親會有り。砲兵工廠職工のみにて五千人切符を買ひしに、注意の命下りて行くを得ざる狀也。昨三時過より醉夢覺めて寢ねざるまゝに一起出で、十時富士見町鈴木氏を訪ふ、不在、芝権島氏を訪ひビイル一盃を吃して芝櫻川小學校に向ふ。此日大いに曇りて、終日蕁たり。予が前に阿部氏「母校」に就て一場の演說あり。弓家の薩摩琵琶金剛山ありて、予は「頭飾」なる小說の口演に、琵琶大塔宮有り、後小川某（舊女生徒）の北京籠城談有り、其席にて福引有り。校長原讓次郎氏の爲に短冊三葉に句を書す。六時頃辭し去る。甚だ睡くして不快謂ふべからず。（下略）

私へ話された講演のスラング問題は、此の時の經驗談であつたか、他の場合のことであつたか、その邊の事は確かには記憶せぬ。

江戸趣味の話は折に觸れてされたことも少くはなかつた。が、明治三十五六年頃であつたか、紅葉氏は博文館の編輯局で、高山樗牛氏にあひ、談、たま〳〵淺草海苔のことに及び、「江戸趣味を解しない者は海苔の眞味はわからない。この趣味が徹底すると俳味と一脈相通ずるものがある、と論じたのであるけれども、敢て樗牛、俳味を解せず、と、當てつけた譯でもなかつたが、何と誤解したものか、彼、憤然として、翌月の『太陽』で堂々と江戸趣味を散々ケナシつけて論じたのには、啞然たらざるを得なかつた。」と笑つて居られた。

明治三十六年一月三日、紅葉氏は巖谷小波、齋藤松洲、兩氏とともに龜戸の初卯詣でにゆかれ、柳島の橋本から合作の葉書を、當時、會津の山中にゐた私に贈られた。それを今も手許に保存してある。三人以外にも同行者があつたのかも知れぬ。又車で乘りつけられたものか、舟で行かれたのか、それも明かではない。葉書の左上方に松洲氏の筆で、柳の枝の繭玉に骰子（さい）や萬兩箱のついたのを描き、橋本の黑印と朱印とを中央と左下とに二つ押し、龜戸土産の朱達摩と鷽の木兎（みゝづく）とを下端

に配し、右側の餘白に、

ニヘン間違のお守はこれから出ます　紅　葉

その左側歯王の下に、

矢はり江戸はようごツす　小　波

これだけの短文ではあるが、此の兩氏の江戸趣味にひたつて、滿足の微笑をもらしてゐる。趣が見えるやうに思ふ。柳島邊の風景を添へて想像して見ると、一層感じが深くなる。しかし、あの頃でも川の向側には、もう赤煉瓦のモスリン工場などが出來始めてゐたのだから、追々と江戸趣味も猛烈な敵境期に出あつてゐたのである。

世間では、紅葉氏を以て、著道樂を兼ねた人であつたやうに思つてゐる向きも少なくはないが、私はそれ程ではなかつたと考へてゐる。たゞ衣裳を新調の場合、柄の選擇がやかましかつたのは、例の凝性が持前であつたといふ程度のことで、別段贅澤なところまではゆかなかつたかと思ふ。無論、經濟關係もあつたからではあらうが。食物は肉類、その他濃厚なものを好まれ、西洋料理を特に嗜食されたかに考へる。勿論、日本料理に對しても特殊の好みがあつたであらうが、その事をい

ふには他に適任者がある筈ゆゑ、この方面には極めて不案内な私は遠慮すべきである。唯なか／＼珍物を好まれ、容易ならぬ悪食家であつたことは忘れられない。極たまにだけゆく私達さへ、支那の友人から到來したとかいふ、鶏卵の泥溝漬(どぶづけ)見たやうなものや、何しろ豆腐を鹽辛(しほから)に漬けたかとも思はれる「プウニユウ」などゝいふ絶妙な物をお裾分に預つて呑むことも吐くこともならず、目を白黒した經驗がある位だから、一斑を以て全豹を知るべしである。

衣裳その他の色彩の好みに就いて語られた事があつた。單色よりは間色を好み、間色の中にも茶がかつたものがすきであると云はれてゐた。事實から見て、特に晩年は、帽子を始め、持物から衣服まで、茶系統のものを多く用ひられたやうに記憶する。その中(うち)には問題となつた茶縞の袴もあつた。これだけは、折角新調はしたが、甚だ評判が悪く、失敗に終つたと自分も認め、殆ど用ひられずにしまつた。茶といへば紅葉氏の逸話中、頗る有名な事件で、佐渡の小木に遊び、妓お糸の三味線の裏皮に、「來いちや／＼で二度だまされた、又も來いちやでだます氣か」といふ佐渡おけさの文句を書いたことは、廣く世間に知られてゐる。市島春城氏の「紅葉山人」と題する、山人廿七回忌の講演にも此の事件に及ばれ、

紅葉君の小木滯在中に紅葉君を中心として、土地の若い連中が美人両議會といふを催した。小木中の妓に皆な會したが、皮肉の事には糸（紅葉氏の寵妓）一人だけは其席に招かれなかつた。糸は非常に憤慨して寝ても起きても居られなかつたといふは、糸自身の述懐であるらしいが、成程同じく小木の妓籍にあるものが、唯一人殘されるといふ事が、如何に不面目であつたか、それは想像に難くないのである。それがたまらないで、糸は紅葉君の所へ手紙を持たせてやり、どうか是非、早く切り上げなさいと云つてやつた。紅葉君も糸の情を思ひやつて、宜しいきつと戻るから待つて居れと、あの流儀の男性的に返辭をして、歸つた其夜、筆を走らして三味線の皮に書いたのが、先刻江見君の述べられた「來いちや〱」の唄である。來いちや〱と云ふは、こゝに一寸註釋をしておきますが、佐渡の方言で「入らつしやい」といふことを來いちやと云ふ。紅葉君は、それを濃茶に轉用して諧謔を弄したのである。紅葉君は非常な茶好きで、殊に濃い茶を好んだ人であつた。

いよ〱以て、茶には縁の深い人であつた、と云はねばならぬ。しかし、鼠色の新案道服と云つたやうなものを造つて、若てあるかれた時代もあつたといふは、頗る有名であるから、あながち茶色にばかり偏したと云ふのでも無かつたのである。柳川春葉君の説では茶の外に紺色も好まれたといふ。事實であらう。（昭、八、九）

八、紅葉山人逸話（二）

――山人の幼年時代と其の父母――山人の出生地――會津の猪苗代湖畔と山人

――湖畔漫遊の熱望終に遂げず

この「回顧錄」は過去の追憶の漫談に過ぎないものであるけれども、成るべく、當時の記憶を誘致し、補足し確實にするが爲めに、紅葉氏に關係のありさうな參考書を、近頃、出來るだけ取寄せて見たのである。氏が幼年時代及び少年時代の事蹟と、その環境との記述に就いては、既刊の諸書に載するところ、曖昧な點もあり、彼此一致しないものも見えるのである。

紅葉氏の嚴君については、既刊の諸書には、私の知る限りでは、一樣にたゞ谷齋として傳へられ、其の苗字も實名も明かになつて居らぬ。谷齋といふは、恐らく、彫刻家としての雅號であつて、通稱は別にあつたであらう。たゞし野崎左文翁著『私の見た明治文壇』（昭和二年版）の「明治初期の

新聞小說」の閏、「小說記者の生活狀態」を敍した中に、假名垣魯文翁が珍猫百覧會を東兩國中村樓に開いた際の、周旋、補助の人名を連記して、立齋廣重、武田谷齋、梅林伯圓、三遊亭圓朝とつゞけてあるが、この武田谷齋はもしや其の人ではなかつたか。手のとゞく特志家の研究をお願ひする。

又同書の「昔の銀座と新橋藝者」の項の末尾に、

　又當時も數名居たが、私は悉くは知らず、橋南に常磐津和佐太夫、橋北に淸元延太郎といふ幇間片手間の藝人も居たやうだし、帶河蝶夫といふ手品遣ひもあつた。就中、赤羽織の谷齋は此地の名物男であつた。

と見える。相撲場や劇場等に屢々あの大藥罐の赤羽織姿であらはれたのだから、明治三十年代の初期頃までの人々ならば、大抵目睹した筈であらうから、今更これを說すべきでも無からう。

江見水蔭氏著『硯友社と紅葉』（昭和二年版）の「紅葉の身の上話」といふ條下に、紅葉氏未亡人菊子刀自のお里は芝濱松町の樺島家で、舊幕時代からの醫師であり、蘭書なども多かつた舊家であつたといひ、菊子未亡人の從妹に岸かね子といふのが品川に住み、江見氏によく紅葉氏の少年時代の噂をされたとも見える。その續きに、

　との樺島家へは近所の關係で、久我貞之助（號龜石）が能く出入してゐて、故人（紅葉）とも早くから知り

合つてゐた。（石川鴻斎の同門関係でもあつた、）亀石は文壇人ではなかつたが、硯友社の一人として、去年（大正十四年）永眠するまでは、我々と親しくしてゐたが、この亀石の話したのは――尾崎には家庭に複雑な事情があつたと見えて少年時代から一家の事に関しては成るべく語るのを避けてゐた。苗字も荒木と尾崎と、それから谷斎の方の苗字と、いろ／＼有るので、それに就て問うたけれど、彼はハッキリと答へなかつた云云。

右の荒木とあるのは、元漢法医であつたといふ紅葉氏の母方の祖父荒木舜海翁のことで、江見氏が紅葉氏を知つてからは、継続して同翁の手許で生活せられたといふ間柄の人である。尾崎は云ふまでもなく、山人自身の苗字である。そして実父の谷斎氏も、別に違つた苗字を持つてゐたものと思はれる。そこで、私の前に掲げた武田谷斎を問題にしたい感なきにあらずである。

紅葉氏と親交のあつた塩野文禄堂編纂の『尾崎紅葉』（明治四十年版）の第一章「人としての紅葉」のはじめに、

紅葉山人尾崎徳太郎は、慶應三年十二月十六日芝区中門前町に生る。三歳にして母を亡ひ、四歳の時、同区神明町なる母方の祖父母（荒木）の許に引取られ、此処に幼時の生育をなせり。

とある。三歳にして母を亡へりといふは、恐らく誤伝であらう。随つて、四歳の時、母方の祖父母荒木家に引取られたといふのも疑問となる。その故は、山人の門下星野麦人、篠山吟葉、両氏の輯

錄せる『紅葉隨筆』（大正九年版）十七頁「今月今日」と題する條下に、山人の筆で、

五月十九日

明治五申年の今月今日物故せし予が母舟篙妙岸信女に□□□□□。

と自記され、又同書九〇頁に「駕籠」と題し、

おのれは人力車の出來始と云ふのを子心に覺え居るが、一度誰とであつたか、切棒の駕籠に乘つて、搖々と搖られながら菓子を食つたのを薄く記憶に存して居る。其頃の事であるから母が□□歳で嫁ぐ時も駕籠に乘つたのであるが、後に或人が言ふには、母の駕籠は一日前に某の葬禮に用ゐたのであると、之を聞ながらに聞いた祖母は深く氣に掛けた事であるが、母は廿四にして物故した。其時始めて祖母は誰にも言はで居た件の不運著（緣起）の駕籠の事を物語つて、前世の約束であると泣いた。

これも山人の自筆である。

明治五年申年に母堂が逝去されたと明記されてある以上山人は慶應三卯年の生れであるから、母親を亡はれたのは、三歳の時ではなく、六歳である。その法號の舟篙妙岸信女は到彼岸の佛語から來たのかも知れぬが、何となく、海か河かに緣があるやうに思はれる。どういふ意味が含まれてゐるか、今日からは不可解に終るであらう。山人が其の法號の下、七字を闕文にしてあるのは、何か

深い理由のあつたのではあるまいか。「駕籠」の一節を注意して讀むと、その子心に覺えて居られた駕籠に乘つた薄い記憶のある、「其頃の事であるから、母が□□才で嫁ぐ時も駕籠に乘つたのであるが」云々は、どう考へても、山人の幼時に他へ再嫁されたもののやうに解されるのである。便宜の地位にある學者の更に親切な攷究を希望する。

山人の誕生地を、私は前章に芝神明町及び片門前町の兩説あるやうに云つたが、堀野氏の『尾崎紅葉』に據ると、「芝區中門前町に生る。三歳にして母を亡ひ、四歳の時、同區神明町なる母方の祖父母（荒木）の許に引取られ」たことになつてゐる。さうすると、生まれたのは中門前町で、母と死別の翌年、神明町の外祖父の家に移つたことになるのであるが、既にいふ如く、母との死別は山人六歳の時であるから、その後に神明町に移つたものとすれば、四歳の時ではなく少くとも六歳か七歳の時であるべき筈となる。片門前町と中門前町とは地續きで近距離の間にあるのだから單なる記憶から出發した説では、いづれが正しいか、急に制斷はできかねる。確かな根據をつかんで、篤志家の裁決するのを待たねばならぬ。

堀野氏の『尾崎紅葉』には山人「明治六年の七月七日、七歳の時、始めて寺子屋に入る。無論寺

だ學校と云ふものもなければ、主に讀書、算術の修業、御師匠様といふは久我氏なりき」といひ、又

十三の時、田安御門外の中學に入れり。此處にて二年間の修業後は、芝愛宕下町仙臺屋敷なる藩同の儒者、岡鹿門氏に就きて專ら漢籍を學べり。其の傍ら近隣の島田某氏が注意を入れて、明治十五年三田英學校に通ふ事になりぬ。」とあつて、明治十七年に到つて大學豫備門試業に登第したのである。

明治六年に久我氏の寺子屋に入學したと見えるが、櫻田小學校の薫陶を受けたことは漏れてゐる。しかし、十三歳まで東京の中央に於いて、寺小屋の教育ばかりを受けてゐたとは信じられない。氏の日誌には、櫻田小學校同窓會から講演の依頼を受けたことが見え、又同校で講演を試みた由も書いてある。又同氏生前の直話に依るも、或期間、同小學校の生徒であつたことは確實である。久我氏の私塾に居たのは、小學の設立以前に限られたか、或は又補修的に學校の放課後や休日などに漢學や數學を習ふに通ひ續けたものか、どちらかであらう。この事も確かな調査は後の人に待たねばならぬ。

紅葉氏の住居の遷移に就いても一應調べて見ようかとも考へたが、他にその人があらうから、考證めいたことは、これで打切り、また私の追憶談に立ち戻る。

紅葉氏が友人や門生は云ふにも及ばず、親しい間柄の知人に對しても、行きとゞいた親切ぶりの

人で、また世話ずきでもあつた。明治三十二年の夏、友人の紹介に依り、私は會津東山溫泉に滯在してゐたことがある。この際、東京から泉鏡花君や、伊原青々園君が相前後して遊びに來られたのであつた。丁度鏡花君來遊の頃、紅葉氏から書翰があつた。それを左に、

御手紙被下忝く拜見致候、當地は近年未曾有の殘暑にて日々難凌く候、御勸なくとも、再遊と出掛けたきは山々なれど、越佐地方の遊歴、四十日と申す日子を費し候爲、歸京候とそのまゝ用事山の如く、繫がれたる馬の空しく後足を揚げ候のみにて、今更致方も無之次第に候、鏡花、御滯府に提出候、よろしく其地の山水御紹介頼入候、その他のものゝ御紹介には不及申候、何ぞ珍物御座候はゞ、御土産願上申候、本月中には御歸京候か九月の聲掛り候はゞ、秋らしう相成可申、燈火可親とならずとも、今少し凌ぎよく相成不申候ては、筆執る事叶ひ不申候、御地は如何に候哉、山中避暑の高興、到底矮屋伊豆本の樓上に三下ルの比にはあらざるべく、人生の良劑康に如くはあらずと、小生も此度別して感深かる義に有之候、秋風盃を把りて旅中の滑稽を談ず又妙ならずとなさず、御歸京を待ち一酌可致か、先それ迄は草々頓首。（註、原文には句頭點なし便宜上付す以下これに準ず。）

八月二十六日　　紅葉

宙外老兄

こゝに「老兄」とあるのは、頗る當を得ぬやうに思はれる。後に掲ぐる書簡に「老臺」とあるも同じ。氏は私より約十年も前に文壇に出られた先輩であつた。しかし、年齡だけは私の方が一つ上

であつたので、その意味で「老兄」又は「老臺」とされたのであらうか。

明治三十四年五月、私はかねて主張して來た田園生活を實行することになり、縁あつて福島縣北會津郡湊村の猪苗代湖の西岸に隱棲したのであつた。勿論、春陽堂發行の『新小説』編輯の擔任は繼續することになつてゐた爲め、毎月三日に上京して、十一日まで、約一週間春陽堂に滯在し、その事務を執ることになつてゐたのである。この轉居後、間もないことである。封筒には五月廿二日としてあるが、紅葉氏よりおくられた書簡に、

御狀拜見致候、其地閑賞に適し御滿足の趣、尤も大慶の御事に存候、扨御出發前は久々にて一會相催申度心得ゐ處、病の爲に入湯を急ぎ、不在中御訪問被下候由、家信に接し千萬殘念に存候、來月三日頃には御出京の由其節こそ七八の同人を會し、酒間山水を論し候事、好個の遊興と相樂み居候。
都合出來候はゞ御同道相願ひ、例の惡句を拈り、猪苗代湖神に酬るも妙たらんと遊意動かざるにもあらず候。
去る十六日豆州を引拂申候が、胃病は例の通にて、此際休養を要し候、蒲柳の身と相成候へども、貧乏ひまなしの狀にて、何とかせねばならぬと目下工夫に御座候。
近來身體の衰へ候には、自分ながらおどろき申候。
文章書くはいやなれど、幸に元氣は舊の如くに候間、其邊は御安心被下度候。
昨日男子出産致し夏彦と名け申候。四人の子持と相成、いやはや藥袋もない事に御座候。委曲は拜顔の節縷縷可申述、湊村の山水の長へに秀麗に、後藤氏の家庭の逾よ圓滿ならむことを祷り申候、草々。

廿一日夜

宙外老臺　　　　紅葉生

この頃から、もう氏が致命の痼疾となつた胃癌の萌芽が人知れず、潜在して、追々と肉薄して來たものと見える。

私はこの時分、紅葉氏に遭ふ毎に機會さへあると、猪苗代湖を中心として、磐梯山の北麓に點在する檜原、小野川、秋元の三湖などの風光の美を説いて、是非一遊せられたいと頻りに勸誘したものである。勿論私自身、彼の地に心醉して居つたからで。見ぐるしくはあるが、お宿は拙宅をお使ひ下さるやうにとも申出たのである。そして伊佐須美、磐椅、蠶養國の三式内社をはじめ、元寺、塔寺等の古刹の遺蹟などの一見の趣致あることを細説し、若松の荒城の昔話や、飯盛山の白虎隊埋骨の遺蹟談も、無論、忘れなかつたのである。その結果といふ譯でもあるまいが、明治三十四年六月三日、私は上京して春陽堂滯在中、同五日に夏彥さんの誕生祝の爲め紅葉氏邸を訪ひ、この時も會津に一遊せらるゝやうに勸めたところ、氏もその氣になつて、確か十一日に私の歸宅するのと同行せらるゝことに約束が出來たのであつた。然るに、七日に至り、左の通りのお斷りが來たのである。

先夜は甚だお匆々にて、何の風情も無之、いつもながら失禮に御座候。扨此度御同行可申存居候處、生憎入梅の節に相成り、ふりどほしに降られ可申、それにては何の興も無之候故、いかにせんか考へ居候。
さらぬだに降性の人が入梅をくつては、たまり申さず貴意いかに候や。

六月七日　　　　　　尾崎

後藤學兄

この時は右の事情から、晴天のつゞきさうな他の時候を選んで同行することになつたのである。「さらぬだに降性の人」とあるのは、氏自身が降性であると、堅く信じて居られたし、又事實、よく旅行に出かけると氏は雨に遭ふのであつたといふ。晴雨に對する一種の宿命說であるが、地方によりては全くかゝる信仰の行はれぬ所もあるが、江戸系統の東京人には、今も此の信仰が、なかなか勢力があるらしい。

『十千萬堂日錄』の明治卅四年九月二日の條に、「曇。俳籤の二の三國句。先月十二日頃、後藤氏の幽棲を猪苗代湖畔に訪はんの企ありしが、病を以て果さず、」(下略)とあるから、八月にも會津行の話が再燃したものであつたと見る。その時の遺簡を今も保存してある。勿論、猪苗代湖岸湊村、

字銚子の口の拙宅に送られたものであつた。

拜啓、然者毎々御書面を賜り御厚情拜謝仕候、扨御許の御都合も可有之と存候間、用事切上げ早速罷越申心得候處、去る五日より病勢頓に募り候て、腸胃炎と相成、劇痛難堪、臥蓐いたし、三食も粥ながら致候始末にて、醫師両名迄頼み日夜手宛怠り無く、漸く去る十五日頃より立つ事を得候迄に輕快を覺候へども、本月中は門外に出づるを禁ぜられ、來月上旬頃は、まだ〳〵汽車の長旅はいかゞと被存候に付、全癒の上は醫師に問ひ合せ候て、旅行差支無之やうならば、十二三日頃に、御同行可相願かとも考居候、此病氣無之候ても、俳句の寄稿非常にて到底昨今の處にては、一寸も身動はなるまじく、日々三千より四千の句を閲し居候へども、まだ〳〵五百はかゝり候ほどの嵩にて、病中とかくして之を檢するの難儀、御察し被下度候。段々手遲を生じ候爲、折角御待受被下候御厚意を無にいたし候やうにて、心外に不堪候へども、右様の始末に存候間、萬々御海容下被度　來月御出京の節、委細面陳可仕候、長く坐り居候て筆持つ事大義に候故、是にて御免被下度候　草々不盡。

八月廿一日

宙外老臺　　　　紅葉

かやうに會津行を熱望せられて、屢々私と同行の約束もせられたのであるが、病氣のために終に實現せられずに長逝せられたのである。右の書簡中に見える、應募俳句の選評に病をも顧みず忙殺せられたと云ふことは、普通人には一寸解しかねるやうな氣もするが、これは紅葉氏特異の趣味と

熱意とから來たことで、容易に他人の忖度を許さぬものであつた。この間の消息は『十千萬堂日錄』十月六日のくだりに、左の如く紅葉氏の述懷を記してあるのを見れば始めて成程と、うなづかれるであらうか。

（前略）陰雨蕭々として日は暮れぬ。無文と三千代有り爲に晩餐を早くし、一卓に三人三女一孩碟盤狼籍として、無文と祖父とは其間に酒酌み交す也、紛擾謂ふべからず。予は食事了るを待ち、卓を淸くして獨り食に向ふ。之に先ちて無文と三千代は共に歸れり。食前中俳句を（英一を脊して）整理し、細閲す。臨川、夢人嘗て予の閲句の狀を見て是ビジネス也、詞人の爲すべきにあらずとて諫めし事を憶起せり、洵にビジネスなる哉。然れども予は半面ビジネスを喜ぶもの、又之が爲に勞するを覺えざる也。八時英一と入浴。家に歸りて机に坐せば、夜靜に點滴簷を遶りて歇まず。此夕初茸を食ふ。……

紅葉氏の一面に事務的手腕のあつたことは、選句以外いろ〳〵の事實にあらはれて居つたのである。統率の器のすぐれてゐたのも、一つは此の事務的才幹と相俟つて、その大を成さしめたものであつたかに思はれる。（昭、八、十）

九、紅葉山人逸話（三）

――紅葉の嚴君の事――吉熊樓の新年宴會――思案の奇癖――風葉の酒亂――菱喰ひ御馳走――白樂天の「不能忘情吟」と小ゑん――佐渡の小糸――

紅葉氏の嚴君は、彫刻の名人、谷齋であることは廣く知られてゐる。しかし、其の苗字も通稱も一般には知られて居らぬ。この作につき最近、『私の見た明治文壇』及び『かな反古』の著者野崎左文翁に書面で敎へを乞うた。翁は病氣にも拘はらず、懇篤な示教をたまはり、私の推測通り、武田谷齋は即ち紅葉氏の嚴君であるとの回答を送られたのであつた。が、翁も其の通稱は御承知ないとのことである。その書翰の要點を左に摘載する。

（前略）さて御下問の谷齋の事は、老生はわずか兩三度宴席にて出逢ひ候のみ、亡師魯文翁とは懇意の間柄なりしゆゑ、同翁在世中に聞合せ置たらば、いくらも傳ふべき逸話はありしならんにと、今更ながら、殘念に存じ候、御尋ねの通り、姓は武田氏なるも、谷齋とのみにて、老生も本名を知らず、本職は彫刻にて名人の

聞えあり、今尚谷齋の號ある根付や角の煙草筒を見ることを有之候、かゝる長技を持ちながら、身を幇間の群に投じ常に緋縮緬の羽織を着して、花柳界をさまよひ居候爲め、人皆赤羽織／＼と稱し居候、明治十二年頃に、新富座にて高橋阿傳の狂言を出せし時、裁判所の控所の場に、うしろ向にて、膝を抱い居る坊主あり、書記お聲音に、武田谷齋と呼ぶにつれハイと答へて、こちら向きしは即ち此谷齋にて、見物をワッと笑せし事有之候、(是は老生の實見)此外の事は何も存じ不申、(魯文翁著の高橋阿傳夜叉譚に角里谷齋と書て居るのも、此谷齋の名を借りたるもの)折角の御尋ねながら、右の次第にて滿足お與へ兼候間、よろしく御諒承被下度候

昨年道齋先生の爲めに、是お岡茶寮にて小集を催せし時、會する者七八名其內本年になりて、既に松翁、小波の二氏を失ひしなど、しみ／＼世のはかなきを歎じ居候、其中にても最年長者の老生(道齋先生よりも一ツ上)がいまだに生きて居ること、是も不思議の一ツに御坐候、呵々、

つもるお話しは後便に譲り、不取敢貴酬まで、早々不備(註原文には句讀點なし)

十月十二日　　七十六翁左文拜

宙外詞宗　硯北　　(再白略)

筆とればわが腕ながらなどてかく
思ふやうには動かざるらむ

紅葉氏を中心としての宴會は、私の關係したものだけでも、相應の數になると思ふ。が、今一々は記憶せず、又それ等を記載する必要もないけれども、その數ある中で、長く忘れ得ぬものが、一つ二つある。明治三十三年一月三日、牛込の吉熊(よしくま)(冠城北樓)に開かれた硯友社員及びその知友等

の新年宴會は、頗る盛大なものであつたが、江見水蔭氏著『自己中心明治文壇史』に要領を得た此の會の記載があるので、私は書かぬことにする。

その翌三十四年の一月八日のことは江見氏の著書には洩れてゐる。この時の新年宴會も同じ牛込の青熊で開いた。集まるもの十四名に過ぎなかつたけれども、紅葉氏中心のこの類の會合としては、多分最終のものであつたかと思ふ。この會は特に私に取つては忘れ得ぬ因縁があつた。『十千萬堂日錄』一月二日の條に、

（前略）本日後藤氏來りて新年宴會の催を奬む。乃ち人名を算ふれば、思案、水蔭、桂舟、乙羽、半古、年峰、宙外、天外、鏡花、風葉、春葉、秋聲、虚心、霜川、紫山、荷葉、予と合せて十八人、されど此内に掛酌すべき者あるか。……

と見える通り、此の會は實のところ私が紅葉氏に勸めて開くやうになつたものである。同書四日の條に「青熊に寄り明日（五日）大島氏と會飲の席を命じ、又八日新年宴の獻立を誂る。野菜の椀、魚軒、相鴨の大根そぼろ、鱧の骨別口取（慈姑の白和、蒲鉾の雲丹燒、燒鷄）三色にて金一圓廿五錢」と見える。これには酒や藝者、その他の雜費を含まず、會費は金三圓也であつた。一つは料理に對する研究的趣味もあつたであらうが、引受けた上は宴會といふが如き輕微な事に對しても、自

ら出掛けて註文をするといふ程、親切なところが明かに見える。之れを一口に世話好きであつたと云へば、それ迄のことにもなるが、兎も角、事を輕忽に取扱はぬ責任感の强い人であつた。此の會の通知に送られた端書が私の手許に今もあるが、裏の日時、場所、會費等の文句は泉斜汀君の筆と見えるが、表の名宛人は紅葉氏が自ら書いてゐる。その熱心さが想見される。新年宴會當日の模樣の概略も同じ日誌の八日のくだりに見える。

八日。曇。九時半出碁。十時過柳浪子來る。一年餘の疏音を謝し、併せて本夕の新年宴會に臨まんことを請ふ也。正午歸る。（中略）五時、鏡花と同行。後藤、江見、小栗、廣津諸子、先在り。六時開宴、虛心、乙羽二氏遲れて到る。饌は五種、客十四名、妓八、小妓一、十一時散會。風葉狂醉して一場の葛藤を生ぜり。

右の連名の外、臨席した人々で、私の記憶してゐるのは武內桂舟、石橋思案、巖谷小波、柳川春葉の四氏だけは確かである。が、總計十四人とすれば、他の二人は德田秋聲、梶田半古、堀紫山、山岸荷葉、四氏の中の誰かの二人であつたやうに思ふけれども、確かなことは覺えて居らぬ。いづれも熱懇の間柄であるから、所謂羽目をはづして騷いだものであつた。そこで、何れも爛醉に及び、小悲喜劇があちらこちらで續演されるといふ次第。細波瀾ではあつたが重疊また重疊といふ賑かさであつた。まづ私の知つた範圍では、あの位に彩霞絢爛の宴會は、空前であつて、私にとつては、

もう或は絶後ともいへるであらう。

石橋思案氏は洒落で飄逸な人で、知友に對し極めて親切な好人物であつた。けれど、一旦醉ふと容易ならぬ脫線家でもあつた。段々酒がまはつて、好い心持になつて來ると隣席の武内桂舟畫伯の方へ、大きな頭をぐいと突き出し「オイ、どうだい、うれしいぢやアないか。フムどうだい。」といつたやうな事で、出しぬけに、桂舟氏の横面をビシヤリと平手で敲く。喜んでの脫線だから、畫伯も怒ることもならず、苦笑して逃げようとする。また「オイ、氣をつけ！」と云つた調子で、一度ピシヤリとやらかす。驚いて膳を持つて逃げる。當人は一向平氣なもので、その又隣の小波氏の方へ鋒が向ひさうなので、これも膳を移して逃げる。その近所の者も逃腰になつて、そろ〳〵と膳を運ぶものもあつた。そのうちに絃歌の聲が涌く。男女幾組かの踊子が入り亂れる。その間に忽ち雛妓の友禪縮緬の着物をきた圖ぬけて大きな五分刈頭の偉丈夫があらはれた。鼻の高い髯武者面は一見して思案外史であることが知られた。それでも例の鼻眼鏡―當時ロイド眼鏡と稱した！だけは、注意深くはづしてゐる。全くの珍風景である。いつの間に變裝したものか、意外であつた。この時まで、笑つて見てゐた紅葉氏も堪らなくなつたものと見え、突如、立ちあがつて、輕快にサノサを

踊り出した。何しろ、敏捷な特急的な舞踊であつた。氏の踊を見たのは、私としては、これが始めであり、そして終りでもあつた。

その中に、例の酒癖の悪い小栗風葉君は、異様に据つた目つきで、あちらこちらフラ〳〵歩き廻つてゐた。小波氏や春葉君は小栗君に頬や手を舐られ、驚いて騒いでゐた。春葉君は舐られてきたないから、手洗鉢の水で顔を洗つたとかいふ話で、それでは一層きたなからうと云つて笑つたのである。

ふら〳〵と歩きまはつてゐた風葉君は、何を考へたものか、突然に、桂舟畫伯に掴みかゝつたものである畫伯は偉大な體格の人だから、唯一とつきで小兵な風葉君はよろけて倒れさうになつた。が、また無茶苦茶に逆襲して、武者ぶりつくといふ騒ぎであつた。紅葉氏は弟子の風葉が、先輩の武内畫伯に對し、衆人の面前で、かやうな無禮を働いたのを見て、非常に怒られたのは餘りにも當然であつた。憤然駈けよつて、風葉君を引き離して押倒し、「莫迦め！何をする？」と罵り戒めた。

風葉君は全く人の見境がない有様で、起きあがつて、むちやくちやに紅葉氏にむしやぶり付いたものだ。この師匠をも忘れて掴みかゝる風葉君の醉狂を見て、紅葉氏は聲を放つて眞に號泣したものである。私どもは實際驚いた。涙の滂沱たりしことも勿論であつた。私は紅葉氏が聲を放つて泣

かれたことは、此の時以外には知らぬ。當時は病氣のため神經が衰弱して、極めて亢奮し易くなつて居られたのである。水蔭氏の『硯友社と紅葉』に氏の牛込北町時代に、紅葉氏が酒癖の良くない眉山氏を泣いて諭したとあるから時には感極まれば、泣いたことがあつたものと見える。氏の徹底した純情の程が窺はれる。

風葉君の狂態に驚いて鏡花、春葉の二君、その他の人々が駈けつけ、風葉を取り鎭め、紅葉氏を宥めたのである。私も丁度その傍らにゐたので、この葛藤を收めるのに多少斡旋したのである。紅葉氏の激怒はおひ〳〵和いでも涙は容易に乾かなかつた。そのうち久しい前から紅葉氏が特に贔屓にしてゐた相模屋の小ゑんが慰めに來たのである。私達は代つて席を避けた。彼は涙にぬれた紅葉氏の顔を見て、弟子の無禮な仕方を「さぞ殘念にお思ひなさるでせう」との同情からでもあつたか他人の見る目も忘れて、紅葉氏の手を取つて、彼はその膝に泣き崩れてしまつた。――こんな混雜のため席は全くシラケてしまひ、何時の間にか、來會者はちり〴〵に退散したのであつた。

右の小ゑんといふ藝者は、江見水蔭氏著『自己中心文壇史』に依れば、明治二十七年二月末から紅葉氏と知るなかとなつたものだといふ。氏の病危篤になつた頃は、枕邊を離れず看護もし死水まで取つた女であつ

た。終生吝嗇をつゞけて竟に流ることはなかつた。氏の人間味も窺はれるやうに思ふ。

むかし白樂天、年七十に近く、老病のため寵妓樊素に暇をやらうとして、長篇「不能忘情吟」をつくり、その序に「噫、予、聖達にあらず、情を忘るゝ能はず」と、山人逝く時、齢わづかに三十七、これに聖達を强ふるは或は酷であらう。

世間の評判や流布の著述などを讀むと紅葉山人の愛した婦人は何れも不美人である、といふことになつてゐる。美人の標準如何などいふ議論は、頗るむづかしい事ではあるし、また私達にはわからない問題でもある　が、しかし、小ゑんは先づ美人の班に列してよろしからうと考へられる。

目鼻形ばかりでなく、情趣情致といふ觀點からの考察も加へての話である。

佐渡の小木港に紅葉氏が明治三十二年の夏に遊び、そこに物語の種子を蒔いた、例のお糸は不美人といふ評判が高い。

けれども、佐渡出身の青野季吉氏の「佐渡ヶ島抄」にはさうけなしては居らぬ。氏はいふ、

僕が彼女（お糸又は小糸）にあつた時には、もういゝお婆さんになつてゐた。紅葉山人が醉後に三味線の片皮や羽織の裏にかき散した文字を出して見せて、いろ／＼と當時を物語る彼女を見てゐると、それでも、紅葉の旅愁をなぐさめて餘りあるものが、若い彼女にあつたらうことが、十分に首肯かれた。

と見えるから、滿更、世間で云ひふらす程、無趣味な婦人ではなかつたことが想像される。

明治廿六年六月中旬の頃、紅葉氏の周圍の親しい人々が病氣見舞の微衷を表するため、薬物を贈る代りにといふ意味で、各自短篇を起草して之れを贈るといふ話を聞き、私も一口加入させて貰ひ「御信心」と題する短篇を書いた。數人のものを集めて『換菓篇』といふのが、編輯されたのである。が、出版は山人の死後になつたと思ふ――その時の山人からの書翰が遺つてゐる。

昨日は換菓篇御寄贈被下御芳情難忘、千萬奉感謝候、來月拜眉の上、改而御禮可申上候へども、右不取敢申度存候、　草々頓首。

六月十九日　快晴

明廿日東京座見物に出掛可申、脚色拙劣、本文打壞しにて迷惑に御坐候、

後藤宙外様　　　　尾崎紅葉

右の東京座云々は『金色夜叉』上演の事を指したものであつたらしい。

この頃、私は每月會津の猪苗代湖畔から、三日に上京して十一日まで、春陽堂に滯在するのを例としたので、やがて八月初旬上京して、紅葉邸を訪うた時のことであつたと記憶する。右の『換菓篇』に對する御挨拶の意味であつたものか、先年佐渡にゆかれた際、同地人より寄贈されたといふ同島産の瑪瑙石で、雲山の情趣あるものに「宙外」の二字を椿處に篆刻せしめたのを一顆、私におくら

れたのであつた。この折の話は全く二人切りで、他に何人も居らなかつた、――どういふ話の端緒からの續きであつたかは、全く忘れてしまつた――が、偶然、例の相撲屋小ゑんの話が出たのである。山人は極めて眞摯な、いや、寧ろ沈痛な態度、顔付で、

「あいつも、もういい加減の年だから、簞笥の一つも買つて、お嫁にやつて遣りたいと考へますがね……」と云ひかけて、憂鬱に默してしまはれた。これだけで、急に話頭を他に轉じてしまつたのである。

紅葉氏は三十六年十月三十日午後十一時十五分（當時の死亡通知狀に據る）三十七歳を以て永眠せられたのであるが、越えて十一月二日午前八時、牛込横寺町四十七番地の自宅出棺で、青山の共同墓地に埋葬することになつた。當日定刻、氏の柩が通寺町の通りにさしかゝつた際、葬列を見送る町の兩側に立ちならぶ群衆の間に――神樂坂に向つての右側に――泣ぬれて倒れんばかりに萎れてゐる小ゑんの姿を、近所の女達の間に見たのであつた。葬列に加はり得ない彼は、忍びやかに山人と長き別れの見送りをしたものであつたらう。

私の思出は、再び明治三十四年の吉熊に開いた新年宴會の後談に戻る。あの悲喜劇の波瀾の多か

つた會の翌日の夕方、紅葉氏の使者として泉鏡花君が牛込藥王寺前町の拙宅に參られ、何處かで會食しながら是非懇談したきことがある故、御苦勞ながら一緒に行つて貰ひたいといふのであつた。風葉春葉の二君も先へ行つてゐられるとのことであつた。そこで用事の內容も大抵想像がついた。『十千萬堂日錄』の一月九日の條に、此の時のことが書いてある。

九日。快晴。十時出蓐。此朝堀氏（紫山）より中央新聞俳句點料金十圓達せり。睡足らず又寢ねしに、午後四時頃桂舟氏の來訪に會ひ、起出づ。之より先、春葉、鏡花、昨夜の葛藤の件にて來り居り、直に小栗（風葉）を招き、三人の面前にて、向後を誡む。酒興の上なれば尤むべき事ならずとて、後藤氏を、泉をして迎へしめ、六人にて本田横町鳥繁に會食す。（燈つく頃微雨來る）菱喰を試食す。家に歸れば紫明病癒えたりとて年賀に來り居り、十一時就蓐。

この會食の意味は大體、鏡花君から途中の話で聞いてゐたので、紅葉氏に遇つても其の事は問ひもせず、先方でも一言も昨夜の葛藤に就いては觸れなかつたのであるが、それとなしに、波瀾取鎭めに幾分か斡旋の勞を取つた私に對し、和解の出來たといふことを知らして、安心させようといふ意味に外ならなかつたものと見える。風葉君は酒のために、屢〻紅葉氏の勘氣に觸れることがあつて、三十年頃には破門されて居た位である。が、いつも程なく宥恕を加へて歸參せしめられた。「風

葉、もし紅葉に背くも、紅葉は竟に風葉を棄て得ぬ」とは同人間の公評であつた。山人の門弟を愛するの襟懐と局量の寛弘とを見ることが出來る。

菱喰鍋を六人の者が二班に別れてつゝきながら、釣ランプの下で、愉快に語り合つたものである。――菱喰は、鴻といふものなさうで、雁の大きいやうな鳥であるといふ。――その菱喰に我々は大いに當てられたものであつた。といふのは、紅葉氏はかう語り出したものである。その顔付は如何にも朗かで、そして悦喜至極であるといふ風で「暮の押詰つた午後の四時頃だつたかね、おれの所に明進軒の出前持が、こんな風に」と身ぶりがあつて「うなる程わしの好きさうな料理を品々取揃へて持ち込んで來たがね……」と、例の流暢な達辯で語りはじめた。私は後にも先にも此の時位ゐ紅葉氏の座談のうまさに感心した事はない。遺憾ながら、私は其話の精彩などは、到底十分一も寫すカを持ち合はさぬ。そこで話の梗概だけ書いて置くことにする。

註文もしない西洋料理を澤山に持込まれたので、門違ひかと聞いて見ると、いや確かにお宅様へ屆けるやうにと、折々手前どもへ參られる日本橋のさるお客様が、お申付けになりましたのでといふ。その客の名を聞いたが、笑つて答へない。お名前は存じませんといふのである。至極不思議千

萬な事で、誰の仕事か知らんと怪しんでゐると、翠朝桂舟畫伯の續き繪の端書が六七枚とゞいた。番號が打つてあるから、一から二と順序に見てゆくと、肩幅の廣い若い女が明進軒の入口で俥から降りるうしろ向きの圖があつて、次には二階の食卓でよろしく料理を食つてゐるところになり、明進軒の姉娘を呼んで尾崎家に贈る料理を註文する繪になつてゐる。その次は出前持が重さうに料理を運ぶ作になつて、それから紅葉家の取次の者が驚いた場面につゞく。をはりは紅葉氏が料理を前にして、不審さうに眺めてゐる似顏で結んであつたといふのである。

右の紅葉氏の話では、其の料理を贈つた女の名も素性も紅葉氏と如何なる關係の人物であるかも少しも語らなかつた。そこで、我々は、たゞ氏の小說を愛讀する下町邊の娘であらうと想像して、何となく美人であるかのやうに推量したゞけであつた。何しろ、形容や輕い身振で、人物や場面を巧みに活躍させ、話術の妙を極めたので、面白い短篇を讀む心持がしたのである。それが何人で、どういふ意味の贈物であらう、と私達に想像を逞うせしむる餘地を存して、具體的な話に入らずにしまつたところ、流石作家たる氏のあざやかな而目が見えるのであつた。

この作につき、何日か經て後、春陽堂の編輯局で、武内桂舟畫伯の門人田代曉舟君から聞いて、

始めて事實を知つたのである。その女は紅葉氏の作の熱心な愛讀者で、日本橋の料理店中華亭の娘でお福といふのであつた。彼は牛込の顧主先の年末勘定を取りにまはつた機會に、明進軒にいひつけての仕事であつたといふ。この時分、私どもは「オイ氣をつけろ、また菱喰に當てられるぞ」などゝ云つて笑つたものである。

この中華亭のお福に關して面白い話がある。それは市島春城氏の『紅葉山人』と題する山人廿七年忌の講演筆記に載つてある。その要領を擧げて置く。

料理屋で君（紅葉）の最も喜こんで臨終の時迄取寄せた料理は、日本橋の中華亭でありました。是に就いて可笑しい話と申すのは、私の友人で山田一郎と云ふ人がありました。是がよく中華亭に參りましたが、最初はまだ紅葉君とは相識らなかつた。なか〳〵悪戯をやる先生で、或時靜岡邊の若い醫者を連れて中華亭へ出かけ、中華亭の娘お福に今日は紅葉を連れて來たと云ふて欺いたのであります。此娘は紅葉の崇拜者で、山人の作は何でも讀むでゐる女ですから、紅葉人來と聞いてひどく喜び、一つ短冊を書いて下さいと云ふて頻りに書かせた。贋紅葉も兎も角歌位書ける人であつたものと見えまして、どん〳〵書いてやつた。さて其次の日、私が行くと、娘は喜んで、紅葉さんが來てくれたと云ふ。私は誰が一緒に來たかと云ふと、山田さんが連れて來た、そんな事は無からう、山田は紅葉を知らん筈だ。どんな人だと云つた所が、色白い、鬚の生えた背の低い人であつたと云ふ。私は噴き出して、それは擔がれたのだ私は今度本物を連れて來るからと云ふて、二三日たつて紅葉君を誘ふて參つたのが、抑々紅葉君が中華亭に觸れた始めであるのであります。

それから長い間中華亭を贔負にして、先刻申したやうに、病中は、こゝから料理を取寄せたと聞いてゐます。

云々と見えてゐる。誰でも自分の著述の愛讀者に對しては、感謝の情を持たぬ人もあるまいが、紅葉氏の中華亭を贔屓にしたのも、料理がうまいといふばかりでなく、一つは其の意味もあつたものであらう。　(昭、八、一一)

一〇、義太夫の新作と紅葉山人

――山人青年期の修業――彼が文體の變遷と其の理想――『紅葉隨筆』の隱形術論――『金色夜叉』は『頴才新誌』――晩年の漢文趣味と越王勾踐の例――小西半潮と義太夫の新作――文章報國の意氣――

紅葉山人の身邊雜話については、前章に、かなり詳しく述べました。が、肝腎なことで書き洩らしたものが、まだ殘つてゐるやうな氣がする。山人の青年時代には、仙臺屋敷の岡鹿門の塾に通つて漢籍を學び、その上、「石川鴻齋に年期を入れて漢詩文の稽古もしましたよ」と當人自ら云つて居られたので、此の方面の趣味は若い頃から相當に持つて居られたに相違ない。その證據には其の頃、山人の作つた香奩體の詩が若干首、今も遺つてゐる。そこで、一寸、山人の文體の推移を考へて見ると、最初は西鶴の流れを汲んだ雅俗折中の旗幟をたて、中頃に至つて精鍊された言文一致體

に轉じ、それが『多情多恨』あたりで略ぼ頂顚に達したかの感があつた。更に晩年に入つては『金色夜叉』をはじめ、『煙霞療養』や『十千萬堂日錄』あたりの文章に見るとほり、漢文脈が著るく取り入れられて來たのである。その頃の山人の書簡などにも此の臭味が横溢して居つたのである。山人自身は『金色夜叉』の文體は決して自分の理想的のものでなく、「唯一時の試みに過ぎない、あれは「頴才新誌」ですからね」などゝけなして居り、結局は「純熟した言文一致體を基準として、各體の長所を打成一片としたものを作りあげる、といふのが理想である」との主張であつた。つまり『多情多恨』流の文章を一層精錬したものを書きたいといふ希望であつたらしい。議論嫌ひの山人には珍しくも『紅葉隨筆』に「隱形術」と題して、文章及び小説に對する山人の抱負の一端を披瀝したものがあるから、拾つて左に、

抑も自分は言文一致を書かぬ迄は、凡そ天下に文と名づくべきものゝ中で、言文一致ほど無責任に易しいものは無からうと念つた。實に後生美文を亡すものは此の言文一致であると信じた。

苟も伊呂波四十七文字を諳ずるものは誰か一篇の小說を作るを難むぜむやと考へた。自分をして若し言文一致家で有らしめたらば、社頭に速記者を置いて、毎日五新聞の小說を見事受持つて見せる、と心に期したのである

文章は畫筆である「言文一致は寫眞器械である。花鳥の前に畫筆を置いたばかりで絹の上に花鳥は顯はれぬ。風景に對して鏡を開けば、山水は自から其形を印める。言文一致？　あれは誰にも出來る、講談や落語を速記したならば、遖れ一部の好著作と、自分は言文一致とそ正しく拙文家の隱形術と、窃に掬笑に堪へなかつた。其後自分も不料隱形術の必用に際會したので、試に印を結むで見たが、十分にこそ、成かなむだが、確に畫筆よりは寫眞鏡であつた。程無く今一度試みたが、大分苦しかつた。幾度と我家の文章を書くと一樣の苦吟を要したのである。それから三度四度と度重なるに就けて、此の長所も解つて來れば、その至難も曉られて、なるほど是は其體と用とに於いて、未だ容易に侮るべからざるものであるわいと感じ入つた。

それから山人の筆路旋回して、苦心の經驗談に入るのである。

「さては隱形術も首尾好く行ふは、形を顯して戰ふに劣らざる苦心の計である、と漸く開悟したのが去年（二十七年）の春の『紫』を書いた日である。其夏のが則ち本篇の『冷熱』で、其折の苦惱煩悶と云ふものは、實に言語道斷であつた。」と正直に告白してある。やがて、氏が獨得の文章論に觸れて來た。そこでいふのに、

話の中であるが、爰に文章の、言文一致のと說くのは、文字の鍛錬とか舞白の推敲とか、絕對的に表面的潤色を指すのではない。文と云ふからは其裡、想無くばあらず、想は獨存するを得るけれども、文は想を離れて孤立することは稱はぬので、想は實質、文は其の色相に過ぎぬ。這樣御法談じみた事は言はでもの事である

が、文章を修錬するとか、改竄に力を用ふると云ふと、素人衆は直に惡女が厚化粧したり、野狐が禪語を爲すやうに、物の益にも立たぬ附燒刄と早合點をするから、思出るまゝ此に閑話をしたまで。文章を鍛錬し、辭句を推敲すると云ふは如何に適當に、如何に巧妙に、其想を發表せむかの工夫であると覺悟してもらひたい。(下略)

山人は本來、理論を系統的に編む蜘蛛の技に長じた人では無かつた。右の程度の主張で、彼れ自らに取つては十分であつたに相違ない。通曉の力ある者には、これだけで事足ると考へて居られたのであらう。

晩年に至り『金色夜叉』の續稿を書く頃には、實に肝膽を碎いたものであつたが、終に未完のまま逝かれ、その漢文脈を多分に取入れた文章を、「あれは『穎才新誌』でいけません」、と自分で貶しては居られたに拘はらず、どうした動機からであつたかは知らぬが、おひ〳〵漢籍趣味に傾いて行かれた趣があつた。或は『金色夜叉』流の文章の參考に漢文の本を多く讀まれた影響もあつたのでもあらうか。そして平常の談話にも、漢籍臭味のものが折々出て來るやうになつたのである。

明治三十五年の春頃から、秋田縣大曲町の私の友人であり、從弟である小西傳助君(號平洲)から、義太夫の新作を紅葉先生に頼んで貰ひたいと、面會の際または書面で幾回も私に申込まれたも

のである。同君は曾て『新著月刊』の發行元東華堂の資本主であつたのみならず、文藝に趣味を持ち、特に義太夫の熱心な研究家で和國太夫の門下として田舍で立派な一廉の語り手でもあつた。そして新作一篇の原稿に對する報酬は五百圓まで差上げるといふのであつた。始めの中は一場の閑談くらゐに聞き流してゐたが、餘り熱心な小西君の希望に動かされて、同年の九月の初旬か十月の初旬頃、紅葉氏に此の事を私から懇請することになつた。その爲め横寺町の邸を訪ねた時のことであつた。

話の端緒は何からほぐれたか忘れてしまつたが、山人の話の中に「筆生花」といふおつた話を或る家の扁額で見たけれども、その典據がわからずに居たところ、此の頃、偶然『天寶遺事』といふ本を見ると、それが見つかつた。「それに就いて、如何にも趣味のゆたかな話があるよ」と語り出したものである。その要を摘むと、此の書に李太白が少年の頃、一夜、筆頭に花を生じたと夢みたのであつたが、その後、急に才思贍逸になつたとある。夢を見て俄にえらくなつたのでは無からう、筆頭花を生ずる夢を見る程に、平常から詩文に凝り固つてゐるから、さうした夢も見たのであらう。研磨の餘、蔗境に入つたといふ謎に過ぎまい、といふ山人の解釋であつた。この話は至極面白いか

ら當時、私の手帳に書き留めて置いた。その同じ手帳に控へてある山人の話に、面白いのが今一つ此の人の氣象をよく現はしたのが載つてある。但し年月は明かでは無いが、同じ年の十一月初旬頃のことであつたかと思ふ。

「人の上に立つものは、不斷から、それだけの心掛がなくては噓ですね。少し時代た話ではあるけれども、越王句踐の有名な話がありますね。呉を伐つに當つて、醇酒一器を獻じた者があつた。マア四斗樽を一本擔ぎ込んだ者があつたとしますかね。句踐は直ちに河の上流にあけさせ、士卒をして其の下流を飲ませたといふのですよ。そこで、本文には「味ひ美を加ふるに及ばずして、士卒の戰ふや勇氣、自ら五倍す」とありますよ。大河に一樽の酒を注いだからと云つて、酒の香もする譯はないが、その意氣に感じては、水も酒よりは、うまく飲めるといふのが人情ですからね。要するに食を分つに公平でなくちや、人の上には立てませんね」、といふのであつた。

考へて見ると、句踐の先例を山人は服膺して、或程度までは、確かに之れを實踐して居られた。友人や門下の就職の斡旋に、たとひ頼まれなくても、熱心努力されたのは、確かに此の意味もあつたかに思ふ。巖谷小波氏を京都から呼びかへして博文館の『少年世界』の主任に推薦したのも、右

橋思案氏を逗子の籠城から引張り出し、『帝國文庫』の編輯を擔當せしめたのも、大橋乙羽氏を博文館の養子に世話したのも、此等は皆、山人の盡力であつた。その他の親しい多くの友人も、大抵は、一再ならず職を得るに當つては山人を煩はしたものが多かつた。それだけ山人は交際が廣く、社會的勢力家でもあつたのである。

　山人は逝去の年に當たる、明治三十六年の春頃から、特に色々の篆刻家に命じて、種々の文句を印章に鐫らしたのであつた。その動機の中には、自分の理想や省悟や憧憬などに縁のある文字、例へば「壽盡くれども、才、盡きず」といふのや、『莊子』から選んだといふ「化、吾れに及ぶ」としたのや、「文章報國」と刻したものなど、其の尤なる部分であつた。一つは病中の遣悶の料にせられたものであらう。しかし、山人は確かに平常の心掛は「文章を以て國に報ひる」といふ程の熾烈な意氣込を持つて居られた。又これを座右の銘ともせられたのである。實に文章に忠實な人で、――私は嘗て某誌に其の一端を書いた事があるやうに思ふが、――慧可、斷臂の苦を確かに甞められたと云つてもよい位のものであつた。筆を執ると推敲に推敲を重ねた徹宵苦吟、終に曉に至るといふ例が少くなかつた。特に晩年には此の徹夜の續くことが極めて多くなつたのである。これが生命を

縮めた一つの原因にもなつたことは爭はれぬ。私ども横寺町の紅葉氏の書齋に入つて、先づ不思議に思ふ一つは、氏の机の前に當る障子にはめた美濃判のガラス二枚横にならべたのに、——南向の緣側を前に控へた、——縱横いろ〳〵な文字を書き散らしてあるのを見る事であつた。これは不圖、思ひついた小説の趣向などのヒントを忘れぬ爲め、臨機にかきつけた符牒のやうなものもあつたであらうが、大部分は、讀書その他の機會に、かねて求めてゐた、或る思想をあらはすに妥當な文字や、辭句を發見した際心覺えに書いたものであつたらしい。小説の漢字などは多くは所謂當字で、振假名をたよりに讀むのだから、いゝ加減に間に合はして置いて差支ない、といふ説もあるが、紅葉山人はこれに大反對で、苟も漢字を驅使する以上は、出來るだけ調べて、出典の確かな、正しいものを用ひねばならぬ、といふ主張であつた。そこで、從來反物や衣裳のシマを縞の字を慣用してゐるが、調べて見ると一向シマの義がなく、縞衣玄裳などゝ鶴の形容をしてゐる位で、縞は白色であつてシマではない。已むをえず始めは柳條にシマの傍訓を付してゐたが、シマは島から渡つた物といふところから來た名であるからと考へて、寧ろ糸扁に島の字を新造して使ふ方がよいと決して、今はさうしてゐるとも語られたのである。人力車を氏は俥の字であらはし、クルマと傍訓をつけた

のを非難する人もあつたが、上海で發行する『滬報』に此の俥の新字を使つたのを見て、これは便利だと思つて、輸入しただけのことである、と答へて居られた。又行廚といふのを、私の友人で漢學者の山方香峯君が妥當ならず、と攻撃してゐた話を紅葉氏に紹介して「いかゞなものでせう、」と尋ねると言下に「廚はクリヤ又は臺所と字典に邦訓があるから、移動式料理場又は臺所と解し、それを辨當だといふのは問題だ、と考へた人の論でせう。しかし、杜甫の詩に「竹裡行廚洗玉盤」とあつて行廚は簞食なりと見え、辨當といふのが悪ければ、日本ではマア重詰、割籠といふところでせうから、さうをかしくは無い筈ですよ」と一蹴されたものである。兎も角、一字と雖も漫然使つてゐるのではなかつた。その功果如何は別問題として、名匠苦心の程は察すべきであつた。

小西傳助君から義太夫の著作を山人に依頼する件については、一應、私から同君の意のあるところを包まず傳へ、直接にお願ひいたし、一旦快諾は得てゐたのである。が、しかし、報酬などの具體的問題に關しては、別に山人の方にもお考へがあらうから、其の邊の事まで、私からお尋ねするのは、都合の悪い場合もあるかも知れぬと考へ、鏡花君に仲介の勞を取つて貰ふことにしたのであつた。その時の鏡花君の書簡を左に、(明治三十五年十月二十二日付、猪苗代湖畔の拙宅へ送られた

もの）

拝啓御返事おそなはり恐入候、横寺町（紅葉氏邸）へたび〳〵うかゞひ候へども、来客の折あしく、またお留守などにてよくはなし出来申さず、昨日二六（新報社）へ参りやう〳〵、うかゞひ申候。先生（紅葉）も是非ひとつ試みたしとの事に候。が、はじめてゆゑ手心わからず、それに拵えるくらゐなら、ふしにて聞かせるばかりでなく、文章にても読ませたしとの事、それについて原稿料も、しかとは取極め申されず候へども、大抵このあひだ奥の二階にて御内意のやう、三十枚前後の見つもりにて、三百圓、しかし出来の上、心に許すほど得意の出来栄ならば、尚その上多少御願ひ申し候ても計られず、これは貴兄御含み下され度、期限は年を越して三四月頃までにといふ御返事にござ候。参考書などおほしきやうにて、小生も小磯ヶ原かり出し方ぐらゐの處、あむつとめをり候。

さて御起居いかに候や、おひ〳〵お寒さにあひむかひ、さぞ〳〵、御家の御都合ごなんぎ　ばし候ことゝおん察し申上げ候。御母堂様その他皆々さま、おんかはりござなく候や。

此の間、金尼の坊ちやん一寸上京「しば看」のことならむと存じ候。

神楽坂あたりいづこも同じ秋、ひッそりにござ候、あたりはひッそりと申候にも、其中で一人もひッそりなどといふ意氣すぢは同人間、たれも〳〵見受け申さず。たゞ横寺町の先生（紅葉）のみ来客の折あしく、また留守などゝ申し候も、〇〇〇〇〇（中略）玄関のひと目をまるくいたしをり候。しかし日に増し御氣分よく、おなりのやう相見え、一同祝着いたしをり候、ないしよ〳〵。

とりあへずおんわびまで、後便萬縷　敬具

二十二日

保存の仕方わるく、蠧魚の災にあひて、所々缺文のところあり、これには〇〇を塡めて置きます。當時鏡花君の住所は牛込區南榎町二十二番地に在つたけれども、此の書翰は春陽堂編輯局に居て書き送られたものである。

紅葉氏は明治三十五年の春、『讀賣新聞』社を退き、同年七月『二六新報』に入社したが、當時は、氏の財政上の不安時代であつたらしい。然るにも拘はらず、小西傳助君から一篇五百圓位で、義太夫の新作を賴まれたのに對し、右の鏡花君からの書面に見える通り、三百圓くらゐでよろしい、もし得意の作が出來たら、その時にはそれ以上にして貰つてもよい、と云ふのであつた。これで氏の廉潔ぶりを遺憾なく示してゐる。所謂江戸ッ子氣質を十分に顯はしてゐるとも云へやう。私は竊かに氏が聲曲方面への進出の第一歩として、義太夫の新作を期待して居つたのであるけれども、その後、段々病狀が惡くなり、三十六年の三四月頃までには、此の新計畫を爲し遂げる內約であつたのに、同年三月二日には大學病院に入院することになり、やがて入澤博士の診斷により竟に胃癌と決定したのであつた。自然、小西君との義太夫新作の約束も、そのため消滅してしまつた譯である。

遺憾至極といふべきであつた。

三十五年の冬頃かと思ふが、偶然上京してゐた小西傳助君と紅葉氏が歌舞伎座の二階で、私が紹介して面會されたのであつた。けれど政治家づきあひをするやうになつた中年以後の小西君は、如何にも寡默で、初對面などの人から見れば、何となく取つきにくい態度の人になつて居たので、義太夫問題に依り二人を結ぶべき此の好機會も、甚だ效果のないものに終つた。そして山人には決して好い印象を與へ得なかつたやうである。これは返すがへすも殘念に思ふ。この時、辭を低うして懇請して置かれたならば、義太夫の新作が完成せぬまでも、草稿位は出來たものかとも考へられる。兎も角、若干程度の進行は見るのであつたであらう。（昭、九、一）

一一、向島松壽園の頃と柳浪

――丸柱と二葉被布――目黒邊の散歩――「もつれ糸」の三部作――向島の松壽園――佐渡産瑪瑙石の印章――

明治文壇の鬼才と稱された廣津柳浪氏と私との交友關係のできた初めは、明治廿九年末か、同卅年の早春ごろからであつたと思ふ。今、私の手許に遺存してある同氏の書簡のうち、最も古いのは、明治三十年の三月廿二日夜三時としてある筆札である。氏が牛込矢來町三番地に住居された時代で、私は牛込南榎町二丁目十四番地の丁酉文社に居つた頃である。「夜三時」とあるから、氏の常習とした徹夜執筆中に、フト思ひ出して書いたものであつたらしい。その全文を左に、

過刻は御邪魔仕り失敬此事に御座候。又手先夜御話、過刻も御話ありたる、例の丸柱の女、貴兄に於て強て御執筆の意なくば、件の種を御讓被下間敷や、歸來思續けて少時も懷を去らず、大奮發を以て長篇に認め可申哉に相考申候。若くは貴兄御起稿の御思召ならば、無御遠慮其旨被仰聞度候。唯々御相談を奉得貴意候也

頓首

三月廿二日夜三時　　　　　　　　廣津柳浪

後藤宙外様

これに對し、私は直ちに自分は件の丸柱の女を材料として書く考へは全くない、お心任せに使つて戴くやうに、と答へたのである。その後、確か『紫被布』といふ題で、この素材を氏獨得の手腕で、うまく消化して書かれたと記憶する。私の話した荒筋を云へば、千葉町の或中等の商家に育つた女で、うつくしい上に諸藝にもすぐれ、如何にも柔和な、しとやかな娘であつたが、縁あつて遠金の金滿家某の伜に嫁して、僅か一年ばかりで離縁になり、その後も二三度縁づいたけれども、何時も長もちせず、忽ち離縁になるのであつた。終には實家の兄夫婦にも見離され、寒川村のはづれに、村の若い者達の共同寄進で、丸木柱の小舍を作つて貰ひ、そこに住んで、裁縫もいくらかやつたが、共同外妾と云ふ變つた生活をした婦人の半生を語つたに過ぎなかつた。それ程に墮落しても、押出しが立派で、どう見ても大家のお孃さんと思はれたといふのであつた。

　件の話は、私が十七八歲の頃、今の千葉市の寒川に一年ばかり寓居した際、見聞した事實談であつた。土地の人々の話に依ると、彼は普通の浮氣女とは少し違ふ。當人に云はせると、若い男から

眞劍になつて言ひ寄られると、それを彈いて耻をかゝせるには忍びない、そこで遂關係をする。關係をすると、情熱が燃えるやうになつて、何事をも顧みぬといふ性分だから始末がわるい。自然、良縁があつて良家の嫁に行つても、忽ち失敗して追ひ出される、といふ段取となるのであつた。つまり男を魅する諸條件を備へてゐる上に、無闇に惚れつぽいのだから次から次へと、轉蓬の止まる所を知らぬ生活をせねばならぬと云ふことになる。そこで、寒川村でも多くの青年に傷がつくのを恐れて、後には旅費を與へて所拂ひを食はせ、ねんごろに諭して北海道へ渡らしたのである。私の話の筋は大體この位のものであつた。勿論細部にわたつて詳しく語つたところもあつたかと思ふ。けれど、要するに一場の閑談に過ぎなかつた。柳浪氏はそれを捉へて、立派に一雄篇に作りあげたのだから、才分の卓逸は、この談片でも窺はれる。しかし私の話が氏の作に取入れられて、どういふ形になつたかは記憶せぬ。右の例以上に、もつと簡單なヒントから大作を成した例も氏にはあつた。確か明治三十一年の秋頃と記憶するが、柳浪氏は私と一緒に目黑の不動堂から桐ケ谷の方へと散歩に出かけたことがある。途中で、路傍の雜草の上にわづか二三寸の青と赤との毛糸が落ちてゐた。柳浪氏は、不圖、それに目を留め拾ひあげて微笑した。「何か出來さうだ」と云つたばかりで、

それを袂に收めて步き出した切り、話は他の事に移つてしまひ、私は餘り其の毛糸には關心を持たなかつた。然るに氏は其の後『もつれ糸』を始めとして、此の二三寸の毛糸が動機となつて、かなり長い三部作が出來あがつたと云ふのだから驚かされる。

この創作珍談に就いて、後に不圖、柳浪氏が、『新小說』の十週年紀念號の「今昔談」の中に、自ら書かれてゐることを發見した。私の記憶とは少し違ふから、左に抄出する。氏は『女仕入』を書いて、それからずつと後に、

『もつれ糸』といふものを書きました。これは不思議なので、今の後藤宙外君と不圖目黑に遊んだ事があります。ある藪の前で、私共の足元に紫と淡紅色との毛糸のもつれたのが二つ三つ落ちてゐたので、二人顏を見合せまして「是れは材料になりさうだ」といつて外套の襟に挿して歸りました。この一片二片の「もつれ糸」をそのまゝの題として直ちに一篇は成りました。次いでこの篇中の人物を二つに分ちまして、後篇をば一つは『文藝倶樂部』の方へ『昔ぬすみ』として起稿し、一つは同じ『新小說』に『目黑小町』と題して出しました。

此の事實について更に氏の談話筆記が、明治三十四年頃、西村醉夢氏の編輯で、新聲社(新潮社の前身)から出版の『創作苦心談』に詳しく載せられてあると思ふ。落花水面皆文章といふ句は、特に氏の爲めに出來てゐるやうに感じがする。

柳浪氏は明治二十九年に『今戸心中』を發表して名聲大いに揚がり、次いで『河内屋』をあらはして賞讃の聲は眞に嵐のやうに起つた。やがて、同三十年に『畜生腹』をかき、當時の批評家は筆をそろへて讃歎の辭を惜まなかつたものである。氏の作は、確かに、人生の一局を客觀的に描破する點に於いてすぐれ、をり／＼は深刻に徹し、對話の敍寫に巧妙を極めて、着想、往々、超凡の畛域に入ることもあつた。そこで、儼として明治文壇の巨人たる地位を占むるに至つたものである。あの頃の柳浪氏は、眞に旭日昇天の勢であつたと云ふべきであらう。

右のやうな位地に在る柳浪氏の應援を得ると、否とでは私どもの經營してゐた『新著月刊』の隆替に大關係があるので、氏の多忙であることは百も承知で、同誌第二卷（五月號）に是非に寄稿して戴くやうに、と私から懇請して書かれたものは『あにき』であつた。此の作は後に新派俳優高田實一座に依つて劇化されて、本所の壽座で上演されたものである。異彩ある作として相當評判の高いものでもあつた。此の『あにき』脱稿までの間に、氏から私宛に送られた葉書と尺牘とが數通殘つてある。氏は想を得ても急には筆を執らず、之れを抱いて、靜に醞釀するのを待つといふ態度であつた。そして、いよ／＼醗酵するの機が至れば、一瀉千里の勢で、徹夜を續けても書き通すとい

ふやり方の人であつた。それ故、雜誌などの締切期限の切迫したギリ〳〵の所までは、原稿を送ることが出來ないといふ始末になるのが常習のやうになつてゐた。この事を證するに、最も適切な氏の筆札の中から、左に二三を掲げる。いづれも明治三十年のものである。

御手紙拜見仕候。新著月刊原稿の義は明後十六日中に願上度。又外題は左に、
○野呂叉
右御返事迄、如此。草々
四月十四日夜

とあつて、翌日十五日のには

拜啓、昨夜申上候拙著外題は左の通、取替申候。
○あにき
右不取敢申上置候也。
四月十五日　　廣津柳浪

更に十六日の早天とあるものには、

拜啓原稿の義は、明早天、小生方より持參可仕候。過半出來仕候へども、今朝に到り烏渡筆が止り申候。併し、午後より夜をせめて執筆可仕候間、何卒右樣御承知願上候、右得貴意度、草々、頓首。

それから四月廿一日、もう締切期限は、とうに過ぎて居た頃の書面に、

拜啓原稿は、今朝御受取下されたる事と存候。御存の如く興來らず、無理に出きたる樣な調子に一、何を書きたるやを覺えざる程に御座候へば、校正は何卒小生方へ御遣はし下に願上候。小生方より直に秀英舍へ相屆け可申に付、時日切迫の折柄、心なきに似たれど、何卒右御取計平に願上候。參堂仕候筈なれど不取敢書面にて願上候、草々。

四月廿一日　　　　廣津柳浪

後藤寅之助樣

柳浪氏は文壇人として、私よりは遙に先輩であり、年齡もいくつか私よりは上でもあり、世間的知識に至つては、我輩などゝは、比較ならぬ程、豐富でもあつた。それにも拘はらず、妙に、私とは氣が合ひ、先輩ではあるが、心置ない友達として、くつろいだ氣分で話のできる人であつた。他と交際するのに、脊のびしてつきあふのも窮屈なものだが、さりとて見おろされてつき合ふのも具合のよいものではない。繕ろはず、飾らず、生れたまゝで交際のできるのが一番氣持がよい。柳浪氏と私とは、確かにそれであつた。無論、氏の稟性が天眞爛漫であるのと、私の愚直な性分とが、一脈相通ずるものがあつたからでもあつたらう。

氏は創作するのに惠まれた條件は何かと問ふと、から答へられた。「書くのに最も都合のよいのは夜がふけてからで、徹夜をして二晩目位の午前二三時といふ時分、頭が少し痛くなつて、鉢卷でもしたい氣分になると、不思議に興が湧いて來て、筆が面白い程、自在に進んでゆくのですよ。だから已むを得ず、日中筆を執る場合には、雨戸をしめて、室内を暗くして書くやうにして居ますよ。どうも、日がさす室では氣が散つていけません。」といふのであつた。氏は興に乘じて書く際には、僅か一晝夜で七十枚、八十枚の原稿を書かれた例は少なくはなかつた。そして其の原稿は例の練達した美しい草體で書いて、一字も消がないといへる程であつた。それ故、殆ど讀み返す必要がないのである。誤字脱字といふものもなかつた。確かに此の點から見ても鬼才といはれたのは適評であつたと思ふ。

左に掲げる柳浪氏からの態夫持の書狀は、年數は明かでないが、氏が麻布區霞町二十二番地に在住の時であるので、明治三十八九年頃のものと考へられる。此の尺牘を讀むと、氏の創作に當面してゐる場合の樣子が、かなりよく窺はれると思ふ。

何とも申譯ありませんが、今一日御猶豫を願ひます。山岸さんへ固く御約束を致したのですから、今日は

是非とも差出さねばならぬのですが、昨夜も三時過迄千思萬考の末、漸く結末迄の腹稿を得申し、これならば一氣呵成ながら、何か書き得られさうに思はれます。何卒今一日丈に御猶豫を願ひます。

後藤さんへ申上ます。貴兄は明十一日早天に御歸京なさるさうですから、脱稿した物を御覽なされずば、定めて御懸念の事と御察し申しますが、今度は、どの樣な事がありましても、屹度脱稿致しますから、御安心なさつて下さい。來月御出京の節に、顏が合されない樣な事は誓つて致しませんよ。何卒其御含にて、今一日御猶豫の樣に御賴み申します。ドウかよろしく、御二人にて御含を願ます。

七月十日朝三時半　　　　柳　生

宙　外　兄

荷　葉　兄

これは當時、春陽堂の編輯局に居られた山岸荷葉君と、私とへ送られたものである。これで原稿紙を前にして、筆を執る際の氏の眞劍味が十分に窺はれる。わづか一日の猶豫期間に、數十枚乃至百餘枚の小說を脫稿し得た、氏の卓絕の技倆の程も、明かに此の手紙が證してゐるのである。

前にも一寸かいたが、私は明治三十年の新綠の頃から、神樂町の拙宅を留守居のものに任せて、向島の白鬚神社の東たんぼに在つた、松壽園といふ某富豪の別莊であるとか聞いた、鳥料理屋に下宿をすることになつた。といふ譯は、神樂町の家は『新著月刊』の編輯事務を執るに、出版元の東華堂や印刷所の秀英舍にも遠くはないし、萬事便利な位置だといふ所から選定した住所ではあつた。

か、何しろ南隣はすぐ藝者屋で、そのまた隣家は末よし樓といふ料理店であり、二三軒北よりの角を曲ると、すぐ常盤亭といふ、これも料理屋で、まるで花柳の巷のまんなかに陣を取つた形であつた。夜になると四隣の騒々しさは、並大抵ではなかつた。醉拂ひの友人や知人が屢々とび込んで來る始末で閉口した。その難を避けて暫く閑靜なところで創作に心を潜めて勉强する考へから、向島行となつたのであつた。

　この向島への逃避策の話を、なかの好かつた柳浪氏に語ると「宅にゐてはいろ／＼うるさくつていけんから、僕も一緒にゆきたいな。連れていつて呉れたまへ。」といふ事になつた。すると、水口薇陽君もこれを聞き傳へて、一緒にゆくことになつた。

　松壽園は鳥料理の看板と宿屋の看板と二枚出してゐた。が、殆どお客といふものがなかつた。と云つて所謂高等下宿人なども居らず、ありやうを云へば、賣りに出してはゐるが、買手がつかない古別莊といふべきで、これがマア眞相であつたらしい。庭は數百坪の廣さで、築山が曲りくねつた大きな池に沿うてねたり起きたりし居り、松壽園の名に負ふ、枝ぶりのすばらしい老松が幾株もあつて、「こいつア、隨分金を食つたしろ物でさア」と植木屋が見あげて歎聲を發してゐた位だから、

松としては逸品であつたらしい。建物は古ぼけてはゐたが、かなり贅澤で、木口もよし、間數は大小十幾つと數へられたのだから、廣々としたものである。庭の手入れは行きとゞかず、所嫌はず孔雀草の黄色のさびしい花が咲いてゐた。

柳浪氏はよく云つた。「かうして居ると、何しろ、華族の御隱居樣といふところだね。」と笑ひもしずに戲談を云つたものだ。全くその通りで我々は奥の八疊を勝手に幾間も使つてゐたのである。座敷の北側をめぐる遠からぬ生垣の外は十數丁の間、百姓屋も見えぬ程の廣い田面(たんぼ)で、東裏へ出ると、蓮田になつて季節になると、好い香の紅白の蓮花が、ポカリ〳〵咲いてゐた。

三人は凡そ三ケ月間も一緒に此の家で暮したのである。勿論、私は雜誌編輯のため、をり〳〵神樂町の家へ歸つたし、柳浪氏も屢々外出されて二三夜は歸らぬこともあつたから、これは矢來町のお宅に歸られたものであつたかと思ふ。水口君も絶えず居つゞけたといふのではなかつた。けれど兎も角、一ケ月三分の二以上は居たのだから、當時我々の本據だつたと見てよからう。

かうして、三度の飯も一緒にくひ、寐るには床をならべる。あけ暮、室を同うして語り合つたのだから、非常に親しくなつた。どういふ譯か、特に私は柳浪氏とは氣があふので、赤裸々に何事を

も互に語りあつた。そして此の間に、氏からいろ〳〵教へられた事も多かつたのである。

後に劇壇に活動した水口君は、この頃から既に芝居の事には熱心で、演劇の事を、よく「斯道に盡くす」とか「斯道が振はんでいかん」とか云つたもので、芝居を聖人の道と混同する程に、その意氣込はすばらしかつた。そこで僕などは「オイ、斯道はどうした。一向進捗せんではないか。」などゝからかつたものである。氏は脚本を書くといふ爲めに、玆に隱れてゐたのだが、殆ど一枚も書かなかつたからである。

何しろ堤へ出ると、あの通り眺望はよし、のん氣に散歩する場所はいくらもあり、遊びにゆく場所も餘り遠くない距離にいくらもある。そこで、仕事が手につかぬと云ふ傾があつた。

柳浪氏は既に大家であつたので、交遊も廣く向島近邊に住む文士にも知合が多いので、篁邨、露伴、學海、三昧その他の諸大家の訪問に屢々出かけられたものだ。別に用事のあつた譯ではない。興が湧かないので、机に向ふ氣にはなれず唯ぼんやり坐りこんでゐるのも退屈だからといふので、飛び出しては訪問するのであつた。其の答禮といふ意味であつたものか、依田學海翁や幸田露伴氏や根本吐芳君、その他、來訪されたやうに思ふ。私は大家訪問には全く出かけなかつたといふのは、

卅一年一月の『新著月刊』に『思ひざめ』と題する原稿紙二百數十枚の長篇を掲げる豫定で、專ら此の起草に努力してゐたからである。

柳浪氏は私が机にかぢり付いてゐるのを傍らから眺めて「あなたは感心だ、流石に論文も書く人の頭は違ふ、どこか意志の强いところがありますね、――我輩はどうも駄目だ。妙に此の頃は、頭がふやけて筆を執る氣にはなれん、」など〻云つたものだ。

私も隨分あちらこちら步き廻はり、特に深川の八幡裏の渡船場を『思ひざめ』の一場面に取り入れる爲めに、あの邊には幾度もゆき、又淺草公園も材料に使つた關係上、宿の親爺を連れて遊びに屢々でかけたのである。どうやら目的通り秋の末までには『思ひざめ』を纏めて松濤園を引きあげることができた。私の書けたのは、實は前借といふ背水の陣を敷いてゐたからでもあつた。柳浪氏も薇陽君も一枚も書かずにしまつた。そのわけは、柳浪氏の創作のできる次第を知らねば分らぬ。氏の筆の勢といふものは、惠風一度到れば、瞬刻にして百花爛發するの概があつた。けれども、其の惠風が容易に到らぬこともあり、意外に早く吹きわたる事もあつて、其れを待つのが氏の大いなる惱みであつたらしい。千日の貯水を一時に決すると云ふやり方だから、驟雨が來なければ、跡が

續かぬ怨みがあつた。

前に掲げた紅葉山人から私に贈られた佐渡産の瑪瑙石に椿處が刻した「宙外」の印章に就いて、三十六年七月廿六日の消印ある豫報の泉鏡花君の書簡があるから次に引く。當時の様子が眼前に髣髴として見えて來る。

拜啓とかくお天氣はつきりいたさず、毎日むしあつくござ候、御地いかゞに候や。たゞ暑い〳〵とばかり、大らだりにて、仕事もはかどり申さず、貴兄は何か御着手にあひなり候や。

一昨日、先生（紅葉）おみまひ申候ところ、貴兄に進呈の此のつゝみの御印章出來いたし候あひだ、來月の御上京おん待ち申す旨、小生より申上げよとの御事に候。

時候のせゐもこれあり候にや、御容體よろしからず、此の二週間ばかりは、床におつきなされたきりにて、たちゐもおものうきやう見受け申し、皆々一方ならず心配いたしをり候。海濱に御避暑にもあひならばなど存じ候へども、それさへ唯今の處おからだ自由ならず、まことにおいたはしさ、申すばかりもござなく候。

昨日、樋口龍峽氏に逢ひ申候ところ、貴兄よりは御懇なるおふみ參りたりとて、大に悦び、是非一度御地の方へと申居られ候。其の時さそはれて、久しぶりに常盤へ參り候が、暑さは暑し、酒は飲めず、此の際うたふわけでもなし、しけだといつて燒鳥と鷄卵燒を突つきながら、スモールびしや横の額を見て、大きくなつたネ、とばかり、遠い親類の不沙汰見舞に行つたやうで、てれること一方ならず、何につけても、山水明媚の地のみなつかしく候が、これも思ふやうに參らず、「後藤さんに申譯がない」を大上段に、日々の攻撃防ぎかぬるばかり、二階から眺めては、汽車が通るよ、などゝ大に諷するには弱り候。懷中御推察、御嘲笑下

され度、しかし都合出來次第と働きをり候。

小栗も傑作以來引籠りがちにて、氣焔あがらず、本人はピー／＼啼いてイヤらるさいもんです、と悟つたやうなことを申をり候へども、先生の罵詈に因れば、内々頬べたを押着けて居るだらう、と申す事。それにつむりの毛が生へ揃はぬからとて、誰にも見せ申さず候が、案ずるに、銚子會議の說の如く、チヤンに育て禿げてやしないか、と風說いたしをり候。これぞ常識。暑さ御厭ひ專一に奉存候。後便萬縷。敬具。

七月二十六日　鏡

陸奥守樣　御許に

病床にある紅葉山人を圍む近親の人々や門弟諸君の憂慮の狀もよく見え、當時をしのぶに足るものが多いから、諧謔のところも其のまゝ揭げることにしました。これは鏡花君が、牛込神樂町二丁目二十二番地に住まれた當時のもので、猪苗代湖畔の拙宅に送られた書面である。

（昭、九、二）

一二、廣津柳浪氏の環矚

——馬田柳浪は廣津君の大伯父——昔の柳浪と『朝兒日記』——五代友厚——館林への都落ち——向島の頃——漢詩と俗謠——遺墨「柳の露」

廣津柳浪氏は、長崎縣人である、と、自ら云つて居られた。成程、極めて少々ではあつたけれども、言語に九州なまりがあつた。長崎縣の市か、郡部か、どう云ふ所で生まれて、御兩親は如何なる人々であつたか詳しい事は聞かずにしまつた。唯、士族の出身であつた事だけは確かである。柳浪といふ氏の號は、廣津家何代かの祖に文學を好み著述などもした人があつて、柳浪と稱したのをそのまゝ襲用されたものである、と、當人が私に直接語られたのである。この柳浪と云つた祖先の書かれたといふ半切の軸物を懸けて居られたことがあつた。私の眼は、餘り書畫方面の趣味に引きつけられる素質を持たぬので、確かな記憶はないが、墨繪の元祿美人圖といつた風なものを、極め

て省筆にアッサリ描き、その上に普通の和歌か、又は今樣風のものであつたか、美しい假名文字で書かれてあつた。その掛物を牛込矢來町三番地時代、氏の書齋の床の間に、かけられたのを折々見たのである。

この稿成つて數月の後、不圖、伊原青々園君が曾て、柳浪氏の祖先に關することを、何かに書かれた事を思ひ出したので、同君に書面で教へを乞うた。その答へを左に、――昭和九年九月廿五日付の書翰――「御問合せの柳浪の事は、大兄が從事し居られし「新小說」へ掲げ候ゆゑ御記憶に殘り居り候と存候、廣津君の大伯父さんに候、馬田柳浪といふ醫者にて、大阪で門戶を張り、其の家は通事なれば、支那小說を讀みこなし、それを飜案して小說にしたるが「朝兒日記」に候。廣津君は其の人の名をつぎて、柳浪と號せし由、これは當時、大兄よりはじめて承り候。太田蜀山人が二度目に大阪へ行きし時は、此の馬田氏が每日名所舊跡を案內して居り候。この事は蜀山の記行に出で居り候。「朝兒日記」で明石の浦の船で、佳人才子が邂逅して、飽かぬ別れをするあたりは、何うしても日本でなく、支那の情景に候。同書の版本の卷首に、馬田氏の題詩か何か、頗る美筆にて掲げあり候。「新小說」に拙稿を出して後、右の古本を大阪の鹿田書店にて買ひ求め、

廣津君を訪問する序に、同君へ呈上せんと思ひしに、殆ど十年間、不通になり（同君は病氣、小生は不性ゆゑ）そのうち廣津君は歿し候ゆゑ、二三年前に嗣子の和郎君へ右の「朝覚日記」を送り、佛前に供へられるやう賴み候。季札が劍を懸けたる故事をワザ〳〵まねしやうにて、心苦しく候へども、故人は悦びくれ候と存候。序でに、私事ながら大兄までお咄し申候。」

云々、趣味の盡きざる文壇の美談であるから、青々園君のお許しは得ぬけれども、茲に掲げて置くのである。

當時の氏の書齋は、南は緣側になつてゐる明るい八疊間で、道路に對した東の方は、出格子になつて、格子の上部には目白や頬白、その他の小鳥の籠がつるされ、南の鴨居には、鶯の籠が懸けてあることもあつた。柳浪氏の趣味としては、愛禽が主なものであつたかと思ふ。私などの氏を訪うて對談中、少し話が途切れると、氏は忽ち鳥籠へジイと目を注いでゝ「ピュウ」と小鳥の聲をまねる。小鳥の方でも馴れ切つたもので、その聲に「ピュウ」と應へるといふ始末。摺餌なども他人に任せず、氏みづから調製して與へ、その作り方の講釋もなか〳〵委曲を極めたものであつた。相當の長い旅行に出かける際など、愛禽を家族に任せて置くのが不安であるとか云ふので、鳥籠携帶で、

旅へ出られたと云ふ逸話もある程で、小鳥の熱愛家であつた。

氏の容貌は、如何にも九州男子らしい、引きしまつた、凛とした趣のある。細面であつた。色は少し黒い方で、目はかなり鋭く、所謂烱眼といふのは、あの様なのを形容したものか、とも思はれた。が、しかし、微笑すると、不思議な程、親しみのある光に變るのであつた。額の右側に鶉卵大の瘤があつたけれども、別段、見にくいとは思へなかつた。

氏は青年時代に、郷里長崎を出で、大阪に遊學したが、實業家になる志望のあるところから、大阪市開發の大恩人として、今でも景仰されてゐる五代友厚氏に見込まれて、同邸に寄食することになつたといふ。或は氏の父君と五代氏と懇意な間柄であつた關係から、引取られることになつたのであつたか、その邊の確かな事情は聞き漏したのである。兎も角、五代家の書生として學問に努めたといふ。氏は、をり〳〵當時のことを追懐して、

「藤田組の創立者として、今でも相當世間に聞えてはゐるが、——あの藤田傳三郎なぞはその頃五代の前に出ると、頭のあがらない事はおびたゞしいもので、まるで違ふやうな體裁であつた。」とも語られたものだ。

その中、五代氏が死ぬか、何かして、そこで氏は方向を一變して、東京に來たのである。最初は獨逸協會學校に入つて、醫者になるつもりであつたが、何かの都合で中途で廢學してしまひ、大藏省の役人になつたのである。その頃から文學書類を耽讀し、一方漢籍の研究もしたといふことである。月俸も青年としては、格段に高いので、幾分餘裕のあるところから、惡友に誘ひ出されて、つい下谷邊の花柳の巷に頻繁に出入するやうになつた。その頃の親友は高橋大華氏などが主なる者であつたといふ。使ひ過ぎから借金がかさみ、自然、役所向きも思はしくなくなり、東京に住みにくい狀態となつた。そこで、局面轉回の必要を感じて——二十四五歳の頃であつた、——一旦東京を去つて、上州館林のさる知合を便りに、都落ちを決行したのであつた。

明治三十一年頃かと記憶するが、私は柳浪氏と一緒に、上野公園から谷中の墓地へと散歩したことがある。廣津家の墓地は、谷中の墓地の田端たんぼに向つた斷崖のすぐ上にある。その絶壁の中段には、基督信者の墓地があつて、十字架が澤山に立つてゐる。斷崖の下は鐵道線路になつて風景の好いところである。柳浪氏は、此の先考妣の塋域を前にして、都落ち當時の物語を私に聞かせ、

「この下を汽車に乘つて通りましたがね、いよ〳〵東京を去るのだと思ふと、何時また歸つて來

られるのか知らん、なぞと考へてましたね、此の崖の上の兩親の石碑を汽車の窓から見あげた時の心持といふものはありませんでしたね。全く無量の感慨といふのは、マアあれでせうね。」とも云はれたものであつた。

氏は館林に着いて街路を、これと云ふ確かな目當もなく、ぼんやり歩いてゆく中、「廣津さんぢやありませんか。」といふなまめかしい女の聲に驚かされた。見ると、下谷で藝者をしてゐた女であつた。「どうして、此樣なところへいらつしたのです、」と尋ねる。「東京も面白くないから、田舍で一つ稼いで見ようと思つて來た。」すると、彼の女は親切に、「お世話致しませう、」といふ事になつた。が、氏は將來のことを考へて、斷然その女の斡旋を拒絕したと云ふことであつた。

「もし、あの女の世話にでもなつてゐたら、ついほだされて、田舍で朽ちてしまつたかも知れませんよ。全くあぶない所でした」と述懷してもゐられた。この話は、氏が晩年に某新聞記者に語り、其の筆記が掲載されたのであるが、私は其の新聞を保存してゐないので、單に當時の記憶を辿つて書くので、地名や年月などに、多少、誤があるかも知れぬ。その點に就いては、大方の垂敎を乞ふのである。

氏は館林行の旅行中、田舍道を駄馬の鞍に跨つてゆられながら、髯ぼう〱としたやつれ姿が、途上の水鏡に映るのを見て、思はず落淚したとも語つて居られた。此の地では到底思はしい就職も覺束ないと見切をつけ、程なく東京へ立ち歸り、高橋大華その他の友人の周旋で、某書店發行の雜誌に小說を書くことになり、それが發端で文壇の人となられたと云ふのであつたと思ふ。此の事は既に他に詳しく書かれてあらうと思はれるから此の位で省略する。

柳浪氏は全くの詩人肌であつた、と云はば、少し語弊があるかも知れぬが、確かに純乎たる文人肌で、「好い作をつくりたい、」と云ふ希望以外には、野心も覇氣も全く無かつた人である。それ故、世事に對しては極めて恬淡で、無執着でもあつた。大正年代に入つてからの氏に就いては、私は殆ど知らぬけれども、明治末までの氏は、書きさへすれば、相當多額の收入もあつたらしい筈、氣が乘らぬと容易に書かぬ流儀であつたのに、經濟といふ事を餘り顧みぬ氣質が禍をなして、かなり生活に困難された時代もあつたかと思はれる。

向島松壽園時代には、始めは誰れにも居處を知らさぬ約束であつたのにも拘はらず、何處から聞き出したものか、博文館の大橋乙羽氏を始め、日淸戰爭時代に獨步の愛弟通信で名を知られた「國

民之友』の國木田收二君、春陽堂の支配人佐藤助治君、その他、出版業者や新聞雜誌關係の人々が幾人も尋ねて來られた。そして「何か一篇是非私の方へも書いて下さい。」と柳浪氏と私とに迫つたものである。柳浪氏は快諾を乙羽氏その他に與へたが、私が容易に承諾しなかつたのに、乙羽氏は少しムッとした氣味で、

「あなたの『ありのすさび』を天下に紹介するの勞を執つたのは、確か僕でしたね、――少し私の方へも書いて下すつても、よかりさうなものですね。」と微笑してはゐたが、少々嫌味もまじつて痛いところを、チクリ〳〵と攻め立てたものであつた。丁度、その時分『國民新聞』に、誰が書いたかは知らぬが、島村抱月君を當時角界の横綱であつた常陸山に比し、私をその相手の梅ケ谷にくらべて批評したものが載つてあつた。それを乙羽氏が早速引合ひに出し、

「何しろすばらしい人氣なんですから、おいそがしいのは御もつともですがね、前からの御懇意も願つてゐるのですから、此の場合、何とか繰合して戴きたい。」と人をそらさぬ乙羽流の攻城法には、世馴れぬ私は非常に弱らされた。そこで已むを得ず、祕密をさらけ出して、實は自分達の雜誌に明春の新年號を書く豫定で、目下一生懸命それを書いてゐる事情を語り、やつと撃退し得たのである。

柳浪氏は博文館と民友社と雙方とも引受けたらしかつたが、その結果は今記憶して居らぬ。

松壽園の頃は、をり〳〵柳浪氏と一緒に淺酌を試みたものであつた。氏は醉ふと、いかにも愉快そのもののやうに、無邪氣な、子供らしくなる人であつた。微醺を帶びて來ると、無闇にうれしがる癖があつて、盛んに歌つたものである。上手とはゆかぬが、何でも來いの流儀で「錆さび」でよし「博多節」でよし「有明節」でも、二上りでも、三下りでも、絲に乘る程度にはやつたものだ。一番奧の手の藝と云へば、スッポリと頭から羽織をかぶつて、兩手で二本の火箸の端をそろへ、それへ煙管を載せて、逆に踊らせる藝であつた。これには特別に名があるのであらうが、今は忘れてしまつた。この藝をやる時の氏の眞劍さは、ほんたうに一生懸命なもので、それだけ實は滑稽味も伴つてゐたのである。世間では、餘り知らぬが、氏は漢詩、俳句、俗謠、何れも作つた人であつたが、遠慮深い爲めになか〳〵餘技の發表はせぬのであつた。私の手許に殘つてゐる氏が自筆のもの二三を、左にあげる。例の湖南事件で、津田三藏が當時の露國皇太子殿下を傷け參らせた時の詩が殘つてゐる。醉墨だから違ふところがあるかも知れぬ。詳報到着前に作つたものらしい。

讀露帝見狙之報慨然而賦

千乘萬騎虚飾耳。　擲彈一聲襟九逵。
客氣甕固已如此。　嗚呼時事亦可知。
囘首鄂羅公館上。　龍旗影低風凄其。
柳浪

それから「柳浪十八歳作」と自筆の註を添へた俗謠も私の手許にある。

氣休めだらうと思うて見ても　まことらしくてゐすられぬ

また氏の得意の俳句に、

白魚に口べにさいつ小傾城

氏は不斷は遠慮ぶかい溫和な人ではあつたが、どうかすると、烈しい癇癪を破裂さすことがあつたらしい。氏自らの口外の話に、何か癇癪を起して、撞球のキュウで唐紙をなぐつて大穴をこしらへ、それでも足らず、味噌汁のお椀を天井に投げあげ、その汁の糟が裏板についたのを、折からの訪客に怪しまれて、大に弱つた、などと云つて、自ら笑つてゐたこともある。こんな懺悔をして自嘲するところなど、氏の洒脱な、そして罪のない性質を十分にあらはしてゐる。氏は折々些細の事にむかッ腹を立てゝる事のあつた例も少なくはなかつた。勿論私とは一度も衝突をしたことはなかつた。氏の癇のたかぶる理由は、徹夜をつゞけなどする爲め、神經が非常に興奮し易くなるので、聊

かな不快なことにも、つい激怒されるといふ結果を來すこともあつたらしい。しかし、純良な、潔癖な超俗卑的な人で確かに詩人として生れた性格の持主であつた。次に掲げる尺牘は、右に云つた場合の例になるものであらうか。

拜啓昨夜は缺敬仕候、本日午後通四丁目（春陽堂）へまゐり候處未だ御書面不參由にて不得要領、空しく引取申候、昨夜依賴仕置候樣御取計被下候義にや、折返し御一報願上候、此書面多少の侮辱を感じながら、相認め申候、餘は拜芝にゆつり可申候。頓首

二十八日　　廣津

後藤樣　侍史

この書翰は明治四十二年十二月二十八日の麻布霞町時代のもので、確か原稿料前拂の件で、支配人の樋口助治君に私から書面は出したが、當人外出か何かして行違ひになり、會計の方まで、こちらの意志が通ぜず、空しく氏を歸らした爲めに、氏を怒らしめたものであつたらしい。時は年末でもあつたし、聊かの行違から、氏を不快ならしめたことは、今から考へても遺憾に思ふ。しかし、眞率に「此書面多少の侮辱を感じながら相認め申候」とあるのは、如何にも氏らしく、飾らず、包まず、天眞爛漫な氣象が、よく見えてゐるのである。

氏は書道にも堪能で、その筆跡は雅澹の趣に富むものであつた。昭和三年十月十五日長逝せられ、その後、三年忌の頃、御遺族の方より、氏の遺墨を木版摺にした『やなぎのつゆ』一帙を寄贈せられたのを珍襲してある。その序文は未亡人潔子刀自がものされてゐるが、氏が非常に子煩悩であつたことをも能く現はしてゐるので、これを引いて見る。

わが夫柳浪、廣津直人の愛兒なる俊夫、和郎のふたり、いまだをさかりしころ、かるた遊びを好みたりければ家のうちにてもて遊ばせむ料にとて、小倉百人一首の歌を、みづから数々の札にかきしるしてあたへけり、さるほどに、年月をへて、さのみ老いたりともあらぬ身の、病ひの床にのみ親しみつゝ、わびしき月日をおくりしが、いにし昭和三年十月、病い更にあらたまりて、柳の一葉、風なきにちるが如く、いと安らかに、永き眠りにぞつきにける、よるひるわかず、枕邊にみとりせし、うからやから、夢のこゝちして、しぐれのたもとほしあへぬほどに、せめてのこしおかれたる、水くきのあとどもとりいでゝ、ありし日のおもかげしのびあひなむと、手箱の中などかきわけつるに、かの歌かるたいでにけり、これこそは、いとも思ひ出てふかきものにしてかりそめなりし筆のあとの、今はこよなきかたみとなりぬれば、家にのみ殘しおかむも本意なきかぎりなり、などいひしろふほどにも、早も二年あまりになりにけり、因りてこたび、二人の子達と相はかり、一まきの中にをさめて、親しきやからにもわかち、かつは、世にありしころ交はりふかゝりし人々にも頒ちまゐらせむとて、このはしめに事のよしをいさゝか、かくなむ(原文に句頭點濁音符なし)

潔　子　しるす

矢來町時代の氏の玄關には、中村吉藏君（號春雨）が居られ、その以前には、永井荷風君も居られたかと思ふ。氏は紅葉氏とは違ひ、門下に對しては、極めて放任主義の方であつたかと考へられる。そして餘り弟子を養ふことは好まなかつた。小說は決して師傳の道ではない、成敗は一にその人の天分と努力如何とにあるとの說であつた。

松濤園に私と一緒に居られた頃はお互に年も若く、極めて氣樂なもので、夕飯後、蚊遣火の煙の淡くけむる表座敷で、宿の微くちやなおかみさんに淸元や文彌節の稽古をして貰ふこともあつた。甚だ妙ならぬ聲を搾り出したりしたものである。

「聲を下から出すんですよ。」とおかみさんにどなられ、座蒲團を賑めたなどの大滑稽もあつた。終に二人とも數回やつて物にならず、引きさがつたものである。けれども、柳浪氏は私よりは數段上手で、雫をかぶつて寢てゐる俥をゆり起こす程度の喉はあつたのである。宿のおかみさんは當時は微くちやの婆さんではあつたが、昔は講武所の藝者であつた、と折々氣焰をあげる事もあつた。亭主は小ぶとりの赤ら顏で、始終ニコニコしてゐる人の好い親爺であつた。小料理屋の料理人でゝもあつたらしい。

俊夫さんや、和郎さん方の實母であつた柳浪氏の先の細君は、如何にも柔和な、朗らかな、美人型の人ではあつたが晩年には不治の病に罹り、かなり長い間病床に呻吟するといふお氣の毒な境涯にあられた。そして和郎さんが、小學校に上るか、上られぬと云ふ程、幼少な頃、沒せられてしまつたかと記憶する。氏自身も、もはや白玉樓中の人となつて既に七年も經つてゐる。

いろ／＼と追懐に耽ると、世のはかなさがシミ／″＼と感じられる。「大曆年中に竹馬に騎るもの、幾人か見得る昔日の春」、と云つたやうな感なきを得ぬのである。（昭、九、四）

一三、正岡子規と裸體畫事件

——藤野古白と子規——『新著月刊』の裸體畫事件と子規——選句の拒絶
——控訴院の辯論——子規を病床に訪ふ——

青年時代の或期間、私は陸羯南の文章を愛し、その爲め『日本』新聞の熱心な購讀者であつたけれども、私の思想や趣味が、おひ〱變つて、いつの間にか、純文學の方へ移つたのである。それでも、長い間の愛着の餘波で、急に捨てる氣にはなれず、つい其のまゝ、明治廿六年頃までは、『日本』を取つて居つた。此の新聞を通じて、正岡子規氏の名を始めて知り、その文章にも親むやうになり、俳諧の方には、私は全く門外漢ではあつたけれども、何とはなしに、同紙に連載された『獺祭書屋俳話』その他を愛讀して居つたのである。

前にも一寸書いたが、早稻田の文科在學中の同期生に、子規の從弟に當たる藤野潔君（號古白）

が居られ、同君の口から子規に就いての色々の話を聞かされたものだ。確か、廿五年の秋頃であつたと思ふ。その頃、藤野君は高田の馬場の、周圍に廣い茶畑のつゞく、立派な農家の表座敷に下宿して居つた。この家は、昔、庄屋でも勤めたかと思はれる程、座敷や庭などの趣が、普通の百姓とは違ひ、なかなか雅致のある作りに出來てゐた。藤野君の借りた室は、古風な書院づくりの、天井の高い十二疊間であつた。その裏板の四方の臺輪に殘るところなく、俳句の季題を障子紙に書きならべたのを貼りまはして、その中央に、藤野君は飄逸な顏をして、無頓着にすわり込んでゐたものである。そこへ尋ねると、必ず子規氏の話の出なかつた事はない位であつた。當時は隱然、競爭者の位置にあつたからでもあらうか藤野君は飯を食ふ間にも、臺輪に貼りまはした季題を讀んで、暗誦につとめるのだと云つて居られた。

「僕の從兄に正岡升（のぼる）といふ俳句に熱心なやつがあつてね、古來からの俳諧の分類などもやつて居るし、なか〳〵熱心に研究して居るんだよ。そしてね、肺病になつて血を吐くもんだから、杜鵑が血を吐くと云ふんで、子規といふ號をつけてね、それに又、のべつ喀血するといふんで、常規（常血（つねのり））といふ諱名をくッつけてるんだ。頗る面白い男なんだがね、――僕も負けんつもりで、勉強をしと

るが、なか〳〵かなはんよ。」と歎息してゐたものである。
藤野君は、また「正岡は口の悪いやつでね、僕の古白といふ號を、古くて白いなら、犢鼻褌（ふんどし）見たいなものだらう、なんてからかふんだよ。」とも云つて苦笑して居つた。

「墨汁一滴」の六月十五日（明治三十四年）の條に、「明治二十二年の五月に始めて喀血した。其後は腦が惡くなつて試驗がいよ〳〵いやになつた。」

又寒川鼠骨氏編の「子規居士年譜」には、

明治二十二年。二十三歳。水戸に遊び、大洗に至る途中那珂川舟中にて雨に會し、震慄す。
五月九日夜喀血、一週間に亙る。痰に血を混ずるは月餘に及ぶ。
七月歸鄕。
九月「啼血始末」を草す。子規と號す。
大磯に遊び「四日大盡」を草す。
十二月歸省。

失戀の古白は、彼の自作、「怨みのみ深くなりゆく磯なれや、とはにみちくる思ひなりけり」や、「人ごゝろつらしと思へばふくろ夜を、夢もたのまず起きてあかしつゝ」を悲痛な調子でくりかへしくりかへし、屢々吟じて居つたのである。が、終に明治二十八年四月七日、寄寓してゐた湯島切通坂の叔父の家で、決然として、ピストルで、前額及び後頭に各一彈を打ち込み、同十二日、大學第

醫院で歿したのである。子規が追悼の句に「春や昔古白といへる男あり」。

そこで、親友であり從兄でもあつた子規氏は、彼の爲めに、その遺稿の編輯を企て、翌二十九年中に右の遺稿の蒐聚を私どもにも依頼されたのである。その際、古白に就いての追憶談寄稿の作その他に關して、兩三度、書面の往復をしたやうに記憶する。これが子規氏と私との交渉の開かれた發端であつた。

その次には、明治三十年十月頃、『新著月刊』の編輯會議で、詩、歌、俳句、川柳、俗謠の懸賞募集をすることに決したので、その選者は、いづれも當時の大家に依頼した。が、俳句の選者は子規氏にお頼みして、快諾を得たのであつた。いよ／＼第十卷（十二月號）に募集廣告を發表した。子規氏からは、「蓬萊」「枯野」の二題を提出して貰つた。そして、翌三十一年二月に、結果を發表したのである。この時、子規氏の選者吟は、

蓬萊に根松包むや昔ぶり

旅二人話盡きぬる枯野かな

然るに、同誌の裸體畫事件―彫刻の裸像寫眞もあつた―といふものが起つて、子規氏は之れに反

對の意見を持つて居られた。その關係からでもあつたか、終に俳句の選者たることを拒絕せられた。

明治三十年十二月十一日付で、封筒の表には「丁酉文社御中」として送られた子規氏の尺牘に、

前略御免、用事のみ申上候、新著月刊挿畫ノ事ニツキ、兼テ異見ヲ抱キ居リ候處、特ノ序ニソヲ新聞紙上ニ現スヤウニ相成候ニ付、一言申上度儀ニ候、陰ニ之ヲ誹笑スルガ如キ形迹面白カラザル故ニ有之候。裸體畫掲載ハ善ケレド、裸體畫ノミ多ク掲載セラルヽハ如何、裸體畫ハ美術ノ一部分タルコト論ナシ。ソレヲ特ニ澤山並ベテハ彼是ノ評アルモ致方無之ト存候。裸體畫中ニテモ野卑ナラヌ者ヲ撰バレテハ如何候ヤ。永洗ノ畫モ近來ノハ余リニ野卑ト存候。少シ手加減アリテハ如何候ヤ。委細ハ筆ニ盡サズ、御面會ノ節、可申上候。愚意御推察奉願候。拜啓。

十二月十一日　　　　正岡常規

小杉天外君
島村抱月君
後藤宙外君

この書面は下谷上根岸八十二番地より遣はされたものである。

私どもに面會の機會あらば、委曲の意見を披瀝しようとの書面であるから、病床にある氏に對しては、私がお訪ねして、十分氏の意見も承り、自分の方の事情も述べて、諒解を得るやうにするの

が、禮儀としても當然であつたかと思ふ。それを簡單に實行する運びに至らなかつたのは、内部に葛藤があつたからである。予想氏へは何とお挨拶をしたのであつたか、今は全く忘却してしまつた。が、定めし要領を得ない曖昧なものであつたかと思ふ。勿論、社員協議の結果でお答へした筈である。大正十五年一月發行の「早稲田文學」明治文學號に、私が「新聲月刊」發行と其の環境」と題して寄稿した中に、

明治三十一年の二月頃からと思ひますが、從來の口繪に廣業、永洗、半古、其他の名家に卷頭の小説の或場面を描いて貰ひ、極彩色の木版刷にしてゐたのを、急に網版の裸體畫に換へてしまつた。この裸體畫は佛蘭西から新らたに歸朝された黒田清輝畫伯が携へ歸へられたもので、彼地では有數な近代の名畫であつたさうです。されば網版の局に當つて丁酉文社々員の知つた事はなく、全く出版元の柴田君が經濟上の都合と好奇心をそそつて、賣らうといふ商略に外ならぬのであつた。實は當時柴田君は書肆の利益を困ぬるく思ひ、一攫萬金を夢みて、内々相場に手を出し、大損失を招いだ。それに花柳癖が嵩じて、店には殆ど姿を見せぬ程であつたから、手内も頗る窮迫に陥つてゐたらしい。それゆゑ安價で出來る裸體畫を頻載するに至つたのである。（下略）

と書いた通りの事情であつた。が、しかし、右の寄稿を書いた當時、私は郷里六郷町の町長として煩瑣な俗務に忙殺されてゐたので、五十嵐力氏のお口添へで、寄稿の承諾はしたものゝ、何等調査

もせずに筆を執つたので、今から見ると、少々づゝ誤謬の點がある。『新著月刊』に歐米古今の繪畫、彫刻等の寫眞版を掲げ始めたのは、三十一年の二月ではなく、三十年の六月號からであつた。今日から見れば、殆ど問題にもならぬ程度の裸體畫及び彫像の寫眞であつた。けれども、其の頃の當局者の眼から見ては、問題にされたものと見え、既に私が向島の松壽園にゐた頃、何かの序でに幸田露伴氏を訪ねた際にも、裸體寫眞を續載するなら斷乎たる處分をすると警視廳では云つてゐるさうだから、今の中に警戒して、何とかしたらよからう、と親切に忠告して吳れたのであつた。大橋乙羽氏からも同樣の注意を受け、その他、赤門出身の某文學士からも同じやうな事を聞かせられたのであつた。曾て『早稻田文學』にも書いた通り、

私も好んで掲載してゐたのではないから、柴田君に再三裸體寫眞はやめて吳れ、と頼んだ。が、「何、心配には及びませんよ」と一向取合はずに、其の後も載せてゐた。確か三十一年の二月二十五日と思ふ。子規氏から判者たることのお斷りが來た。その端書の消印は月だけが不明瞭であるけれども、年と日とは確かである。しかし第一回の募集俳句の締切が一月十日で、結果の發表が二月三日、と當時同誌第十卷の廣告に見えるので、右のやうに推定される。卽ち、

第二回募集俳句ノ判者タルコトハ御斷リ申上候　　正岡　升

丁酉文社御中

といふのであつた。

單に右のやうな意外な事情の爲めに、子規氏に對しては、實に相濟まぬやうな始末で、ほんの一時ではあつたとは云へ、氣まづい手の切り方になつたのである。

前掲のやうな四圍の形勢であるから、私は竊かに不安に堪へない感を抱いてゐたのである。やがて豫感が事實となつて編輯人たる私と、發行人の柴田資郎君とは、風俗壞亂罪で、東京地方裁判所に告訴されることになつた。此の時は、程なく無罪となつた。が、檢事が不服で控訴したのである。つゞいて控訴院の法庭に召喚され、塵溜箱のやうな被告人席に押込まれて、掏徒や竊盜人などと一緒に、下半身を圍はれたのは、餘りよい心持はしなかつた。裸體畫事件といふのは、當時珍らしかつたので、七八人の有力な辯護士が無料で引受けて呉れたのであつた。その中には、其の頃法學者として有名な飯田宏策氏や、文學者で辯護士を兼ねた石橋忍月氏もあつた。主任辯護士の飯田氏が私に「被告人は成るべく云ひたい事も遠慮して、云はない方が結局利益ですよ」、と注意して呉れたので、殆ど自分の意見は述べずにしまつた。特に、此の問題に興味を持つて、私に書面を送つて激勵された青柳有美氏は、當日わざ〳〵傍聽に見えられ、黑田清輝畫伯も來て居られたかと思ふ。幸

ひ控訴院に於いても無罪となつたのである。時は明治三十一年の五月末の頃であつたと記憶する。

此の控訴公判を傍聽された直後、青柳有美君から、同年六月一日付で巣鴨村明治女學校發で送られたのを左に、

劣生は秋田のものにて賢兄等とその生國を同ふす、劣生は裸體畫に熱中すること頗る厚きものなり、公判の日法庭にあり、今吾黨の全勝を聽て欣幸禁じ難く美神の名を唱し、その萬歳をたゝへ度心地のせられ、賢兄に無罪の宣告ありしを切に〳〵祝ふ、劣生が裸體畫賛論一篇前後十六ページ餘のもの四五兩月の『世界之日本』にあり、幸にして近刊『新著月刊』裸體畫論に加へらるゝを得ば幸榮之に過ぎず、願くば自重自愛せられんことを。　敬具

六月一日　　　　青柳生

宙外先生侍史

これが端緒となつて、有美君を知り、後年長く御懇情を辱うする間柄となつたやうに思はれる。

大正十五年一月の『早稻田文學』に私の書いた『新著月刊』に就いての記事は、俗務多忙の際、調べずして記憶のまゝの執筆であつたのでかなり誤謬がある。島村抱月君の「月暈日暈」を氏の處女作のやうに云つたのは誤で、同誌第一卷に氏は既に「白あらし」を發表してゐた。泉鏡花君の「湯島詣」小栗風葉君の「寢ざめたる女」を同誌に掲載したやうに云つたのも間違つてゐる。こゝに訂正の機會を得たのは、實に僥倖である。

明治三十三年の夏の頃と思ふ。根岸の鶯横町に、子規氏を訪うたことがあつた。別に用事があつ

たのではなく、小杉天外君を訪ねた際、裸體畫事件後、變な具合で音信不通の形になつてゐる子規氏に對し、何となく濟まんやうな氣もしてゐたし、敬意を表したい氣がしたので、すぐ其の東隣になつてゐる子規庵を尋ねたのである。曾て『ほとゝぎす』に載せられた不折氏か爲山氏かの寫生圖で、子規庵内外の模樣の概略は知つてゐた。刺を通ずると、心よく妹さんらしい人の取次で、其の病室兼書齋に通された。そして雜誌などの寫眞で、既に見てゐた子規の痛々しく痩せ衰へた、仰臥の姿に接したのである。先づ何と挨拶してよいかゞ胸に支えて、言葉は容易に出なかつた。やつと、初對面の言葉を述べて、以前雜誌の應援をして貰つた頃の禮を云つた程度以上に出ることは出來なかつた。それに俳諧の方は全く門外漢だから、話題にも窮した。寧ろ用事もないのに、此のやうな重い病人を、少しの間でも煩はすことは宜しくないことだといふ念が頻りに動くので、いよいよ話の端緒を開くのにも困つた。その中、よい具合に、子規氏から口が開かれた。「坪内先生はお達者ですか。」と低いが力のある聲で云つた。

「はい、相變らず御元氣のやうで御座います。」と辛うじて話題を捕へ得た。曾て、子規氏は本郷の進文學舍で、坪内先生から英語を學んだことがあるとか云ふ、追懷談を極、簡單に語られ、又古

白のことを、ほんの少しばかり語られたのである。私は成るべく早く、立ち歸らうとは考へたが、好機會であるから、かねて希望してゐた、短冊を一枚なりとも書いて戴けるかと問うて見た。どうかと危ぶんでゐたら、意外に快諾して呉れた。「のぼさん、のぼさん、」と子規氏を呼んで、身邊の世話をしてゐられた上品な老婦人―無論、子規氏のお母さんであつたに相違ない、―このお母さんに短冊を三枚取り出させ、仰臥のまゝ筆を執つて、すらすらと俳句を書いて、頗る上機嫌で私に贈られたのである。

子規氏は南に當たる上野の山の方を枕にして臥てゐた。その西側の高い壁に、古蓑と古笠との掛けられてゐたのが、第一に目についた。山の方には縁側を隔てゝ、餘り廣くない庭が開かれ、色々の草花などが植ゑてあつたと思ふ。が、詳しい事は記憶せぬ。兎も角、天井の頗る高い、かなり廣い室であつた。

件の蓑笠は屢ゝ子規の文章や、和歌、俳句の題材となつたものであつたから、特に印象が深く今も忘れられない。

明治三十三年の「笠三首」と題するものに

旅行くと都路さかり市川の
　笠賣る家に笠もとめ著つ

菅笠の小笠かぶりて下總の
　市路を行けど知る人もなし

武藏野のとがらししぬぎ旅行きし
　昔の笠を部屋に掛けたり

簑一枚、笠一個、蓑は房州の雨にそぼち、笠は川越の風にされたるを床の間にうやうやしく飾りて、

　蓑笠を蓬萊にして草の庵

又俳句にも、

とも見える。『墨汁一滴』には、「病室の三方には襖が十枚あつて、茶色の紙で貼つてあるが、其茶色も銀の雲形も大方はげてしまふた。左の方の柱には古笠と古蓑とが掛けてあつて、右の方の暖爐の上には寫眞版の手紙の額が黒くなつてゐる。」ともあり、また『病牀六尺』には、

今日只今（明治三十五年六月五日午後六時）病牀を取卷いて居る所の物を一々數へて見ると、何年來置き古した蓑、笠、伊達正宗の額、向島百花園晩の景の水畫、雪の林の水畫、醉桂甫藏澤の墨竹、何も書かぬ赤短册などの外に。云々とも見える。

笠も蓑も、時に依つて移動されて位置を變へたものであらう。それを見て、往時の旅行を追懷し

て、自由にならぬ身の、せめてもの心遣りにしたものであつたであらう。私の訪ねた際には、夏のことで、障子も唐紙も殆ど全部開け拂つてあつたから、極めて風通しのよい、明い廣々した室だと感じたのである。

一四、碧梧桐、春陽堂初代、幽芳、篁村等の事

――『新著月刊』の沒落――京華日報社に入る――河東碧梧桐――猪苗代湖畔の逍遙――菊池幽芳と『大阪每日』――和田篤翁の死顏へ初對面――春陽堂の招聘――

明治三十年頃の小說を主とする純文學雜誌は、博文館の『文藝倶樂部』春陽堂の『新小說』それに我々の『新著月刊』、この三雜誌が鼎足の勢をなして對峙して居つた。然るに、『新著月刊』は同年の夏から秋へかけて確かに當時は『新小說』を凌駕するに至つたのであつた。此の事情は、後に、私が春陽堂の編輯局に入つてから、支配人佐藤助治氏の欺らざる告白に依つて知つたのである。その頃、『新小說』は追々と讀者を『新著月刊』のために食はれて、到底見込みが立たんといふので、廢刊の相談をしてゐた位であつたと云ふのである。

然るに、翌三十一年の三月に至つて、『新著月刊』は告別號を發刊して、廢絶することになつたから

である。この終刊號は、東華堂主人の田口賢郎の意匠とでもいふものか、宛然、死亡廣告そのまゝの表紙で、白地へ誌名に黒枠をまはしたものであつた。東華堂は、投機その他の失敗のため、もう三十年末頃から破産狀態に陷つた趣が、表面にまで見えて來たのであつた。隨つて、其の影響は『新著月刊』にまで及び、外觀も內容も追々と劣惡ならざるを得ぬ次第となつた。つまり技初、發行元と我々丁酉文社員との間に、如何なる事があつても、滿一ケ年間は繼續する契約があつたので、發行元の柴田は單に其の期間だけつゞけて行きさへすれば、別に文句は無からう、と云ふ態度となつてしまつた。勿論、これは資力が乏しくなつたからの窮策に外ならなかつたと思ふ。かやうな次第で、短命を以て『新著月刊』は葬られてしまつた。

　私は文壇の人となつて、極めて日は淺かつたに拘はらず、そろ〳〵創作慾の動かぬ際、强ひて小說を書くことの苦みを經驗し始めて來た。そして狹い見聞の範圍から拾ひ集める材料で、捏ねあげてゆく創作の賴りなさをも、窃かに感じるやうになつた。一方には、何とはなしに、漠然とした希望に燃えてゐたことも事實ではあつたけれども。そこで、職業としての「小說を書かぬ生活」を要求するやうな氣持にもなつてゐた。勿論、創作慾の旺盛な機會に筆を執ることは除外例としてとい

ふ、極めて虫のよい、勝手な希望を持つてゐた。丁度、そこへ、渡りに舟といふ好都合なことが出來てきた。

明治三十一年四月下旬頃のことである。後に、高天原ギリシャ說で世間を驚かした、木村鷹太郎君が突然私を尋ねて來た。そして、今度同志の瀧本誠一、二宮撫松等と共に『京華日報』といふ大新聞を發行する計畫だが、君は社會部主任として入社して吳れぬか、始めの中は花々しい事もなからうが、何しろ、山縣有朋公爵を背景にしてゐるのだから、將來は相當發展するの望みはあるよ、と頻りに勸誘するのであつた。熟考して見ることにして、一旦木村君を歸らした。が、跡で考へて見ると世間を廣く見るといふ事は何より大事だ、將來小說家として立つて行くにしても、いつまでも狹い壺中の天地に跼蹐してゐては駄目だ。この機會に、兎も角も、活世界に身を投じて苦鬪するに限る、と忽ち決心をしてしまつた。かなりな優遇の條件で、程なく私は入社した。

『京華日報』は京橋區新肴町にあつて、幹部はといへば、後に、經濟學博士で、慶應大學にをさまつた瀧本誠一氏と二宮撫松氏とであつた。木村君は論說記者で、社會部には、私の下に河東碧梧桐君が居るといふだけで、その他は殆ど云ふに足る程の事も無かつた。三十一年五月十日に第一號を

發行し、鈴木華邨が『廣惠編』の圖を模寫した繪附錄をつけた。權門の宴樂と、野に餓殍の累々たることを對照した諷刺畫であつた。美姬を擁して酒を酌む權貴のかたはらに、飢民の幽靈が、羨しさうに付きまとつてゐる光景も書いてあつた。その幽靈には皆足があるのだから面白い。「支那の幽靈には足があると見えますね。」と私が二宮氏に尋ねて見た。「さうだね。支那のも足があるが、西洋の幽靈にも足があるやうだ。矢張、所謂れば品かはるんだね。足のない日本の幽靈はどうしても飛行自在でなければ、自然用が足りないといふことになるんだね。」と大笑ひしたものだ。

この繪附錄は無論購讀者を喜ばせるつもりで拵へたものに違ひなからうが、其の說明が、『沈學士勸茄廷議』といふのを抄出したもので、漢文で全部出來てゐたから、當時としても此の位、大衆向でない新聞附錄も珍しかつたのである。

俳人として、後には、巨匠の地位を占むるに至つた河東碧梧桐君も、其の頃は、單に發句を作る青年といふだけで、社會部の雜報記者に過ぎなかつた。丁度、臨時議會の開かれてゐる際で、每日河東君は衆議院の傍聽筆記にも出かけて居られた。

ほんの一ケ月位で、私は『京華日報』社を退いてしまつた。どうも私は新聞運のない男で、私の

關係した新聞で、隆盛になつたのもないし、また盛大な新聞社に社員として入つた經驗もないのである。

河東君は至極寡默な方の人で、一ケ月間程、机を並べてゐたが、殆ど雜談も多くは言はずにしまつた。私は明治三十四年五月に東京の宅を引拂つて、會津の猪苗代湖畔に退隱してしまひ、所謂田園生活を實行した。最初の計畫では、閑地に隱れて思ふ存分に讀書もし、思索もし、飾らざる人生の眞相にも接觸し、大いに蓄積するつもりであつた。山河、不齊の廣長舌に對しても、何等點頭することさへも知らなかつた。私は、まるで朽株のやうなものだつた。忽ちのんきの一方になつてしまひ、殆ど讀書も考へることも忘れ、山に遊んだり、湖岸をうろついたりして日を送り、追々それ等にも飽いて、頗る退屈を催して來た。別に消閑の妙案として採用した譯でもなかつたが、不圖した氣まぐれから、夏蜜柑の核を蒔いて、毎日その芽の出るのを待ちかねて、日に幾度も同じ花壇を見舞ふ程の愚に返つてしまつたのである。閑暇を得て書を讀むなどといふのは、讀書嫌ひな愚人の遁げ口上だな、と始めて氣が付いた。が、その愚境を脫しようとする氣力さへも失つてゐたのである。生欠(なまあくび)を嚙みつぶして、其の日〱を暮してゐるところへ、突然、河東碧梧桐君が、約十年目位で、

私の湖畔の隠宅を訪ねて呉れたのであつた。それは明治三十九年の十月であつた。君は既に俳壇一方の大将になつてゐた。全國を踏破しようといふ俳諧行脚の途中であつたのである。岩代の郡山町の俳友二三に送られて、今若松市の俳友を訪ねて行く序でに、立寄つたのである、といふのであつた。後園の山に向つた縁側に、腰かけのまゝで、粗酒鹿飯のお相手をしながら、久しぶりで語つた。

「どうです。かういふ閑靜な所に住んでゐたら、いゝ心持でせうね。そして、いくらも勉強出來るでせう。」と碧梧桐君は云つた。

「私のやうな、頑石見たいな頭の持主では、どんな所に住んでゐても駄目ですね。石ころは矢張石ころで海へ抛（ほう）り込んでも、神棚へ載ッけてもつまりは同じ事ですね。」

「ぢや、そろ〳〵、東京が戀しくなつたのぢやありませんかね。」と碧梧桐君は笑つてゐた。もう夕暮近くなつたので、立去られやうといふ時、私は記念の爲めにと、違棚の小唐紙に一筆お願ひした。

明治丙午十月猪苗代湖畔戸の口を過ぎて
宙外氏閑居を訪ふ　碧

出かけて鳥わたる湖の隠め哉

話は少し逆戻りすることになる。明治三十一年八月頃に、私は牛込神樂町二丁目から、同區の市ヶ谷山伏町二十一番地に轉居したのである。俗にいもちの木坂上と云ふ所であつた。この年の十二月二日に『大阪毎日新聞』社主事菊池幽芳君が博文館の大橋乙羽氏の紹介狀持參で始めて私を訪ねられた。乙羽氏の書面は、

近頃ハ如何、年末定めて御忙はしき事と察上仕候

さて小生友人、大阪毎日新聞社文學部主事菊地幽芳君、上京の序を以て大兄に逢ひ、御高談を拜聽致度由申され候まゝ、紹介狀相添へ申候、御面會願上候　敬具

卅一年十二月二日　大橋乙羽

後藤宙外兄

といふのであつた。

幽芳君に面會して見ると、私に『大阪毎日』に入社して呉れぬか、といふ勸誘であつた。條件は月俸當分七十圓で、年二回半期毎に約月俸の倍額程の慰勞金も出すといふ、相當な優遇ぶりであつた。當時の物價の標準から云へば、現在に比べると、少くも三倍の購買價値があつたのであらう。

一介の書生たる私としては、決して其の待遇に對しては、不足はなかつた。けれども、何はともあれ、東京の地を離れることは當時の私としては、絶對に好まなかつたのである。そこで、率直に此の意味でお斷りをした。幽芳氏は遺憾ながら、さう云ふお考へならば是非もない、然らば、客員として、毎週一回位づゝ「文藝通信」といふやうな物を寄稿して貰へぬか、といふお頼みであつた。その位のことなら、お引受けしませうといふ事で、その後、四五年間、毎週、何か雜文を書いて寄稿したのである。これが私と菊池君とを結ぶ端緒となり、また後年、氏の著述が多く春陽堂から出版される橋渡しにもなつたかと思ふ。あの際、幽芳君の勸めに任せて、大阪に行つてゐたら、私の其の後の生活狀態は、かなり變つてゐたかも知れぬ。

明治三十二年の二月廿四日に春陽堂主人の和田篤太郎氏が沒した。當時、東京に於いて純文學方面の出版業者としては、第一流であつたことは、何人も異論はあるまい。氏は岐阜縣出身で、鷹城と號し、始めは洋書などを學び、後に警察官吏となり、警部まで昇進したが、明治十四五年頃から古本屋を兼ねて出版業を開始し、芝區新櫻田町の北側に、さゝやかな店を張り、撓まざる努力を以て、追々と成績を擧げ、やがて、日本橋區通り四丁目五番地の角屋敷に移轉し、それから以後は、

一層業務を擴張し、各時代を代表する文壇の諸大家と提携することに力め商人ではあつたけれども、出版物の意匠その他十呂盤を超越した一方面もあつて、確かに明治三十年代から四十年代の末期まで、春陽堂は、我が國、文藝書類の出版事業に貢献するところは少なくは無かつた。勿論氏は三十二年に易簀したのであるから、その以後は未亡人梅子刀自が、第二世として氏の遺志を繼承し、其の事業を經營したものである。

私は春陽堂主人の死亡通知に接して、二月廿五日頃に追悼の意を表する爲めに春陽堂を訪れた。これより先、明治廿九年の九月、『新小說』に『闇のうつゝ』を掲載して貰つて以來、『白つゆ』や『新機軸』などの單行小說も春陽堂から出版した。が、つい一度も主人の和田篤太郎氏と面晤するの機會を得なかつたのである。然るに、弔問の日、未亡人梅子刀自は、私を既に主人とは懇意の間柄であると考へてゐたものと見え、一應の挨拶をすると、

「こちらへ、何卒、お通りなすつて下さい。」といふので、新佛の臥てゐる奥の部屋へ案內して呉れたのである。

「何しろ、三年も引續いて煩つて居りましたから、久しく諸先生方へも御無沙汰ばかり致して居り

ましたので、御座います。マア、御覧下さい。長わづらひの割合には、そんなに痩せても居りません」と云つて、未亡人は顔にかけた白い切れを取りのけて呉れたのである。

美髯を蓄へた、眠つてゐるやうな如何にも穏かな死顔に、私は始めて面會したのである。實に奇縁と云ふべきだと感じたのであつた。かねて、親友社の人々から、春陽堂の「髯」がとか「髯おやぢ」なぞといふ、綽名を聞いてはゐたのであるが、その美髯に接したのは此の時が最初であり、又最終でもあつたのである。別に改めて未亡人に尋ねて見たこともなかつたが、恐らく、終生、主人と私とは、健康な時分から懇意な間柄であつたと考へて居られたらしい。その證據には、和田氏が生前頗る愛用されたとか云ふ、立派な朱總の紐をつけた瓢簞を形見として私に贈られたのであつた。確か京都に遊んだ際、求めて來たのだと云ふのであつた。未亡人は其の頃までは、多分、私を上戸黨だと考へて居られたのであらう。和田氏は東京書籍出版營業組合の委員として、在職十年、功勞少なからずといふので、後に同組合長の名に依り、銅製香爐を追贈して、其の德を表彰せられた事もあつたのである。

私は三十二年三月末に、牛込區市ケ谷山伏町から、同區市ケ谷藥王寺前町八十三番地に寓居を移

した。そして翌三十三年一月より春陽堂に入り、『新小說』の編輯主任となつた。これは同堂支配人佐藤助治氏の勸誘に依つたものである。同編輯部には、從來前田曙山、柳川春葉の二君が在つた上、私と同時に、泉鏡花、小栗風葉、神谷鶴伴、田代曉舟の諸君も正社員として新たに籍を置かれ、『新小說』の擴張と刷新とに働かれたのである。

『新小說』は明治二十二年一月に、森田思軒、饗庭篁邨、須藤南翠諸氏を主筆として其の第一號を春陽堂から發行したのである。これは第一次の『新小說』であつた。その翌年に至つて、一旦廢刊せられた。然るに、同二十九年七月に至り、幸田露伴氏が編輯の主宰となつて、第二次の『新小說』を同じ春陽堂から出版された。それが二十數年間も繼續されたものであつた。私の春陽堂に入つて始めて關係したのは、第二次『新小說』の第五年第三卷（二月廿五日發行）からであつた。

『新小說』といふ標題の名つけ親は、饗庭篁邨翁であつたといふ事實は、明治三十七年十月廿七日付の、左の山岸荷葉君宛の篁邨先生の書面で明にわかる。

拜復、新小說十年祭とや、誠に目出度候、小生名付親の事なれば、其行末の彌榮へに榮え候事、何より嬉敷御座候、所感などとはむづかし、一番若々と小說を書いて見たく候、御都合如何、宙外君とも御相談被下度候、右申上候

饗庭先生には早稲田文科在學中、講師として近松作の講義を承はつたのみならず、向島小梅のお宅や牛込赤城下のお宅にも兩三度はお邪魔も致し、色々趣味の豐富なお話も拝聽いたしたのである。が、しかし、先生の奥様が、私と同じ秋田出身のお方であると云ふところから、徳川時代の秋田人に手柄の岡持といふ面白い男があつたが、「定めし御懇意でせうな。」などゝ出しぬけに云はれて、大にてれたり、まごついたりしたこともあつたのである。

私が春陽堂に入る話が初まつた頃、御年賀のため、小梅のお宅に罷り出で、御馳走になつた上に、先生、木來、容易に揮毫をなさらぬ御内規があると仰せられたに拘はらず、特別の詮議といふことで、短冊を一枚、書いて戴いたものを只今も珍襲してある。裏に「三十三年一月一日宙外君與僕唱和」ともいされてはあるが、唱和などの出來る私ではなかつたのである。

宿の梅句も人の集けり　　篁　村

少し順序は狂ふことになるが、明治三十年の十一月頃、『東京朝日新聞』に篁邨先生の書かれる劇評を『新著月刊』に轉載することを承諾して戴けぬものか、とお願ひ致した際の、御返事は例の妙

文で、至極面白いから次へ、

拜復御評に付云々、御入念の事に御座候、拙者に於而毫も差支無之候、今はよくも覺えず候共、新聞條令とかに、一日以上紙上に掲續候者は、編輯人の承諾とか何とか申すことあるやう存じ候、勿論、無論、新聞社にて異論も無之候に候へども、野暮といふものが理屈に乘つて跳り出しては、かぶき座の喝采より無風流な事に候へば、貴兄御用心有之度、右重分御注意の事とは存じ候へども申上候、拙者に於ては大悅び、二號活字にても御用被下候へば、いよ／＼悦ぶ事に有之面白く候、餘事拜眉、匆々頓首

二十日　　鐸　庭　生

宙外様

次の書翰は、明治三十六年末、私が會津の猪苗代湖畔に隱棲中に頂戴したもので、確か鐸庭先生、右田寅彦氏などと會津東山温泉に遊ばれることが、新聞に見えたので、私からお歸りには翁島驛から下車せられて、湖畔を周遊なされては如何、御承諾下さるならば、お迎へ致すといふお勸めの書面を差上げたのであつた。その御挨拶に送られたものを左に

宙外詞兄　　竹　印

拜啓、巻紙手近に無之、原稿紙へのなぐり書失禮、御海容祈候、先日不意に會津東山と洒落かけ、其の狩倉の歸るさに、御城廓を襲撃し、大に驚し申さんと計畫候ところ、岩越鐵道員に問ひ候へば、確に御不在との事に、勇勁たる勇氣其まゝにて歸京仕候、此の鬱勃たる氣、御地近所にあらば、亦磐梯山の破裂之因ともなる可

相成、幸ひに東京へ持歸りにて、御地は安全、目出度存候。御紙面の如く、鰻や鯉が入れ引きの鈴成とありては、是非再遊相企て可申候、可憐、小生一竿の爲に、周圍十六里の猪苗代湖、　小魚をもとゞめざるに至るべき歟、手際の程ゝ其節、御覽に入れ可申候。

先日も猪苗代湖舟遊勸められ候へ共、後日正々堂々の陣を張りて、貴下に相對すべく存じ、わざと差控え申候。夫はそれ、御上京の折は、向島の枯野見として、小生陣營へも御立寄待上候。未得拜面候へ共、御令室、御家族方へも、宜敷御鶴聲願上候。

十一月廿八日。

今宵雨晴れ、夜こめて春の如し、快意、君と談ずる如し、亂筆如斯、如し〳〵、今年もはや、春の隣と相成候、失禮如例、匆々頓首

箕郁先生に就いては、私などは到底詳しく書くべき資格がないのだから、まづ此の位に止めて置く。（昭、九、五）

一五、『新小說』と思軒、南翠、露伴等との關係

和田鷹城――前田香雪の『新小說』命名――石橋忍月――宗像金吾――私の春陽堂編輯部入り――

前章に書いた春陽堂初代、和田篤太郎氏についての話の補遺として、明治三十八年一月發行の『新小說』十週年紀念號に載つた、須藤南翠氏の「今昔談」の中に見える「春陽堂の三大時期」の一項を拜借して置きます。

「自分の知つてる處では、春陽堂の事業は、僅かに三大時期を經て來たと思ひます。卽ち芝の新櫻田町に居た時代が第一期で南傳馬町一丁目へ乘り込んだ時代を第二期とすると、今の（日本橋）通四丁目の角店を占めて後を、第三期に數へるのが順序だらうと思ふのです。自分が春陽堂の名を耳にしたのは、（明治）十五六年の頃、例の飜刻極盛時代でしたが、當時は親しく其出版物を手にしたでもなく、又格別春陽堂の名に注意を拂つた譯でもありませんでした。が、南傳馬町一丁目の角へ出た時に、狐の裁判とか、空中旅行とかの飜譯小說を出版したものですから、自分は自然に春陽堂の愛讀者の一人となつたのです。殊に自分の居た改進

新聞社とに、同じ天王横町に屬して居ますから、時には其の店頭へ立つて、新刊小說をいぢり廻した事もあり、有名な……其頃は有名な事は知りませんでしたが、帳場に居た鷹城君（篤太郎氏）の號にも目馴染になつて、あの本屋は何だか、警部さんが帳場を預つて居るやうだから、掏摸や掻攫は店頭に立つまい、と言つた事もありました。」

これが僅か明治十七八年頃で、當時の讀書界が春陽堂に拂ふ注意は自分のと大差はなかつたかと思ふ。「第一期の春陽堂は、かゝる狀態で發達し、いつの間にやら、通四丁目の土藏造りの角店を踏まへて、東都有數の書肆となつた。」と、かやうに南翠氏は述べて來て、やがて同氏を春陽堂との關係に及び、「自分が鷹城君に面會して、遂に肝膽相照らし、非常に親密になつたのは、『新粧之佳人』が手びきを致したので、明治十九年の事でした。が、下總佐原の正文堂の倅で、朝野文三郎といふ男が、南鞘町へ書肆を開店して、その手始めに拙著の『新粧之佳人』を出版したいといふので、それを承諾した。然るに、文三郎は商賣上の都合で、春陽堂に專賣を頼むことになり、同人の紹介で、確實な人物であることを知り、和田篤太郎君と握手することになつたと云ふのである。そして、

顏は……いや顏といふよりは、號が馴染ですから、やはり號と申しませう、その號は數年前から知つてるとはいへ、親しく會つて話を交へたのは、全くこれが初めてなんですが、何故だか千年の知己と語るやうな氣がして、更に隔意とか、遠慮とかいふものがありません（下略）」云々。

さて前章に、饗庭先生の書簡を引いて、同先生が「新小説」の名づけ親の一人であることを述べたのであるが、同誌十週年紀念號の「今昔談」で、須藤南翠氏は「『新小説』命名の由来」と題し、かう云つて居られる。その要旨は明治二十年の夏、新しい小説雑誌發刊の話が春陽堂主人との間に始まり、鍛冶町の菊岡に同志の顔を揃へるため一會を催し、春陽堂主人もこれに參加した。

席上で決したのは、第一號より執筆する作家と其の書き物の事、發行の主旨は朝比奈碌堂君が起草される事、會名は文學同好會と稱する事、雑誌の命名は前田香雪君に銓考を托し、各自佳名を選んで提出する事、表紙の意匠は條野採菊、今村新二の兩翁に考案を煩はす事、體裁は菊版、普通活字、各小説を幾分づつにするやら製本する事、編輯は篁村、思軒二君と自分とが專任する事、といふ位なもので、中にも雑誌の名は、最も大切ですから、非常に苦しんで席上種々の佳名が出ましたが、遂に一同をして、是ならと首肯せしむるものがなかつた。

處が、物の極まる時は妙なもので、香雪君から頂いた名前書の内でも、雅韵に富んだのは俗通に遠いし、俗通するのは平板でなければ爛熟を免れぬ。さう〳〵ジケム〳〵の評議に時日を費す事は免さないから、根岸へ出かけて、三人額を鳩めて相談致したのです。然るに、どうも一長一短で決しない。それかと云つて、それ以上の案もないので、三人ほとんど途方にくれてゐる。と、香雪君から來た名前書の末に、一旦書いて消してあるのがあつたのを、思軒君が發見すると同時に、是あ

る哉〱だ、と指ざして、誰が何といつても、是れに限るといふので、篁村君も自分もそれを見ると、それは『新小説』と書いて消してあつたのです。自分は『新』の字を冠つたものに、永續した雜誌がないから、と云ひかけると、そんなに『新』の字の縁起の惡いのを承知した君が、何故『新粧之佳人』といふ名を選んだ。題名は不用意な處に價値のあるものだ、と反駁した思軒君は、

『新小説』の雜誌だから『新小説』といふのは『小説萃錦』に對しても、一日新作たることを標榜してゐて最も適切である。口語としては一言にして盡し、文語としては一讀の下に内容を示してゐる。吾輩はこれ以上の佳名は得られないと思ふ。前田先生の書いて見て消されたのは、恐らく餘り普通だからといふのだらう、が、我輩は寧ろその普通の處を採るのだと主張します。篁邨老も可いよ〱『新小説』に極めるさ。なまじつか捻らないところが創業にいいのさ。『新小説』に限るよ。まさかに天長節とは間違へはしない。さあ極つた〱きめ祝ひに祝盃を擧げよう、といふ調子で、『新小説』の命名は遂に成つたのでした。

これが更に七年目で、復活して茲に十年を迎へるやうに盛大に赴いた純文學誌の命名式となつたのです。」と見えます。

第一次の『新小説』は、金港堂の『都の花』より二ヶ月半おくれて、明治二十二年一月發行したことは、前に云つた通りであるが、前章に兩三年にして廢刊と書いたのは記憶違ひで、南翠氏の記

錄に依れば、翌明治二十三年に至つて自然終熄を餘儀なくせられたのであつたといふ。當時、主として編輯事務の衝に當つた前田曉山君の記錄に依れば、思軒、篁邨、南翠、三昧等の諸大家の組織した文學同好會が『新小說』を編輯することに表面はなつてゐたが、內實は原稿の取集めも、出版事務も悉く春陽堂が引受けてやつたもので、初代の『新小說』は十何號かで倒れてしまつたのである、と書いてある。

私は明治三十三年二月より春陽堂編輯局に入つて『新小說』の事務を執つたことは、前に云つた通りである。が、これより先、三十一年十一月に發行された『新小說』の第三年第十卷の「人文欄」に石橋忍月氏の後を承けて、時文評論に筆を執つたのが、そも〱『新小說』及び春陽堂との緊密な關係の出來た端緖となつたものである。この「人文欄」は第五年に至つて「時文欄」と改稱した。當時、私の月俸に、――每月三日より十日まで編輯事務の忙しい間だけ出勤する約束で――七十圓であつた。勿論、小說の報酬は此の以外として、當分約四百字一枚一圓といふ內約であつた。今の物價標準に比べては、凡そ三圓以上に當るらしい。この月俸七十圓といふのは、恐らく『大阪每日』の月俸七十圓、外に慰勞金年額約三百圓といふ話が、支配人の耳に入つて、それが自然標準になつ

て居たものらしい。金の問題を書く序でに、『新著月刊』當時、東華堂から最初編輯料として丁酉文社が受けてゐたのは、總額一百圓であつた。この中、直接編輯一切の事務を負擔し、その爲め雜務の助手として、福島縣石川郡蓬田村出身の宗像金吾君を書生として置いた。――宗像君は後に滿洲に渡り實業家として成功し、私に東北古史研究資金を提供して呉れたのみならず、此等の研究論文を編集し補訂完成して、速に出版するやうにと激勵して居る程の篤志家でもある。――餘談に脱線したが、そこで編輯の手當として私は二十圓貰ひ、また抱月、不倒、青々園、天外の四君、及び拙者も會員の資格に對し、各四圓づゝ報酬を受け、殘り六十圓が原稿料として書いた人に拂つたものである。然るに、東華堂の財政逼迫になつた三十年春頃からは、總額で金六十圓で間に合はして呉れといふ事になつた。つまり急に四十圓の減額になつたのだから、內容の劣惡ならざるを得ぬのは自然の勢であつたのである。

『新小說』十週年紀念號に掲げた幸田露伴氏の「新小說に於ての予の感」により、私は始めて知つたことではあるが、私を『新小說』の編輯主任として、竊に春陽堂に推薦の勞を取られたのは、氏であつたと云ふことである。氏はいふ。

「（前略）その中に、予と相棒であつた伊藤（吉太郎）氏は米国へ行くことになつた。そこで是はおのづから人の代る時が来たのであると、其を機會にして自分も『新小説』の編輯者たるを辭し―、丁度、其頃在京して居られた舊友若橋忍月氏に後任を托した（三十年十二月）。忍月氏の時に雜誌は其の價を引上げ、其の販賣部數を増して来た。忍月氏の長崎へ官命で行かれるに及んで、春陽堂は復び予のところへ雜誌をもつて来た。

が、予は之を辭して、後藤宙外氏にでも依頼したら宜からうと云つた。春陽堂は乃ち後藤氏を主任者とした。主任者たる後藤氏は十分の力を盡した。雜誌は漸次に發達して今日に及んで、終に芽出度く其の第十年を迎ふるに至つた。」云々。私の壯年時代の所謂働き盛りの時期に於いて、十數年間、落着いて働き得る働き場所を私に提供して下された露伴氏に對しては、實に感謝せねばならぬ次第である。それと共に、當時の春陽堂主人、その他の人々に對しても、同様に忝けない事であつたと感じてゐるのである『新小説』は今から考へても、私に取つて、最も適當な舞臺であつたに拘はらず、力量も足らず、業蹟も不十分であつたが故に、何等これと云ふ成績をも擧げずにしまつたことは、今日に至つても、慚愧の感なきを得ぬ次第である。勿論、皆さんに滿足されるやうに、そして自分にも遺憾のない程心身を使ひ盡くして居たら、今頃までは生きて居らなかつたのかも知れない。結局は宿命の支配のまゝ、天分の微弱な影を映したのに過ぎなかつたと云ふことにもならうか。（昭、九、七）

一六、關西遊覽と京阪諸文士

――『京都』『日の出』兩社諸君の斡旋――在阪諸文士主催堺卯樓の盛宴――薄田泣菫、角田浩々等諸君との初對面――閑芳君と奈良に遊ぶ――泣菫君と會津旅行――

明治三十三年七月二日午後六時、私は東京新橋停車場を出發して、かねてから寄望の關西遊覽のため、旅行の首途に就いたのであつた。春陽堂編輯部の同人、柳川春葉君、わざ〳〵見送られて、上途を餞するの句を示さる。

雲に乘るところもはかろし夏ばをり

翌三日の午前九時、京都七條の停車場に着。書肆便利堂主人の斡旋で、宿を柳の馬場三條通り、南入る樋町、白木屋といふに定む。『京都』『日の出』兩新聞社の社員を中心とする左の文士、畫家、

諸君の厚意と、痒いところに手の届く頗る行きわたつた案内ぶりに依り、京都内外の名所、古蹟・遺物等、遺憾なく、見もし、味ひもしたのであつた。その東道主たるの労を取られた方々は、

堀江松華、中川霞城、小川煙村、大森痴雪、小林紫電、歌川国松、森川蕉亭、安藤仲太郎、菅原井貝、黒田天外等の諸君であつた。

小川煙村君は、當時新聞記者ではあつたけれども、本来、劇技科と稱する俳優専門の出身で名ある老舗の若主人で、その容貌が餘りに斎藤緑雨氏に酷似してゐるのに、先づ私は驚かされた。話をして見ると、口の悪いところも頗る似てゐるのに、再び驚かされた。が、しかし、縦横罵詈の才は相通ではあつたが、緑雨のは繊巧にして婉曲であり、煙村のは勁悍にして真率なところが違ふのであつた。その花柳通な點では、兄たり難く、弟たり難しといふ位のものらしかつた。煙村君は、後に東京に出て『やまと新聞』その他に筆を執り、近年は専ら国史古美術方面に轉向せられ、『国史大図鑑』の編纂などをやられたことを、仄聞したのである。大森痴雪君は今日も関西劇壇に重きをなし、現在も尚、活動を續けて居られるらしい。その他の諸君の消息に至つては、久しく遠い田舎に隠れてゐる私としては、其の後、どうなられたか、詳かな事は知るべきやうもないのである。

凡そ一ケ月の關西旅行のうち、七月三日から九日までは京都で遊び、一旦、この日、大阪に赴き『大阪毎日新聞』社の六千號の祝宴に臨み、西江戸堀三丁目の同郷の舊友邑山繁治君（號隈外）の邸を根據として、大阪市の內外を遊覽したのであつた。『大毎社』の祝賀會の餘興として、淀川の中流の船上に土俵をしつらへての大相撲の催しは特に珍とすべきであつた。やがて十日には、有名な灘萬樓に、かねて親しい間の菊地幽芳、水谷不倒、左東柳水、歌川國峯の諸君に招かれて款談に更のふくるのを覺えなかつたのである。

十二日には、在阪の文士、畫家、新聞記者諸君が、特に私の爲めに、堺卯樓に催された招宴に臨んだのであつた。來會者は、

須藤南翠、菊地幽芳、渡邊霞亭、磯野秋渚、木崎好尚、水谷不倒、河野嘯月、岡田翠雨、角田浩々歌客、三木天遊、平尾不孤、薄田泣菫、齋藤弔花、左東柳水、香川滄洲、梁田晴嵐、金尾思西。

の諸氏であつた。

南翠氏は、明治二十年代の中央文壇に於いて、明治文學勃興期に、打ちよする潮流の波頭に乘つて、當時『新粧の佳人』や『緑簑談』を世に問ひ、盛名を馳せた老將である。また霞亭氏は長い間

關西に於ける大衆小說家中の翹楚であつた。又木崎好尙氏は賴山陽硏究家として、其の後、令名を博された人である。その他、いづれも一方の雄を以て推すべき人々であつたのである。單に一夕の歡會に過ぎなかつたけれども、これが緣となつて、角田浩々歌客氏、その他とは長い交友の端を開いたのであつた。薄田泣菫君とは『新著月刊』以來、書信に依る交友關係はあつたけれども、面晤したのは、確か此の會合が最初であつた。

同月十六日、再び京都に入り、前と同じ柳馬場の白木屋に宿を定めた。十七日には、小川煙村氏の案內により四條通り髷附屋某の二階より、祇園會の行列を見た。十八日には、森川蕉亭、小川煙村、二君に誘はれて、一乘寺、修學院などの村落を經て、八瀨を過ぎり、大原に遊び、溫泉宿大原館に一泊したのである。翌日は寂光院に詣うで、建禮門院と阿波內侍との肖像を拜し、壽永、元曆の古へのあはれをしのび、感慨きはまりなかつた。山軋の境內、幽寂にして苔淸水の雫、かすかに耳にかよひ、綠蔭ふかきところ、蘚砌まだらに、目に觸るゝところ悉く物ふりて、懷古の情をひく に餘りある心地がするのであつた。

諸友の手引で、各所の名勝、舊蹟を探つたことは略する。廿二日に、京都の地を去つて、再び大

阪に赴く。宿は、前例の通り西江戸堀の畠山眠外君邸であつた。

二十三日、朝より曾根崎に角田勤一郎氏（號浩々歌客）邸を訪ひ、相携へて北野の鶴の茶屋に淺酌閒談。夜に入りて共に船をやとひて、蜆川に浮び、やがて淀川に出で、更ふくるまで、大阪名物の船遊びを見たのである。印象、頗る深いものがあつた。當時の思出の料として、翌年、私の書いた「關西贅見記」の一節を抄錄する。

大阪滯在中、もつとも面白く感じたのは、例の名高い船遊びであつた。七月二十三日の夕方から、浩々歌客氏と共に輕舸を蜆川に浮べた。流れゆるやかに、艪聲かろく、兩岸に聳ゆる二層樓、三層樓の立ちならぶ間をゆく。何となく、巢林子が戯曲中の風物を眼前に見るやうな心地がする。家屋の體裁からして、東京のとはひどく異つて、細々した構造で、陰氣に、小奇麗に、おつに澁つてゐる。そして二階の緣先の張出しに、色々の盆栽をならべ、軒には、錦魚のガラス球や、葱などをかけつらねてある。河風にゆれる青簾から裸美人の影が透いて見えるかと思ふと、嬌艷な舞子が欄干にもたれて、船でゆく客を金扇で招ぐのも艶である。老妓が雁木にたゞずんで、向ふ河岸の男と身ぶりで話をかはし、笑ひ崩れるのも劇味がある。何とはなしにそこらに小春や治兵衞が、うろついて居そうに思はれてならない光景だ。

船は靜かに流れて、曾根崎橋、蜆橋をくゞり、難波小橋に近くなると、八方の堀や河から出て來る船が、急に一緒に落ち合ふので、藝者舞子に花を飾つた十艘の畫舫が、舳艫相接してもつれながら漕ぎ進む。三四艘ほどへだてゝ、かなたと此方と、呼びかはしたり、小手招ぎするのもある。此の橋をぬけ出るともう賑々し

た淀川になる。

船を溯ぼらせて、天神橋下へと、漕ぎつける頃は、築地あたりの畫樓に灯ともりて、紅燈萬點、晴天の星とかゞやく。追々にあつまる納涼船は蟻のやうにたかつて來た。中流の程よい所に棹を立てゝ、涼を納れながら見物したのである。

譬へて見れば、まづ東京の緣日の賑ひを、水の上に移した光景であつた。船には、いづれも、麻張や、磨硝子や、色硝子などの行燈がともされて、その影、波に照り映え、からみあふ。そして、物賣や、藝人の船が絕えずまはつて來る。八百勇、あるひは、八百又などの文字を、角漏斗形の麻張の行燈に、筆ぶとに書いたのを掲げ、呼聲かしましく漕ぎ寄せる。何を賣るのかと覗いて見る。

紅生姜、劍先鯣、芋、卷昆布、夏蜜柑、杏、うで鷄卵、卷莨、ビール、日本酒など、船に設けの店にならべたさまも綺模樣である。納涼船の人々は、思ひ〳〵に買うて、興を助けるのであつた。

末廣屋などゝしるした行燈を掛けて、花火屋も漕いで來る。贅澤な客は、呼びよせて揚げさせる。家根船に名入の提灯を懸けつらねた義太夫語りや、新内語りも、流してくる。船の中の見臺に向ひ、紋付の羽織か何かの太夫が、藝者に取りまかれる大盡の船に近く、頻りに語つてゐたのもあつた。この外に、アイスクリーム屋も漕げば、落語家も通る。雜多な船と人とが、もみあふので、水の上であつて水が見られぬといふ始末。河中に跳びこんで追駈ける子供や、泳ぎまはる青年も多い。此の邊は水が淺いので、少しも危險がない。それで、この天神橋附近が繁昌するとは、もつともな事だ。水上に大仕掛なビーヤホールや、西洋料理店も出來てゐる。客の送り迎へには無賃で艀がかよつてゐる。大阪は夏の夜は、特に、暑さに苦しむので、かやうに、納涼に就いては、色々工夫を凝すのであると見える。大阪の人は、夏の夜は、家に居る者より、船か、橋かに出て、涼を追ふ者の方が多い、といふのも眞實であらう。

歸途は、角田浩々君に船で送られ、西江戸堀の海上保險會社の畠山邸の棧橋に着けて貰つた。棧橋の上から、當夜、迎へて吳れた眼外君も、送つて吳れた浩々歌客君も、もう此の世の人では無いのである。

角田君は、明治二十年代の半ば頃から、中央に在つて、『國民之友』の文藝批評家として、不二行者の筆名で盛んに、創作その他に就いて評論を發表して、令名を博した人であつた。その後『大阪毎日』社に入つて東京を去り、關西文壇に飛躍して居つたのである。氏は、晩年、再び東京に立ち歸り『東京日々新聞』に據つて活動したのであつた。

この月、廿四日には、櫻の宮に菊池幽芳君を訪ひ、同邸に一泊。翌廿五日には同君の先導で、四條畷の小楠公社に詣うで、それから奈良の古都に遊び、若草山、春日神社、東大寺、二月堂、三月堂等を歷覽した。非常に奈良は暑いところで、私は、まだ春日神社にも參詣せぬ前、春日野公園のあたりの氷屋に休んだ。その頃は一向古趣味を解しなかつたので「こんな暑くては、名所見物どころではありませんね。折角御親切な御案內では御座いますが、もう何も見る勇氣もありませんから、是れからすぐ歸ることに致したいものですが……」と駄々ツ子のやうな我儘な請求を持ち出した。

「いや、この土地は一體、暑いところで、確かに尋常ぢやありませんが……」と菊池君は微笑して、「しかし、折角こゝまでお出なすつて、春日神社その他、主な所も見ずにお歸んなさるのは、ちいと、何ですね。少し御我慢なすつて、もう少し御覽なすつた方が宜いでせう。」とやわらかに、親切に、諭して呉れたものである。そこで私も已むを得ず、意を飜して、菊池君に導かれるまゝ、奈良の主なる名所、舊蹟の尤なるものは、大體、概觀することを得たのであつた。東大寺の寶庫に入れて貰ひ、聖武天皇の宸筆や、光明皇后の御寫經などを、親しく拜觀するの榮を得たのも、全く菊芳君の勸告と斡旋とのよろしきを得たお蔭であつた。

菊池君は、當時既に『大阪毎日』社の文藝部長の位地を占めて居り、『己が罪』『若き妻』その他の著述に依り、關西新聞小說界を風靡するの勢であつた。その後、『乳姉妹』等の作を世に問ひ、更に之れを東都文壇に送られたのであつた。

同月二十七日、大阪を發し、藝州宮島遊覽の途に就いた。途中で舞子の海松樓に一泊して、翌日嚴島を訪ひ、紅葉谷の岩惣に投宿した。二十九日、島内を巡覽して夜行の汽車により大阪に歸る。卅一日、午後一時、大阪網島驛を發して八月一日、午前八時、東京新橋驛に着く、これで、約一ケ

月間の關西旅行を終つたのである。

滯阪中に、幽芳、浩々歌客、泣菫の諸君とは、屢〻往來したのである。が、以後、此の三君とは長く交遊關係が續いたのであつた。特に泣菫君との間は、今も音問が絶えずに居るのである。交結の發端を思ひめぐらして見ると、實に久しいものである。明治三十年五月發行の『新著月刊』第二號に、君が新體詩「花密藏難見」と題した長篇を寄稿されたことから始まつたのである。何しろ、君の筆迹は、其の頃から、頗る流麗暢達なもので、多數の集つた投稿の中で、際立つて美しいものであつた。當時の事をありのまゝに白狀すると、內々選者の任に當つた私は、全く新體詩などの撰擇の出來る素養も識見もなかつたのである。が、君の原稿は群を拔いて、特に、文字が美しかつたので、何とはなしに、引きつけられたので、先づ第一に手に取つて讀み耽つた。讀んでゆく中に、つい佳境に引きこまれる、と云ふ次第であつた。抱月君にも相談の上で、力量がすぐれて居るから――第二に掲げる大町桂月君にはお氣の毒だが――「一つ『新體詩欄』の劈頭第一に出さうぢやないか」と云ふことになつたのである。その時以來、凡そ四十年間、君との交情は、互の環境の變遷につれて、あるひは、時に、濃淡の差はあつたかも知れぬが、現在に到るまで續いて居るのである。

思へば、隨分、久しいものである。最近數年の間に、君が苦心の著『茶話抄』以下、『大地讃頌』や『草木蟲魚』等、出版の都度、私に贈られた。現に、私は此等を座右に備へて、旦暮、愛讀してゐるのである。が、初め君は『暮笛集』『ゆく春』等の新詩から出發して、『二十五絃』や『白羊宮』などに到つて、形式上、頂顚に達した觀があつた。やがて、遷轉して隨筆家となつたのである。この域に入つてからの作が『大地讃頌』と『草木蟲魚』等が代表する。形は隨筆ではあるけれども、實は泣菫君の詩であり、また達人觀でもあると云ふべきで、清雋超逸のおもむきが窺はれる。著者は昭和の初から、病の爲め手が不自由で、自ら執筆することが出來ず、令孃その他、家人に口授して著述されたといふ、驚歎に値する。

明治三十四年五月九日、攝津大阪船場の消印ある、半裸像美人の繪端書に、左の如く書いたのが泣菫君から來てゐるのを、つい此の頃、篋底から探し出した。

此頃の鬱陶しさに身は晴雨計のやうに候。髮の毛を引きむしりて、初めて生命あるを知り申候、其折の心持、嬉しくて苦しく候。磐梯山の大作（詩と畫と）とほからずものすべく候。御起居如何。田園に御引こしの日はいつ。御羨ましきばかり。

これは私の牛込藥王寺前町の寓居宛のものであつた。此の端書に「磐梯山の大作」云々とあるか

ら、この年の四月頃まだ山陰には殘雪を見る時節に、私は上京の泣菫君を誘ひ一緒に會津地方に旅行したのであつたと思ふ。丁度その頃、柳川春葉氏から私に贈られた、木彫の紙雛に擬した妹と脊雛の箱に拙宅に居あはされた、泣菫君に、歌を題して頂いたのが、今も遺つてあるから、確かに、三月の節句後間もなく、會津に同行したやうに考へられる。

後に、當時の日記を發見したので、附け加へて置く。明治三十四年四月十三日朝、東京上野驛を、薄田泣菫君と一緒に、會津漫遊のため出發。この夜、郡山驛前川嶋屋に一泊。十四日岩越線翁島驛より下車、猪苗代湖畔戸の口まで湖岸を泣菫君と共に徒歩。字鑄子口の一ツ松の丘陵下に到り、拙者蝸廬新築の敷地を一見し、強清水の村を經て、瀧澤峠を越えて若松市に入り、知人某方に一泊。翌十五日、鶴ケ城阯を見て東山温泉に一泊。十六日朝、泣菫氏は若松驛より汽車にて出發歸京。この日、予は要件を濟ませ、十七日朝出發、歸京。

同君と岩代の郡山町――今は市――に一泊して、猪苗代湖畔に遊び、私の蝸廬を建築する豫定地を一見し、徒歩で一緒に瀧澤峠を越え、そして若松の城下に入り、あの附近の名所、舊蹟などを探ぐつて歸京したのであつた。君の所謂「磐梯山の大作」が、その後、發表されたか、どうかは、私は終に知らずにしまつた。

明治三十三年、二月十六日の君が尺牘にいふ。

拜啓。過日は春陽堂編輯局より御手紙玉はり、色々と御盡力下さり御厚情感泣のほか無之候、わが詩のすべてが、御もとゝ樣に負ふところの甚だ多かるは、忘る可らざることに有之候。もし將來に於て、この道の上に少しなりとも、成功いたすことと御座候はむには、その大分は吾兄のなさけふかき力によりぬと信ずべく候。承れば、此度は新小說の主任として編輯に從事し玉ふのよし、誠に吾身の上に於ける如く、うれしき感有之候。いはずもがの事には候へども、眞摯なる御熱心をもて、この道のみちしるべとなり玉はむを祈りまゐらせ候。小生は新著月刊の當時より、少からぬ獎掖を受けたもの、斯くと聞きては默しがたく、よく／＼閑み候て、及ばずながら、御力をたすけまゐらすべく候。野調の如きも、餘白を汚すに足り候はば、文庫の底を叩いて御もとに致すべく候。先日は御もとめのせがるゝまゝに、推敲の足らぬ拙の歌、半分ばかり御目にかけ、あとより思へば、耻かしき所少からず候。餘は推敲成り候節、また／＼御叱正を仰ぎ申す可く候。ふた葉、金尾氏より達てと依賴せられて、致し方なく、新體詩稿を編輯致し居候。一號のは御覽の如きまづきもの、次號よりは「南畝の人」と名づけしもの、掲け申すべく、これは只農民の生活を歌ひたるものにして、カナリの長篇、數千行にはわたり候べくやと存じ候。毎號、御一讀の上、御叱正願上候。御存じの進士新聞も寮の非運の爲、廢刊と相成り候。寮の抱負、新聞の功績など珍らしきものに候ひしを、惜みてもあまりあることゝ存じ候。平尾不孤は、この後、如何になし候や。未だ詳しきところ相聞き申さず、近日のうち歸省いたす都合（往昔は小生と同じ村に居られ候へば）に候が、或は東上いたさむかと察せられ候。もし左樣に相成候節は、吾郷友の爲、よきやう御導きくだされ度、あつかましき御依賴に候へど、可愛相に候まゝ、犯尊嚴候。小生は不孤と事情を異に致し候へども、本年中には或は東上致すやも不計、其をりは御かどを叩いて、面のあたり御示教を仰ぎ申すべきかと、只今よりうち待たれ候。遊子と申し候ても、旅客というても差支なからむとは存ずれど實は死地を異境にもとむる覺悟に候。人の世の序幕に足をふみ迷ひたる小生の如き

ほど（半行ほど缺文）御許し被下度候。はしたなき言葉御耳にあげて、詩作に勞せらるゝ御心を煩はさむは、小生の忍びざる所に有之候。春べにむかひたれど、なほさむく、今朝は雪ふりつゞけ候。されど、さゝ啼ともいへぬやうなる鶯のころ、この調子ならば、野邊に杖曳きたくならむも、遠かるまじと察せられ候。相變らず、御もと樣の御多祥ならむを祈上候。

二月十六日　　　　　　　　　　　　　泣　菫

雷外詞兄　梧下

右の書簡に依ると、泣菫君の作詩の上に於いて、私から、特に何か、援庇するところでもあつたかの樣にも見えるが、實は、單に、君の作を發表する際、多少の便宜を取計つたといふ程度に過ぎなかつたのである。末文に「死地を異境にもとむる覺悟」云々と見えるが、當時、何か尋常ならぬ憂悶すべき問題に直面して居られたのであつたらしいが、君の聰敏と沈着なる勇氣とが、よく之れを裁決して、無難に透過せられたものであつたかに察せられる。

明治三十五年、九月二十八日大暴雨のため、私の豬苗代湖畔の小屋は、新築後一年にして、忽ち悉く崩壞されてしまひ、村内某氏の長屋に假住ひの身となつたのであつた。その時、大阪に在つた泣菫君からの慰問の書簡が保存されてある。今見ても、教へられる所の多い、含蓄ある溫い言葉である。

拜復。こゝ一兩日、文淵堂へ泊りをり、只今歸宿　候。御葉書を拜見致し候ところ、暴風にて、貴家潰崩の慘有之候由、驚駭一方ならず候。御家内樣には御過ちも無之かりし由、せめてもの事と存申候。御新築前後の貴君が御經營を想へば、御同情の念に堪へず候。御家屋より推すれば、折角御植付の櫻樹もまた吹折られ、吹倒されしもの多からむ、と存じ候が、如何にや。矛盾と顚倒とのおほき現世にては、價値と單位とは、御互の心のうへに在らざる可らず、と存じ候。よし、左らば、風荒れ、家壞れ、地動き、萬物悉く空に歸するの日ありとも、吾等の心は聖火の如く、永久に耀き候事なるべし。小生は、大兄が小生と同じく、斯く信じ給ふを知り候へば、大兄の胸裏と御家庭の平和とは、毫もこれによりて、毀損せらるゝ事なからむ、と思ひ候。唯大方の文士の、遊女の如くに日を送り、迎へする間に、大兄が男らしく、克己の精神を持して勸倹の結果、築かれたる家屋にして、斯の如くとせば、苦味もまた苦味に過ぎやと疑はれ候。其後、跡片付などのため、定めし御多忙の御からだを煩はさんも如何なれば、今日はこれにて筆とめ候。この上とも、健康と勇氣を大兄の上に加はらむを祈る事に候　匆々。

十月五日夜

淳　介

後　藤　大　兄　梧　下

この頃、泣菫君は、まだ二十幾歳といふところであつたかと思ふが、思想の既に老成の域に達してゐた趣がよく見える。

それから、七八年經て、明治四十二年、君が京都下長者町、室町通西入に住居の頃は、もう令室

を迎へられて、お子さんも儲けられてゐたのである。此の時代の書簡を左に、

拜啓。其後は缺禮致し候、餘寒なほ嚴しく候處、如何御起居被遊候や、先日は鎌倉の御家より御轉宅に相成り、御目度出度祝上申候。岩代より鎌倉へ、かま倉より京（東京）へ、と轉居せられ候につけて、また氣分もおもしろく、移りかはりも有らせらるべし、と、小生のいつまでも、この洞窟めき、陰氣なる都に蟄居いたし候愚を、自ら哀れみ候事に候。

先日、家郷よりの通信によれば、あちらは梅花最早盛りを過ぎ候由に候が、當地はどこもまだ蕾のみにて、花を見るのは、いつ頃か、一寸見當にもこまる樣の次第、昨夜も雪ふりて、北山あたりは眞白に候。いつもの事ながら、都の寒さは頓と閉口に存じ候。

小生宅の子供は、最早歩くやうに相成り、泳ぐやうな手つきして、室内をあちこちと歩き廻り候。かやうなるもの出來候につけて、自分の道の進歩の遲々たる、今更のやうに思ひうかばれて、眞實、情なく相成り候

（下略）

二月廿三日　　薄田淳介

後藤宙外大兄

右の書簡は、私が會津の湖畔から鎌倉に移り、やがてまた鎌倉雪の下の寓居を引拂つて、再び東京に立ち歸り、芝區二本榎町一丁目五十九番地に住んだ頃、頂戴したものである。

（昭、九、七）

一七、泣菫、蘆花、大塚甲山等が事

――蘆花と薩摩薯――牧野多涙に寄せた揮毫――突然意外の來簡――蘆花の所謂我邦の新バアンス大塚甲山――「ふるさと日記」――

薄田泣菫君は、今では、關西詩壇の元勳といふことになつて居る。若い頃より謹厚な人ではあつたけれども、一面、へうきんな所もあつて、即席の寫生漫畫を書いたりして、笑はせもしたのである。話をするにも、飽くまで、溫雅な態度で、落着いて語るのであつたが、折々、滑稽味たつぷりな警句を吐いて、鼻の上に皺をよせて、靜かな、穩かな微笑をもらし、そして、人には腹を抱へさせる事もあつたのである。私と一緒に、會津地方に旅行された際、途中福島縣の郡山驛前の川島屋に、一夜、泊つた際のことである。私は疲勞をなす爲めに、按摩を呼んで、肩を揉ませたのであつた。その樣子が、如何にも、をかしかつたものと見え、泣菫君は、直ちに、傍らの硯箱を引き寄せ、

あり合せの卷紙に、漫畫風のスケッチをやつたのが、私の手許に今も遺つてゐる。襟卷を頭からスッポリ被つた八字髭の男が私で、紋服を着た盲人に、頭を揉ませてゐる圖が面白く書かれてゐる。そして、御當人は横に臥て、頰杖をついてゐる。その後姿も簡單な筆でよく出來てゐる。按摩さんの口に近く「三味線は親を泣かせる聲がするだ」と言葉がきが添へてある。この旅舍の奥座敷から絃歌の聲でも聞えたものであつたかと思ふ。

德富蘆花氏と泣菫君及び其の友人との間に起つた面白い話がある。その概要を手短にいふ。蘆花氏が泣菫君と懇意なK書店の主人に面會を求められて、私の代りに風呂に水を汲むなら、面會してやらうと云ひ、水を汲ませてから、改めて引見して、K店主が汗みづくになつた、その顏を見て、「Kさん。勞働は神聖ですな」、と云つて笑はれたといふ話。それから、同K書店主が、蘆花氏の聖地巡禮に渡航の際その紀行文の出版を承諾してもらひたさに、神戸から門司まで、同船して見送り、よい頃合を見はからつて、「實は、今度の御紀行の出版は、是非私どもの方に……。」と切り出したが、蘆花氏は「待つて下さい、その話は。」と遮ぎり、船室の方へ出ていつてしまひ、やがて一時間程してから歸つて來て、泣菫君への手紙を賴み、「それからあなたには……。」と蘆花氏が口を切つたの

で、K氏は占めたと胸を躍らすと「あなたには、いいものを上げます。私の原稿よりかもずつといい……。」「原稿よりかもいいものといふと……。」K氏は顔一ぱいに微笑をたたへた。「神をお信じなさい。只それだけです。」といふのであつた。明治三十五六年頃、難波に東京大阪の合併相撲のあつた際、蘆花氏が泣菫君を訪ねて來た。兩人ともに相撲ずきなので、話は自然その方に向ひ、蘆花氏は大阪の若島が荒岩を投げたのを賞讃のあまり、常陸山なぞも、やれないにも限らぬ、と主張した。泣菫君は、それには反對で、若島は常陸山に勝たうとは思はぬ、との意見であつた。「いや、勝つかも知れない。」「一分でゆくと、まづ七三かな。」「いや、そんなことはない。五分五分だ。」「まさか二人どちらも讓らずに別れてしまつた。その翌月、合併相撲が京都にゆき、若島は常陸山に負けたのである。泣菫君は早速、それを認めて蘆花氏に手紙を送つた。が、何の返事も無かつたといふ。

或時、泣菫君はK氏と一緒に、蘆花氏の粕谷の家を訪ねての歸りに、同氏の好意で、犬ころ程の大きな薩摩薯を幾つか贈られ、辭退しても承知せぬので、ウン／＼上高井戸の停留所まで、その重い風呂敷包みをさげ、手を棒のやうにして、頗る弱らされたこともあつたさうである。（この一節『草木

蠹魚』より摘錄）

當時の文壇の裏面に、いろ〳〵觸れるところがあるので、左に明治三十五年一月六日付の涼葉君の手紙を引く。

御書拜見仕り候。七日の御上京は例よりは少し遲かりしやう存じ候が、如何候や。有趣味に、且つ有益たる事御思ひつきなされ候由、早く拜聽致し度きものに候。或は嵐山先生の遊ばされしやうの方面にては無きやなど、愚察仕り候が、當たり候か、否か。小生も唯今こそこんな塵くさき土地に蟄伏致しをるもの、數年の後には、飛びはなれたる計畫なきにもあらず、されど、唯今の處は空間の方よりも、時間の方よりも、遠距離に過ぎ候。玉稿有がたく存じ候。些少御耻かし乍ら、五十八圓同封にて御許に致させ候間、御納下されたく候。

本月上旬、尾崎紅葉氏當地にまゐられ候が、强て隱密にせられし由に聞き候ゆゑ、訪ねにもまゐらず候。先日、島村君（抱月）まゐられ、水谷君（不倒）と一緒に、文樂座に越路太夫を聽きにまゐり候。同君は、其後、京都を經て奈良の法隆寺に赴かれ候由に聞き候。

こゝまで書き候所へ○○社の山下君より電話あり、聞けば○○との論爭に、さる○○が仲裁を申し入れしを、その條件の納得せられぬより謝絕致し候處、其○○の者ども、約數百名、今夜○○社を襲ふとの事にて、同社内大警戒なりとの事に候。世の中は、仲々、物騷なる滑稽を以て滿さるゝやう相成り候。まだ申陳べたき事、澤山有之候へども、餘は近日貴意を得申すべく候。草々。

一月十三日　　淳介

これは泣菫君が、當時純文學雜誌『小天地』の編輯主任として、その發行所・大阪東區南本町四丁目三十六文淵堂内として送られたものであつた。この年の一月上旬に、紅葉山人が祕密に大阪に行かれたのは、どういふ要件があつてのことか、今これを强ひて忖度すべきではあるまい。抱月君のは、尋常の美學關係の研究資料蒐聚のための旅行であつたのではなかつたか。『小天地』は當時關西に於ける唯一の純文學雜誌ではあつたが、泣菫君の努力にも拘はらず、地の利を得ぬといふためか、餘り長くは續かなかつたのは遺憾なことであつた。送金云々は、同誌に私が短篇寄送の報酬であつたことは云ふまでもない。

德富蘆花氏の事は私と稻門の同窓、阪田典次君——號は多淚、後に牧野と改姓——が熊本人であり、且つは中學時代熊本市に在つて、蘆花夫人の愛子さんとは知合の間柄であつたとか云ふ事で、その關係から蘆花氏の日常生活の常人と變つてゐる事など、をり〳〵聞かされたものである。特に明治三十九年頃、牧野君が千駄ケ谷原宿に居られた際は、蘆花氏の家も同じ原宿で、目と鼻との間だつたので、自然その噂も多く聞かされたのであつた。同君は散歩などの場合には、をり〳〵途中、

互に姿を見ることもあつたと云ふ。

昭和九年十月三十日付にて、熊本市大江町の牧野典次君からの書翰の末に、

大正三年の頃かと覺え申候、小生が蘇峰、蘆花兄弟の書がほしいと想ひ、德富家の遠縁に當る人に懇意たるを幸、其人を介して兄弟にそれ〴〵申入候處、蘇峰氏の方よりは、お安い御用、何時にてもとの返事來り、蘆花氏の方よりは「否と云へば氣取るやうで、諾と云へば……されど絹地に手習する積りで一つやッつけるかな」と返事まゐり候段、早速夫れ〴〵絹地を送りつけ候處、蘇峰氏よりは約の通り、直ちに返送し來り候へども、蘆花氏の方は待てども〴〵消息無之候故、終に斷念致居候處、四年越の大正七年一月末に、突然送り來り候同氏著の「新春」中に、

年は暮れ年は明けて大正七年になりました、歐洲大戰も私の籠城も第五年に入つたのであります、正月元旦小さな家族を集めての年頭の祈禱に、私は心から世界の平和を祈りました、元旦の試筆に以賽亞の神の國の豫言を書いてふるい書債を償ひました。

とあるのが卽ち小生へ送り來りし揮毫に御座候（下略）

何となく蘆花氏の性格が躍動してゐる逸話だと思はれるから、抄出して置くのである。

私は學生時代から、既に蘆花氏の『ゴブデン傳』や『ブライト傳』などを愛讀し、次いで幾百版を重ねたと云はれる『不如歸』は勿論『生たちの記』『思出の記』等をも愛讀したのである。議論は別として、兎も角、『不如歸』は本で見ても、演劇で見ても、泣かされたものであつた。私が鎌倉に

住居した頃、泉鏡花君は逗子に居られ、折々同君の寓處を訪ねたものだ。その際、同君御夫婦の案内で海岸を散歩し、例の『不如歸』に緣故ある浪切不動堂―俗に浪子不動と呼ぶ―の險しい岩山に登つて、熱心な『不如歸』信徒がこの堂の扉と云はず、天井と云はず、羽目にも柱にも隙間なく、浪子、武雄の純愛に對する讃仰の辭や、同情の美文――稀には罵倒の文句もあるにはあるが――を書いたので充滿されてゐるに驚かされたものであつた。つい昨年あたり、彼の不動堂の高い斷崖下の海中に、浪子の碑が建立されたと云ふことである。『不如歸』の人氣は、かうなると、容易に衰へるものでは無からうと思はれる。

私は蘆花氏とは、俗緣淺くして、遂に一度もお目にかゝる機會は無かつた。けれども、これは何かの緣で、兩三回あちらから書面を送られたのであつた。その最初のものは今も忘れられぬものである。

明治三十八年十一月七日付で、蘆花氏が府下千駄谷村原宿一七八に居られた時のものである。

拜啓　未だ拜顏を得ず候得共、大兄の御名は、小生にとりては決して他人とは思はれ不申「ありのすさび」以下の御作は、小生の尊敬と感謝とを以て讀みし所に候。面白し、感興多し、と申す迄にては足り不申、御作を讀む每に、溫められ、慰められ、吾性の善なる所を牽き出さるゝ心地して、嬉しさ禁じ難く候。此上作

ら、御自愛、斯文の爲めに、御盡瘁の程祈上候。

偖突然、此書差上候は、別儀にあらず、唯今「光」と云ふ雜誌を發して不圖別紙の一項に會し候。大塚君（號甲山）とは一面識も無之、文通致し候事も無之、從而新小說と同君の關係如何も存じ申さず候得共、同君の散文韻文は新小說にて度々見受け、韻文の事はよく小生には分り不申得共、發達せられなば、或は我國の新ベアンスとならるゝ人にあらずやなど、愚考致したる事も有之、別紙の事實は多少關心なきを得ざる次第に御座候。大兄何とかなし下され候儀は成り申間敷や、事情も知らずいらぬ差出口の樣に候得共、大兄の宏量に訴へ申度、唐突の段は切に御海容祈上候。

先は要件のみ、いづれ御目にかゝり、色々御話承はるの機ある可しと存申候。不悉。

十二月六日夜　　徳富健次郎

後藤寅之助様

この書面に「別紙の事實」といふことは、今その別紙を失つたので、何事とも判明しない。しかし、『光』に何を書いてあつたか記憶せぬが、多分、大塚甲山君の生活難を訴へる、慷慨悲憤の文章でも載せてあつたものかと思ふ。ありていに云へば、實は、三十八年の始め頃から、殆ど其の年末にわたり、約一ケ年間、私は甲山君の新體詩や雜錄を引き續き掲載したのであつた。けれども、雜誌經營者たる立場から、同君の原稿のみ間斷なく引受けるといふ事は許されぬ内情があつた。そこで、自然お斷りした事もあつたかと思ふ。それのみならず、同君の思想は卅八年末頃には目に立つ

て、左傾的色彩が濃厚になられた。あの頃は、社會主義の社の字の臭ひがしても、當局に睨まれる時代であつたので、編輯の責任者たる私は、それを警戒せねばならなかつたので、お斷りした原稿もあつたやうに記憶する。その結果が蘆花氏の同情を動かした文章となつて現はれたものであつたかとも考へられる。

德富蘆花氏が「我が國の新バアンスとならるゝ人にあらずや」と云はれた大塚甲山君は、通稱を壽助といひ、青森縣上北郡の、小川原湖に近い浦野館村上野の人であつた。父は村學究でもあり、貧乏た農民でもあつたらしい。甲山君は、二十歳頃までは、生活の爲め、行商や、運送業、郵便局の雇人などを勤め、その後、功名の念に驅られ、諸國を放浪すること約三年、西漂東泊の旅につかれて、再び故郷にかへり「谷に柴を樵り、山に桑を摘み、あしたに鍬をふるひ、夕に讀むこと三年」であつたといふ。しかし、青春の熱血躍りて、彼を其のまま田園に老いゆくを許さず、明治卅四年頃、東京に出で、卅八年春まで都門の生活苦と戰つた。終に腦病を得て、その後、再び郷里沼崎村に歸つたものであつた。

私は三十七年の秋から、三十八年の春までの間に、春陽堂の應接室で、たしか數回、甲山君にお

月にかゝつた。そして、殆ど毎月のやうに『新小說』に彼の隨筆、または新體詩を續載したのであつた。前途有望な才人だ、と自分は窃かに期待するところがあつたから、都合の出來るだけは無理にも繰合はして載せたものであつた。

三十八年九月十一日付の甲山君の書翰は、當時の同君の生活と思想とを、遺憾なく、あらはして居るやうに思ふから、左に、

雲翰拜誦仕候、御忠告被下候趣、一々肝銘仕候、先生のごとき同情に富める指導者を得候は、小生の天稟甚だ饒かなるもの有之候ためと、益々自重の念を生じ申候。

御言葉のごとく、名を成すの端緒は、先輩諸家の懇切なる啓導により漸く其途を開き申候、小生の友人などに比するも、文壇の上に於ける小生は甚だ幸福に有之、淺薄なる實力に顧みて寧ろ恥ることも有之候、「新小說」の歴史に尋ね候も、一年以上にわたり、毎號同一人の作詩を掲載せしこと無之、これあるは、ひとり小生に始まり候、これ全く先生の殊遇によるものと感激いたし候。小生は決して虛名に飢渇するものに無之候、若し家族生活の累なくば、十年の雌伏甚だ容易く、又文筆により我が貧を補はんとするの望なくば、毎篇匿名をもて世に公にするも、むしろ興あるわざと存候、若し小生の擧動にして虛名を求むるに急なるに似たるものあらば、そは小生の困窮より生ずるものに候。先日小生が「吉里日記」の末尾に記せる決心を捨てゝ、上京せんとの考を生ずるにいたりしは、自己一身の爲には無之候。素より人の前には一家の内狀を語り得る譯に無之候ゆゑ、讀書と活動とのためぞと語り申候へども、内心はこれに反し、たか〱左樣の心安き譯に

無之候。短時に起れる三つの事に小生を激動せしめしに候。

左に有事情を略申上候。聞きぐるしき次第に有之可申候へども、枉げて御一讀被下度候。

一、本年二十歳のユキと名つくる妹あり、これに小生常に他郷漂浪の身に候へば、婿を貰ふつもりにて、嫁に遣はさず置き候所、小生突然歸郷いたし候ため、何とも始末に困ることに相成、當地の習慣にて十五六歳は嫁入の年齢に有之、今更良縁を求むる由も無之、急に片付くべき望みなく、殊に除りに無調法なる正直ものにて、人に御辭儀することをも、親に向ひてアイと應ふる外、ハイといふを知らぬ有様に候へば、親は不便がりて嫁は不便がりて嫁にやるを好まず候、尤もの次第、小生も同感に候。さて然らば如何にすべき。婿を迎へんか。四壁立つのみたる家の、さらでだに、來る者あるべくもなし、ましてや小生と云ふ者、厳として在るなれば、何を望みに來るべきや。世間にソンナ無慾もの有之ものに無之候。さらば分家せんか。五十圓や百圓の入費かゝり可申候。ソレが小生の家の力にては、五十圓どころか、一圓五十錢もむづかしく候。さりとて愚痴〱いたし居候ては、大切の妹の婚期を失せしむる虞有之、すでに世間にては「大の兄妹二人を並べ置き、如何にするつもりにや、嫁をも婿をも貰るゝ人、天下にあるものか」と、うしろ指さして嘲笑いたし居り候趣、心外のいたりに候。小生ハ勿論、三十歳や三十五歳にては妻帯の望みも無之候へども、妹が不便に候ゆゑ、若し小生さへ家に居らずば、婿に來る特志家もあるべしと思へば、矢も楯もたまらず、出郷の志を生ぜし譯に候。「古里日記」の末段も虚僞の言に無之、先日の黨東も眞實の感情より出でしに候、御諒察被下度候。

二、同時に七の戸町の旅籠屋の下女を致し居るハルと名つくる十七歳の妹より、片假名にてしるせる長文の書を受取り申候。其中に、片時も裁縫を學ぶ時間と讀書をたす時間と無之、かくては人妻となりても義務をつくすこと能はざるべきを悲み、一二年にても學問をしたしとて、切りに連れて上京せんことを乞ひこ

せるに候。一々同情にたへず、斷腸の念にたへず、如何にともして其志を叶はせてやり度存ぜしに候。

三、それと同時に、八の戸へに丁稚奉公せる弟哀切の書束を接手いたし候。其處の主人は無情冷酷にて、四五年に相成り候へども、一度も逢ひにかへさざる程に有之、隨分虐待いたし候ゆゑ、身のため家のためを思ふて辛抱せしも、途に堪え切れぬゆゑ歸りたしとの事にて、彼は十五歳ばかりの可憐の小童に候。我は此の書を抱きて飽くまで泣き候て、直ちに、早速歸れ誰へも遠慮はいらぬと申遣し候。（小生不在中に歸り、終宵泣きし由に候。今晩は不在、いまだ逢はず、七の戸への八ルに逢ひに行きし由に候。）小生は何とぞして、彼に勉强せしめ度、學資の給與など迚も思ひもよらぬ事に候へば、同道して上京、とも〴〵自炊して中學へ入れたく存ぜしなり。

以上の如き譯合に有之候。貧乏でさへなくば、少くとも弟妹のあらざりしならばと、身の腑甲斐なさを泣くのみに候。

尙々、明年の四五月のころ迄にても宜しく候間、四方に御注意被下、適當の糊口の道も有之候はゞ、御求め被下度、また小生も當方にて及ぶだけ良好の手段を取り可相成は、此の地にて生涯の基礎を定むる樣なし可申候。ある人が、小生を村の書記または助役に致したし、と云うて周旋する者あり、いか樣の結果に相成り可申や、追て御報可申上候。

十月十一日　　　　大塚壽助

後藤寅之助樣

その後、拙者より無謀の出京甚だ危險ある由を申し上げたところ、同年十月一日付の書翰に熟慮の末、上京を思ひ止まり、鄕里にて堅實なる職業に就き、「希望と光明との世に住せん」といふので

あつた、が、此の計畫も病の爲めに破壞されてしまつたらしい。

甲山君の『ふる里日記』は、其の半生の自叙傳であり、又思想史でもあつた。彼の家の極めて貧しかつたために、夜中、雨が降ると、末の幼妹が、いつも泣き出すのを例とした。といふのは、家根が到るところ漏るので、寢床をあつちこつちと運ばれる、其のつらい經驗が幼い胸に泌み込んでゐたからであつたと云ふ。これで貧乏の程度が察しられる。

彼が『ふる里日記』五月二十四日の條下に、

蕨を風呂敷にみたし妹に負はせて歸る。鬱蒼たる老松のとぎれとぎれに、巍峨たる峯の山、見ゆ。溪の底に鋤ふむ人の唄聲のうづまき、あるは丘のにし、すなはち地のはてに立ち、天に頭(かうべ)を接して耦耕する農夫の、いかに崇高に見ゆる。彼等は、今や、只鋤のさきに土の黒く飜るを知るのみ。無我無心に、その鍬を執る。家に歸へらば、免るべからざる、くさ〴〵の愁ひと、嘆きと、怒りの無くてやは。はた、彼等の其の高貴なる勞働に對するむくひを得ることなく、黒き稗飯をくらひ、冷やかなる麻(あさ)布を着、稻わらの上に臥し牛馬にも劣れる生活をなして、この世を終る。而して、彼の安逸の徒は徇樂せり。そも如何なる權利をもて、我々の粟を食ふや。

相當に激越な感情がひらめいてゐる。さうかと、思ふと、また極めて平和な、溫精な一面もあつた。同日記二十五日のくだりに、

我は近來、自然の祝福によりて、心になはだ平和を感じ、静かに事物を考察することを得るにいたれり。自然は限りなくわれを慰藉す。百の花木と百の禽鳥とは、ことごとく意義を有して、われに語る。かの崇邱にのぼれば、洋々滔々たる江湖と、巍峩連綿たる山嶽はわれにをしへて曰く、なんぞ擾々紛々たる塵界を去つて、我れに歸らざるやと。彼等は我等れを猜忌せず、憎惡せず、嫉妬せず、排斥せず、中傷せず、其の大なる懷を開きて、われの眠るにまかするなり。きのふの我は、一事一言感激して、直ちに涙を流せしが、今や嫣々たる笑を以てこれに代へんとす。昨日の我の眼は、野獸のごとく烱々たる光を放ちしが今や次第に鳩のごとく和らがんとす。……若し我が眞にあるものに求めずして、徒らに外よりするものゝために心を動かさば終生役々として、他のために奔命に疲れざるべからざるなり。今日は家のめぐりの草をとり葉す。詩を削るよりは興あり。（下略）

同二十八日の條下には、いよいよ田園詩人たる面目が躍如としてゐる。

二十八日。このごろは多く書を讀まず、日日暇あれば花圃に出でゝ鍬に親しむ。今日は垣根に山吹を植ゑ、グラヂヲラスを移し、友より杜若（かきつばた）の一種を一と鉢ほり來りて植う。……三十一日（前略）われは我が詩文もて生活を爲し得べき日の來らんことを豫期せず、またこれを願はず、詩を以て生活を爲し得る曉は、わが詩の生命こゝに盡き、愉快ここに消えて、苦痛の來る時なるべきを思へばなり。

此のやうな思想から、郷土の淨化と文化との事業に獻身的に働く決心をしたのであつたが、しかし、彼の貧窮と病弱のため、その崇高な理想も、往々攪亂されることがあつたらしい。そして、晩年肺を患ひ、年僅かに三十を越すか越さぬといふ若さで、永眠したのである　彼は、其の『ふる里日

記』のをはりに、「村の北なる平和なる邱の上の老いたるオンコの樹の下に、一個無名の土墳を添へん、もし旅ゆく人、こゝを過ぎなば、必ず清然として一掬の涙をふかく鎖ざせる土塊の上に灑ぐべき也」と、自家の運命を豫言して居るのも、あはれ深いことである。

『新小說』第十年頃には、每卷、殆ど甲山の新體詩又は隨筆を掲げぬことは無い位であつたから、その作の數も相當に多い筈である。勿論、他の雜誌等に發表したものも少なくはなからう。彼の代表作といふ譯ではないが、短いものを二三採錄する。

○隴頭感慨

農童たかく叫びつゝ、
午を報ずる畑の面に、
炎の日かげ背にして、
鍬をうちふる翁あり。

あゝ若きより此の日まで、
雨、嵐にうたれつゝ、
つとめ勵みしむくいには、
たゞ荒栲のきぬひとつ。

いそしむ汝は憂に泣き、
つま子草屋に冷ゆる時、
知るやにしきに包まれて、
あける懶怠のいぬありと。

翁よ汝の執るわざは、
たゞいたづらに高殿の、
爲すこともなき貴人の、
酒色の料を造るのみ。

（農　夫

田村が建てし石碑の、
跡はたれとも見わかねど、
夕日の花は蒼茫と、
ひろき野の上に散らふかな

聞けや、かなたの燕麥の、
はたのなか道かへり行く、
めをとふたりの唄聲の、

ほがらに擔き肩に鍬。

あゝいづこにか我が與の。
農夫のごとき健康と、
朴茂の心たもちたる、
尊きたみの今ありや。

よしやすべての清き香は、
社會のうへに失するとも、
ひとり汗ばむ額の上に、
神のひかりぞ宿るなる。

○塘の楊

水に河骨黄を挿せど、
かへりみもせず河骨を、
澤に翡翠かけれども、
思ひも出でず翡翠を、
濕りに靴をうるほして、
指すは塘の楊かげ。

むかし朧の月の夜に、
逢ひしはここか深みどり、
引鳥關にきえしごと、
今はいづくの空に泣く、
かの君こふる夢ならば、
安けくまもれ夕の薬楊。

彼が此の沼崎村の池塘の水にひたした種籾の俵に漣波よするに興じて、

芽柳の雫かつちるたねだはら
　たはらがもとに蛙なくなり

の歌碑を青森縣の有志が、建てゝやつても、不都合ではなかりさうにも思ふ。兒玉花外君が昭和二年八月、十和田湖の東方、蔦温泉に遊んだ際、故甲山君の令弟理吉氏に逢ひ感慨無量であつたとの通信に接したことがあつた。近頃私は、彼が晩年の生活をどうして送つたであらうか、其れを知りたいやうな氣がしたので、令弟に書面で問合せたが、遂に返事は無かつた。或は他郷へ去られたのかも知れぬ。花外君の方からは、

（前略） 故大塚甲山君は、晩年、小生一度本郷の宿を見舞にゆきました。が、會はず。其後、死亡までの事は存じません、青森にて弟君に會ひしが、承聞しませんでした。唯肺を病み、鄕里にて沒せしは事實です。無論、貧苦はつきものでせう。

八甲田山片雲消えし詩人の死。（下略）

七月二十七日

徳富蘆花氏が、彼の作を讃稱して、將來わが國の新バアンスになりはせぬか、とまで云はれた才人の生活は、斯くの如く短く、そして落寞たるものであつた。　（昭、九、八）

一八、石川啄木と其の恩師

——湖畔の蝸廬再築——鎌倉への轉居——啄木と私との交渉——新渡戸仙岳先生と啄木——盛岡天神山の歌碑——

會津猪苗代湖畔の私の蝸廬が、明治卅五年の九月二十八日、暴風のため潰倒したことは、前にすでに書いた。その翌年防風の堤をつくりなどして再築したのである。つまり、多少の執着に引きずられたものであつた。そして、兎も角、四十年の十二月上旬まで、そこに住み續けたのである。何が動機であつたか、今は全く忘れてしまつたが、多分、さびしい田舍ずまひに饜いて來たのが、主な理由であつたかのやうに思ふ。そこで、相州鎌倉に移住を決行することになつた。早速、當時逗子に居られた泉鏡花君に適當な貸家を鎌倉町で捜すことを依賴したのである。同君は親切に尋ねて吳れ、十一月二十四日付で、左の通知を送られたのである。

鎌倉町、雪の下、罨石、三百七拾三番地

御宅とり極め申候まゝ御安心下され度、ステイションより、向つて八幡宮鳥居前、右手にござ候。屋賃八圓。家はまだあたらしく、まことに、おすまひよく、氣がきいてをり候まま、早く御引越し待入り候。もつとも、見つけたものゝ手がらにはこれなく、たてたものゝ功にて、はや御すまゐに候まゝ、手ばなしにほめ立て申候。なほおいでの日、おんしらせ下され度、掃除いたさせ御待ち申上げ候、とりあへず。早々

二十四日　　相州逗子　泉　鏡太郎

この家へ翌月上旬に至つて、私は移り住むことになつた。鏡花君の云はれた通り、實に小ざつぱりした、晴々する心持のよい家であつた。そして轉居さう〳〵、同君からは、草花なども贈られ、如何にも住みよい安住の地を選み當てた感じがしたのである。それに著名な史蹟の多い土地であるから、引越した當座は、あちらこちらと舊跡を探しまはつて日を送つたものである。

翌四十一年の九月末頃から、石川一氏（號啄木）から頻りに私に書面を送られるやうになつた。後に同氏の手紙で知つたことではあるが、これより先、四十年五月、啄木が北海道に渡る以前にも、私へ書簡を送つたと云ふのであるけれども、今その頃のものは悉く失つて、私の手許には一つも無い。多分、單なる雜誌編輯事務に關する用向に過ぎなかつたものかと思ふ。

實のところ、私が啄木氏の歌なり行迹なりに就いて注意深くなつたのは、遙か後のことである。
私は大正三年五月、東京本郷駒込動坂の寓居を引拂つて、秋田市に移り、その翌年四月、郷里仙北の六郷町に本籍があるので、そこに隱棲することになつた。その以後昭和六七年頃までは、極めて閑散な日を送つた。その頃、私の家に出入する青年諸君の間に、新派の短歌を作る人が數人あつて、いつしか私も此等の人々に誘はれて時々歌會などを開き、消閑の一樂としたものであつた。その會に集まる若き歌人どもの口から、屢々石川啄木の話を聞かされた。この人の歌の勢力が現在日本の歌壇に伸びゆく有樣は、さながら燎原の火にも似てゐる、などとも聞かされた。そこで、啄木から手紙を貰つた時代のことを思ひ出し、古い書簡などを詰め込んである反古櫃を捜して、彼から送られたもの數本ほど拾ひ出したのである。しかし既に失つたのも少なからずあると思ふ。東北地方その他の青年歌人どもが、基督教徒が聖地巡禮をするやうに、啄木の郷里岩手縣の澁民村を訪うものが絶えぬと云ふ新聞記事を讀んだのもつい其の後のことである。この巡禮の人々の話も傳へ聞いた。その澁民村の村民の多數が、曾て啄木が述懷の

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

といふ歌に、今さら同情の念しきりに、冷遇したその昔を痛悔して、誰いふとなく、啄木を故郷に呼び返さねばならぬ、と云ふ聲が盛んになり、彼が愛する村の景勝の地を選んで、歌碑を建立することになり、その碑を村の人々こぞつて現場まで「啄木をつれて來たぞ」と叫びつゞけて引きこんで來たといふことも聞いたのである。その歌碑の寫眞は、もう中等學校の教課書などにもいくらも載つてゐる。

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

これより先、既に函館の立待岬に歌碑が建立され、啄木歌集中最も秀逸とされ、『一握の砂』の開卷第一に載つてゐる「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」が刻されたのであつた。

からなると、彼が高等小學時代から中學時代を通じて關係が深く、新婚當時、始めて家庭をつく

つたのも、其處の中津川に沿ふ加賀野磧町であつたといふ、頗る緣の深い盛岡市の古い友人知人達も、じつとしては居られなくなつたのであつたといふ。

人の緣ほど不思議なものはない。何處に、どう結ばれてゐるものか、事が牽き出されぬ限り、殆ど豫測の出來ぬことは、今さら怪しむべきでもない。が、昨年末、突然盛岡市の新渡戶仙岳先生から、啄木の歌碑の拓本を贈られ、唯盛岡市に近き頃できたものだと、唯一言添へられたのみであつた。最近同先生から五十部限定本といふ尊い該「歌碑建立記念」錄の寄贈にあづかり、始めて、同市の東郊天神山に建立されたものであることが判つた。が、七十歲を越された新渡戶先生としては、新派の若い歌人啄木に趣味上の共鳴があらうとは、容易に考へられぬし、又頂戴した私とても、七十に近い老人であるから、贈られたお方も、受けた拙者も、甚だ啄木とは緣遠い氣がして、何分不審が解けなかつた。然るに、此の初夏の頃、年は私よりも三十も若い友人高橋哲之助君が『石川啄木全集』の第五卷で「書簡附年譜」といふのを貸して吳れられたの見ると、その謎は忽ち解けたのである。それと共に、一寸意外なことに驚かされたのである。と云ふのは、此の書簡集の中に、啄木が明治四十一年の本鄉赤心館時代に、私に寄せた、かなり長い書簡——數年前に高橋哲之助君に

近して載せられてある。成程、これを御覧になられたので、新渡戸先生が、共通の感興の上に立つ

私から贈つたもの――と新渡戸仙岳先生宛のものと、一緒に、殆ど並んでゐると云つてよい程、接近して載せられてある。成程、これを御覧になられたので、新渡戸先生が、共通の感興の上に立つて、私へ啄木の詩碑の拓本を贈られたものであらうと、急に、意味がわかつたやうな氣がしたのである。後藤は啄木の生前から相當懇意な間柄であらうから、之れを贈つて喜ばしてやらう、と云ふ御厚情からであつたことは確かである。こちらは、其れ程、親密な關係といふのではなかつたけれども、あちらは啄木を青年時代からお世話せられた眞の恩師であつたと云ふ事が明かになつた。

新渡戸仙岳先生と私とは、約十年前より、不圖した機緣に因り、親しく交際を願ふ事になつてゐる、主として文通に依るのではあるけれども。大正十四年の八月、岩手縣江刺郡岩谷堂町に於いて、東京帝室博物館の高橋健自、東北大學の喜田貞吉兩博士を中心とし、これに、岩手縣の學者も參加して、東北古史及び同考古學の講習會が開かれ、史蹟の臨地攻究及び講話をも行ふといふので、同趣味の友人と共に再び學生に立ち歸つた心持で、私もこれに出席した。凡そ一週間、諸先輩の講說も承はり、坂上田村麿將軍時代から、前九年役にかけての、數々の史蹟を歴巡したものであつた。

といふのは、私の趣味の基調が、明治末頃から、段々純文學から遠ざかり、古代史の方へと轉遷し

てしまつたからであつた。この平泉藤氏の發祥地、豐田城に近く開かれた講習會を終つて歸途、盛岡市に赴き、縣立圖書館に始めて新渡戸仙岳先生を訪うたのである。そして地方史に關する資料に就いて、請益するところ少なからずであつた。その後、音問を斷たず、今に親しく道交を辱うして居るのである。新渡戸先生は岩手縣の教育界の元老であり、地方史家の翹楚である。その人本道に至つては、奥羽の間、屈指の名流である。岩手地方の碑文の主なるものは、概ね先生の揮毫を煩はしてゐるのを見ても、衆望を負うて居られることがわかる。私の訪ねた頃は、縣立圖書館長で、縣史編纂の主任をも兼ねて居られたやうに思ふ。學德の高いことは、縣の内外に著聞するところである。昨年末同先生から、私に贈られた啄木歌碑の拓本は、

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

といふのを刻したものであつた。

何年か前に、函館の立待岬に同地の有志が啄木歌碑を立派に建て、次いで郷里の澁民村の故舊に依り、また「やはらかに柳あをめる北上」の碑が出來た。この兩地にもまして縁故の深い盛岡市に、

岩手縣人が「我等の思郷の詩人」として誇る、啄木の歌碑の一つもないと云ふことは、[illegible]異様であるとの叫びは、久しい前からあつたさうである。昭和五年の春、盛岡中學校創立五十年祭のあつた際、同窓の人々の間に、啄木建碑が結成された。けれども幾多の曲折があり、障礙があつて、昨昭和八年の八月までは、實現されずに來たものであつたといふ。

話が少し逆戻りすることになる。私が鎌倉住居の頃、啄木氏から頂戴した手紙の大半は失はれてゐるやうだ。が、殘つて在るものを日付の順序で見てゆくことにする。

明治四十一年六月十五日付の私宛の書簡を左に掲げる。金田一氏の年譜に依ると、啄木は此の前月の十八日に、小説『病院の窓』を起稿して、同二十六日に脱稿してゐる。そして六月號の『明星』に長詩『泣くよりも』以下數篇を發表してゐた。改造社の啄木全集第五卷「書簡附年譜」には、此の手紙を、明治四十一年六月十五日のものとして掲載してあるが、――高橋哲之助君の手許から借りて書寫したものであらう――本郷菊坂町赤心館時代だから、確かに明治四十一年のであるべき筈である。同年の九月六日までは同館に止宿してゐたのであるから。

拜啓仕候、漸く炎暑の候に向ひ候節、益々御清適と奉賀候。

私事、嘗ては、失禮な手紙など差上候ひし事も有之候ひしが、爾後遠く北海の涯までも放浪いたし候事とて其日〳〵の事に目を廻して、おのづと打絶えて御無沙汰にのみ過し候畢、今になりては誠に心苦しき次第に御座候。小樽にて塚原辰吉と申さるゝ方に逢ひ、はしなく貴下の御噂など承りたる事も候ひし。稚き詩筆を擲つてより既に二年、力なく才なき身には、具さに生活の苦しみを嘗め候ふ。時々の感想つもり〳〵て、今年早春深く心に期する所あり、家族をば函館なる友人に頼み、飄然として單身海路より三度都門に入り候ひしが、爾來既に五旬、只今の小生の心は、月かげさやかなる詩歌の鄕土を旅立ちて、白日光あきらかなる散文の自由の國にあこがれ居候。今後は、たとへ如何なる犧牲を拂ふとも、專心小說の創作に從事いたしたく堅く決心いたし居候。

入京來の試作四篇、うち二篇をとりて森（鷗外）先生の御一閱を仰ぎ候ひしに、先生の方より貴下へ御廻し被下、望外の幸に、『病院の窓』の一篇新小說に御買取下され候由、一週間許り以前に、先生の方より御通知をいただき候ひし。名もなき私などの、然も最初の作、御採用下され候ふ御高儀深く奉感謝候。

さて、右につき、森先生よりも「報酬は登載の上との事、御申添へ被下候ひしも「實はお恥かしき次第ながら、先月分の下宿料もまだ拂つてゐぬ樣の仕末。くだ〳〵しき事は申上げず、途方にくれ候ふ末、外に策なき事とて、再昨日、春陽堂にお訪ねいたし候ひしも、既に鎌倉にお歸り被遊候あと。高崎氏にお目にかかりてお願いたし候ひしに、本日にいたり、矢張貴下御不在中故、何とも取計ひがたき旨、お手紙賜はり候。その後二晝間、幾度となく思返し候ふ末に一、矢張致方なさに、直接貴下にお願ひしてみる決心いたしたる次第に御座候。初めて原稿御採用下され候ふ御恩さへあるのに、あまりと云へば「あまり厚かましき儀には候へど、特別の御詮議を以て、幾何なりと、稿料御惠み被下候樣、御取計を仰ぎたく、伏して奉願上候。目下御地にある一知人あり、先日出京したる節、鎌倉の寺に室を借りてをれば、一日二十五錢にて萬事世話してくれ候

由知らしてくれ候。されば、若し此度の御願事御許し被下候はゞ、此方の荷片づけたる上にて、御地にまゐり、一二ヶ月の間、寺住居しつゝ、時々は御高訓に接しながら、靜かに筆を練りたき心組に御座候。私如きものが、筆一本にて生活せむとするは、申すまでもなく、隨分と向ふ見ずの話なるべくと存候。然し乍ら、小生が過去三年許りの經驗の教ふる所にては、小生は遂に實際の社會にありては、生活に適合せざる人間なるものゝ如く候。貧には慣れたれば、左程怖ろしからず、怎ど貧乏するなら、朝から晩まで不安なる不愉快なる事に糊口の途を需むるよりも、筆さへとつてをれば、よしや書くものは拙くとも、多少の樂みはあるべし、と存じ候ふ次第に御座候。此度の決心をいたし候ふ消極的の理由の一つはこれに御座候。唐突の此お願ひ、失禮の段は幾重にも御許し被下度、何卒御憫察被下て、特別の御取計被下度御願申上候。

草々。

六月十五日夜八時

本鄕區菊坂町八十二、赤心館内

石　川　啄　木　拜

後藤宙外先生　御侍史

此の書簡で見ると、啄木が北海道に渡る以前に、私に手紙を送つたと見えるが、今は私の手許には見えない。この頃、啄木は小說ならばと考へて作つた小說も、容易に雜誌に載せて貰へず、依然生活難に追はれ、いらいらして寢られぬ夜もあつて、一夜に數十首の歌をつくり、それが幾夜もつづいて、忽ち數百首となつた。これが後に歌集『一握の砂』の名篇となつたものであると、傳へら

れる。

左に掲げるのは、啄木が本郷森川町一、新坂三五九、蓋平館別莊に下宿してゐた時のもので、明治四十一年九月二十三日付のものである。

拜啓仕候、久々御無沙汰に打過候うちに、朝夕淸涼を覺ゆる頃と相成申候。先生には益々御多祥の御事と乍蔭奉祝候。

降つて、小生事、猛夏三ヶ月を何の爲す事もなく打過し、徒らに苦思を重ねて、遂に自ら處決するの勇もなく、一友の同情によりて餓を凌ぎ來り候處、新秋九月未成衣、悲音頻りに到りて、事々皆非。如斯は、もとより、小生が最初より世に處するの途を謬りたるに因る事と存じ候へど、一家を濟ふ能はざるのみか、己れ一身をさへ養ふ能はず、既に此境に沈淪致し候者には、千百の訓誡はた何の用をもたさざるべきか。嘗て一度お斷りを享け候ひしも、外に途なき事に立至り候儘、恥を忍んで此手紙差上ぐる事に決心仕候。何卒〳〵、月末までに御救ひ被下度、此段伏して奉懇願候。苟やむをえざる時は、金額でなくとも宜敷候。失禮乍ら御返事待上候。御返事次第にて、實は何とかせねばならぬ譯、よろしく御賢察の程奉希上候。

石川一拜

後藤先生御侍史

亂筆いくへにも御容赦被下度、言々皆禮を失す、幸に御海容あらむことを。

右の手紙は金田一京助氏編の『石川啄木年譜』に對照して見ると、啄木が北海道から歸つて來て五度目に東京へ出た時のものである。啄木は當時與謝野鐵幹氏夫婦、その他新詩社同人と交際し、

此の九月五日に、千駄木の森鷗外氏邸の歌會に列席してゐた。そして『明星』に短歌、長詩を頻りに發表してゐた時代で、「大聲にふるさと人を罵りて皆に石うたれのがれ出でにき」の歌は此の頃のものであつた。

同年十月は、啄木が『明星』に『一握の砂』の中にある「秋風のこゝろよさ」その他思鄕の歌を數多く發表した頃である。此の月の五日に、春陽堂編輯局内として、私へ送つた書簡がある。

前略御免下され度候、一昨日に候ひけむか、電話にて春陽堂に問合せ候處、兩三日中には御上京なさるべしとの事に候ひしが、多分モウ御出遊されたる御事と存じ奉候。先月下旬手紙を以てお願致し候ひし件、何とか特別の御計ひを仰ぎ度、御拜眉を得て、懇々御願仕り度と存候へど、今日は何故か心地常ならず候儘、それさ思ふにまかせず候。何日頃まで御滯京に候ふべきか、何卒〱御憐愍を以てお取計ひ下され度、伏して願上奉候。毎日何時頃にお伺ひすれば、お目にかかり得候や、電話にてでも御知らせ下され候はゞ、幸ひの事に御座候。草々不一。

十月五日　　石川啄木拜

後藤宙外様　御侍史

これも本郷森川町蓋平館別莊から送られたものであつた。

四十二年三月、啄木は『東京朝日新聞』社の校正係に採用され、月收約三十圓餘を得て、やゝ生

活の安定を得た状となつた。けれども、其の翌四月には、當時函館に居た母堂が一日も早く東京に行きたい、と云つてよこしたが、下宿未拂にて母親を呼ぶことは出來なかつたさうだ。六月に入つて、未拂の下宿料は友人金田一京助氏の保證で、月賦返濟の約束ができ、本郷弓町の喜之床といふ理髪店の二階に移り、母堂と節子夫人令孃京ちやんをも呼び寄せ、此の月中旬、久しく流離の一家が、やつと一緒になれたのである。然るに、母堂と夫人との間に、函館以來の不和が再燃し、生活の窮乏のため、それが一層激成され、此の九月に至り、節子夫人は病院にゆくと稱して、家を出で、令孃を連れて盛岡の實家へ逃げ歸つてしまつた。啄木の懊惱は非常なものであつたといふ。

明治四十二年十月十日、この件について、盛岡市の啄木の恩師新渡戸仙岳先生に送つた書翰は實に悲痛を極めたものである。左に、

（前略）病妻に關しての御同情のお言葉、胸をさゝるゝ思ひして感銘仕候。今は洗ひざらひ恥を申上ぐる外なし。實は本月二日の日、私の留守に、母には子供をつれて天神樣へ行つてくると言つて出たまゝ、盛岡に歸つて了ひ候。日暮れて社より歸り、泣き沈む六十三の老母を前にして、妻の書置讀み候ふ心地は、生涯忘れがたく候。昔は物食はで飢を覺えず、夜は寢られぬ苦しさに、飮みたらはぬ酒飮み候。妻に捨てられたる夫の苦しみの斯く許りならんとは、思ひ及ばぬ事に候ひき。かの二三回の通信は、全く血を吐くより苦しき心にて書き候。私よりは、あらゆる自尊心を傷くる言葉を以て、再び歸り來らむことを賴み入り候。若し歸

らぬ、と言つたら、私は盛岡に行つて殺さんとまで思ひ候ひき。昨夕に至り、先生のお手紙と同便にて、返事參り候。病氣がなほつたら歸ると言つてまゐり候。……無論先生にこんな事までお願ひ出來るとは存ぜず、かゝる事お耳に入れて、御心配かけるさへ心苦しき次第に候へど、若し道にてたど荊妻にお逢ひなさる様の事候はゞ、よく／＼右の私の心お說き聞け被下、一日も早く歸つてくるやう御命じ被下度、伏して願上げ奉り候。萬一にも實家の方にて、何のかんのと、節子の歸りを長びかせるやうの事あらば、その時こそ、私は二人の將來のすべてを犧牲にするだけの、心ゆく限りの復讐をいたすべく候（下略）

十日夜九時　　　　啄　木　拜

新　渡　戸　先　生　御侍史

その突き詰めてゐる心持と、一徹な性質とは、痛々しい程、鋭くあらはれてゐる。最近、右の新渡戸先生より私への書面に、

（前略）啄木には、その少年時代に逢ひし後、久敷隔り居候て、逸話など知り不申候。彼の幸德事件之頃、東京にて面會候折は、朝　新聞の校正に從事、大分多忙の旨話居候。其時の話に、幸德事件の發展前日これを探知するや、各古本屋をあさり、社會主義に關する著譯、雜誌、新聞等あらん限り、拾數金を投じて買占めたるが、事、發表するや、五錢に買ひたるものは、五圓の價に騰貴したるなど、頗る得意げに話せしときの風采、今尙眼前に髣髴致し候。誠に人情に厚く、溫みのある少年にて、如何なる境遇にあるも、決して一晉問を怠らざりしは感心に御座候。（下略）

九月五日　　　　居　　頓首

後　藤　先　生　侍下

金田一氏の『啄木年譜』によれば、明治四十三年二月、中島孤島君の紹介で、私は啄木氏に逢ひ、小説「道」を引受け、四月號の『新小説』に掲載してゐる。又同誌六月號には氏の評論「硝子窓」を掲載したことになつて居る。が、今は細いことは悉く忘れてしまつた。氏は晩年思想を一變して、一切の現實を肯定し社會主義的國家主義を奉ずるやうになつたのであつたといふ。

盛岡市全體を一眸の下に見はらす小丘、天神山に建てられた「病のごと思郷のこゝろ湧く日なり」の歌碑が、昨年八月落成する迄には、其の場所の選定にいろ〳〵の故障を生じたのであつた。不來方城阯の、岩手公園を第一候補地として、石黒知事に折衝を試みると、「おんた働けど働けど」など と不甲斐ない歌をよむ奴の碑を建てるなんて、以ての外だと拒絶され、啄木の舊宅に程よい石のあるのを、友人が碑材にしたいと家主に懇願すると、啄木が家賃を不拂にした事ばかり云つて、斷はられたりした。又、啄木が新婚のまろらかた夢を結んだ中津河畔の磧町の茅屋のある所か、又は其の附近の川留稲荷の境内をとの希望も、事情あつて達せられず。最後に、盛岡市東郊第一の名勝地天神山は、啄木が屢々遊んだ縁故もあり、そこの社前の石狛（高麗犬）を啄木が、ひどく愛し、

松の風夜晝ひびきぬ人訪はぬ山の祠の石馬の耳に

夏木立中の社の石馬も汗する日なり君を夢みん

といふ歌もあるといふので諸友の熱心な努力で、竟に現在のところに建立されたものであつた。發起人として、最も此の事に盡力した人は、平野八兵衛、川口忠吉、小林茂雄等の諸氏であつたと聞く。（昭、九、十）

一九、自然主義運動の頭と島村抱月

――抱月の洋行歸りと自然主義――「囚はれたる文藝」――「幻滅時代の藝術」――坪内博士邸の文科校友大會――抱月の演說と僕の爆發辯――我輩の『秋田時事』社入り――須磨子抱月の巡業――東坡の薄薄酒二首――

明治三十七八年の日露戰爭の結果、我が國は大捷を得て、忽ち列強の班に列することになつた。これが、一般の民心に大きな衝動を與へたことは勿論であつた。その餘波は敏感な新進氣銳の文壇人の思想にも、相當の刺戟を及ぼし、何れかの方面に發展の道を求めようとする意氣が鬱勃として居つた。それに、間接には、外國文學の影響が、薪に油を注ぐ作用となり、やがて、文壇に自然主義運動を起こさしめたものであつたかに考へられる。時勢の雰圍氣は、右のやうになつて居ても、直接點火者がなければ、急に烈火となつて、燃えひろがりはしなかつたであらう。尖頭に立つて炬

火を執つた者は、島村抱月君であつた。それに續いては、長谷川天溪君を始め、田山花袋、片上天絃、岩野泡鳴、中澤臨川の諸君があつた。抱月君は明治三十八年九月、歐羅巴から歸朝せられ、その翌三十九年の春、『早稻田文學』に「囚はれたる文藝」を發表したのが、抑も自然主義運動の烽火を揚げたものと見なすべきであらう。天溪君は三十九年十月に「幻滅時代の藝術」を、四十年十月には「論理的遊戲を排す」(所謂自然主義の立脚地を論ず)を、四十一年一月には「現實暴露の悲哀」を、いづれも『太陽』に發表せられた。此等の論文が自然主義運動の進軍喇叭となつて、氣勢を添へたことは莫大であつた。田山花袋君は『文章世界』の牙城に據つて、漫筆風のものではあつたが、盛んに此の運動に應援したのである。この外、岩野泡鳴君は別働隊として盛んに半獸主義や刹那主義を唱へてにぎはした。大正元年九月一日發行の『新日本』明治聖代號に、抱月君が執筆の「明治文學」の結尾に、

思ふに、自然主義が其の描寫方法の如何に關はらず、現實の生活を基礎とする點に於ては、今後永久の最有力者たるべきと共に其の人生觀に於て、捉へ得て考へた點が、絶望となり、あきらめとなり、刹那的生活となつた點には、幾多の不滿足があつて、此の人生觀たる立ち場から、自然主義は變ずべき理由を有してゐる。其の捉へんとしてゐた人生觀上の點が、果して神祕であるか、神であるか、宗教であるか、それとも、

もつと手近かな所にでも落ち着き得るものかは、今後の問題として、兎も角、其の捉へ得た神祕なり、神なりを、如何にして、現實と切り放さずに、吾々に與へ得るかの點に、今後の藝術問題に懸つて居る。今日又は今日後の藝術は、捉へ得た何物かを、最も密接に、現實に、生活に、附着せしめて、吾々に與へる者の支配に歸するであらう。

と云つてゐる。該運動の最盛期を過ぎて、相當の距離に遠ざかつてからの文章だけに、かなり反省味を加へた要約を得てゐる說である。詳しいことは、博文館發行『抱月全集』第二卷乃至第三卷、長谷川天溪君の『自然主義』(四十一年七月發行)岩野泡鳴君の『新自然主義』拙著『非自然主義』等に讓つて省略する。往事は雲を逸うて散ずるで、もう夢のやうに思ふ。あの頃からは、もう三十餘年も經過してしまつた。今さら書くのも廢墟を訪うて瓦片を探ぐる心持で、何とはなしに氣が滅入る。

抱月君が、三十八年末に西洋から歸朝し、翌三十九年頃から、自然主義を提唱し、鼓吹し、四十一二年頃は此の運動の最盛期であつたかに考へられる。私なども、微力ながら、同志の人々に誘ひ出されて、この時潮に乘つた運動に反抗を試み、旗手の役まはりを勤め、亂矢を受くる蝟の如しで、滿身完膚なしといふ始末であつた。今となつては、痴人、夢を說く類で、實に慚愧千萬である。

明治四十一年八月十日、私が鎌倉在住の時であつた。が、早稲田大學文科校友會を牛込大久保餘丁町百拾貳番地の坪内逍遙先生の元お屋敷――後に西隣百十四番地の角屋敷に御移轉、そこに一時、俳優養成所や文藝協會試演場及び同事務所が建築されたことのあつた場所の東方――に於いて催された。この時の案内狀が、今も私の手許に遺つてある。勿論、謄寫に印刷したもので、昔なつかしいから左に掲げる。

拜啓益御淸榮奉慶賀候、陳者例規により、早稲田大學文科校友大會左記の通り相催候間、萬障御差繰、御來會被下度、此段御案内申上候、敬具

一 時日　八月十日午後正一時

一 會場　坪内先生邸

一 演說　數番

一 餘興　舞踊三番

一 會費　金壹圓

但、御出席の有無不明にては準備方非常に困難に付、乍御手數、何卒來る七日中に、必ず東儀へ宛て、御一報被下候樣願上候。

八月　日

幹事　池田銀次郎　長谷川誠也　相馬昌治

中桐確太郎　東儀季治（市內牛込高田外山新道）

〇追て御上京中の校友諸君へは御通知洩も可有之候間、御誘合の上、是非是亦七日中に御一報願上候。

この會に、私は鎌倉から出かけて列席したのである。會場は、新築して餘り日數のたたない頃の坪内先生邸で、御養子士行さん達の稽古用の新しい舞臺を正面に控へた廣間で、舞臺の楣間には「遊於藝」の浮彫金文字樟板の竪額が掲げられてあつた。今は此の額は熱海の双柿舍の一室に移されてあると傳へ聞く。――此の會の開かれた頃は、自然主義と非自然主義との論戰が頗る熾烈なものであつた。隨つて、早稻田文科出身者も自ら二派に分かれて、隱然對立の狀があつたのである。そこで、局外の校友諸君が、之を憂ひて、何とか融和の機會を作りたいと云ふやうな考へから、特に坪内先生邸を會場に拜借したものであらう、とから私だけは早合點したものであつた。勿論、先生御新作の舞踊劇を士行さん達に演ぜしめて、校友に見せて遣りたいといふ、先生の思召で、同邸拜借のことが許されたといふやうな理由もあるにはあつたであらうが……。

私のやうな豫期に全く反して、開會劈頭にまづ島村抱月君が舞臺に立ち上つて、露骨に、そして例の抑壓的な態度で、――押しの一手の極めて强い人であつたので、――自然主義宣傳の演說をやつたものである。そこで、私は持つて生れた例の爆發性を抑へかねてしまつた。無論、何等腹

案も準備もなかつたけれども、憤懣のあまり、突如、起つて反抗的批判を一席辯じたものである。が、至極興奮してゐたので、語氣は强かつたやうではあるが、論旨は透徹を缺いて、支離滅烈といふ次第で少なからず男をさげたらしい。その爲め席が、すつかりシラケてしまひ、親睦の爲めの集會は、全くめちや／＼になつてしまつた。その罪の半ばは拙者の負ふべきものであつたことは勿論である。やがて、舞踊劇その他の餘興に移つたので、先づ無事に會は閉ぢられたのである。この葛藤と衝動とは、私としては容易に忘れられず、翌四十二年四月發會式を擧げた、例の文藝革新會の生まれる動機に幾分の刺戟となつたものであつたかも知れない。何しろ、三十年前の事だから詳しい事は確かに記憶して居らぬ。誤謬の點があつたら、關係者から是正せらるゝやうに切願して置きます。

抱月君と私とには、云ふまでもなく同窓で、同期生であり『早稻田文學』記者以來同僚として七八年間も協力して働いた間柄であつた。それ故、相當、親しい友人ではあつたけれども、性格の根柢に於いて、相容れない點があつて、折々矛盾の餘儀ない場合に撞着したことがなかつたのではない。自然主義問題の起こる數年前、明治三十四年十月の頃であるが、何かの問題で、意思の疏通を

缺いたことが起つたのであつたと見える。が、今は何の事であつたか、確かな記憶にないけれども、左の書簡が遺つてある。日付は三十四年十月十九日で、抱月君は牛込納戸町二十七に居られた頃で、拙者は猪苗代湖畔に住んだ時代のものである。

拝啓過日は失敬。さて昨日中嶋孤嶋君の話によれば、貴兄より平尾不孤君への手紙とかに、僕の先日の『讀賣』のものを挑戰と見る云々の文句ありとかの事、勿論、貴兄と僕とは情緒的と知力的と、一面に於て全く傾向を異にし居れば、從て互に承知の事なれば、意見の上には、昔から合はぬ所も多けれど、まだ喧嘩をしたことはなし。今回の『讀賣』のを君を相手と解せられては、僕少々困り候。二ケ所に『新小説』の名が出てゐたといふ人あれど、あれは無論活版の間違。僕はむしろ君のを本にして、學者は學者の求むるものを別に要するといふことを云つた積り。但し『新小説』を見て筆を取つたの故、自ら『新小説』を相手にしたやうの句が出たといへば、それまでなれど、本意はむしろ先方の知識排斥論を敵とするにありしなり。美的生活やニーチエ論を大文字とするは、僕は不賛成なれど、君の求むるものを與へよとは、至極公平の事と思つて、君の言の及ばざりし方面に利用せしまでなれば、右御承知たまはり度、議論は厭はねど、只此際、君と僕とが陣を張つては、如何にも大學連の煽動に乘つたやうにて心外也、議論するにしても、今少しほとぼりの冷めて後か、又は哲學會にでもしては如何。右所存の程申入れ待御返事申候。早々。

十月十七日　　嶋村瀧太郎

後藤寅之助様几下

この書翰は流石に明敏な抱月君だけに、よく抱月君自身と拙者との性分を批判し得てゐると思

ふ。勿論抱月君とても知的方面以外に、情緒的なところの無い譯ではなかつた。が、しかし、私の方は忽ち焔となつて燃えあがるのであるけれども、抱月君の方は熔鑛爐の鑛のやうなもので、靜に音もなく灼熱するのであつた。君が晩年に於ける趨舍の迹を知るものは、之れを領くであらう。自然主義問題で兩人の間に軋轢を來たしたのは、偶ま持つて生れた素質の特異な點が、相觸れる機會にぶッつかッた、といふに過ぎなかつたかと思ふ。別に宿怨のある譯ではなかつた。それ故一時が經過するに隨ひ、本來の友誼上の温情を、互に恢復することは自然であつた。

今日から振りかへつて見ると、當時、私どもが自然主義の勢力の伸張を阻止しようとしたのは、全く愚擧であつたかも知れぬ。蘆筍の生ずる時、桐絮は潰ぶといふ、代謝の天則を忘れてゐた氣味もあつたからで。

抱月君が文藝協會から離れて、藝術座を率ゐて奔走するに至つた徑路も、事情も、實に私としては、殆ど知らなかつた。また窺ひ知る機會にも出あはなかつたのである。

私は大正三年五月、『秋田時事』新聞經營の委託を受けて秋田市に移住した。此の年の八月二十八日付で、同社の私宛に送られた抱月君の尺牘には、

拝啓、其後は御無音申上候。さて先日御社より御葉書被下候由にて、小生鎌倉地方開演の留守中、事務所より不取敢御返事申上候由に御座候が、「藝術座」義、例の復活劇にて近々北海道方面に參り度、唯今仕度中に有之、從て其途次、御地へも參り度と存じ、幸ひ其興行を受負ひ呉るゝ竹内一郎君と申す興行家の希望も有之候まま、御地にては坂本（三郎）知事と御社の貴兄とには、右竹内君紹介と御依頼とを兼ねたる書面相渡し置申候が、當人未だ御地に出向かざりし樣子に御座候。其他、魁社の安藤（和風）氏へも依頼の書面別に差出し置申候。右の次第に御座候へば、竹内君又は其代理のもの參上致し候節は、何卒、御引廻し願上申候。尚、安藤氏よりは應援承知の書面を呉れられ、併せて寫眞等を送るやうとの事に御座候まゝ、目下其寫眞取揃へ申に有之、相揃ひ候上は、御手許へも届け置可申に付、宜敷御願申上候。但し御地方の日取は北海道行の都合にて、今月末と相成候か、來月中旬と相成候か、又は一方仙臺方面をとの要求も有之候ため、興行者側の都合にて、冬に延び候か、ちよつと未確定に有之、何れとも此兩三日中に、定まり可申、多分、參らば九月中旬と相成るべく、左なくば、餘りに草急かとも存じ、右御含の上、宜敷御願申上候。何れにしても、右復活劇は不思議に一般的興味を惹起し候もの故、此際全國を持廻らんかと存居候まゝ、疾し、遲し、御地にも參り度、志望に御座候。從て、今の内より評判と期待とを御持たせ被下候はゞ、乘込の節、非常の便宜を得可申、唯今の所、如何に一般的と申候ても、やはり新劇は新聞社及知識階級にて、先づ其地方に期待の興味を御刺戟置被下候上ならでは、劇場側などた信じ不申、依然舊劇の名の知れたものには敵し難く御座候。一度、實物を見せれば、其時、始めて興行師側なども納得する、と申す形勢に御座候まゝ、右御願申上候。書外期拜眉申候。

匆々、不一。

八月廿六日（封筒は廿八日）　　抱月生

宙外大兄　几下

これを一讀すれば、當時抱月君が、如何に、地方巡業に苦心慘憺であつたかが、掌上の紋を見るやうに明かである。そして氣の毒千萬なとの感じさへ起こさしめたものがある。右の書簡は牛込區西五軒町三十四番地の藝術座事務所から送られたもので、同座の「翁」の面を紋章化した徽號を右側に刷り出した、褐色線の用箋に書いたものであつた。

右の八月には秋田市に於ては興行せず、同月三十日の未明に秋田驛通過の奥羽本線の汽車で、北海道方面の興行に向はれたのである。その時の『秋田時事新聞』社の私宛の葉書に、

唯今御地を通過して函館に向ひ申候。歸途は御地經由となれば、拜眉歡語の機を得べくと存居候。

八月卅日朝五時　車中にて　島村生

北海道の歸途には、秋田市に立寄るかも知れぬ、と云つたのも齟齬して、興行の都合で、仙臺まはりに變更されたのであつた。

同じ大正三年の十月十五日付で「秋田」の消印ある書簡が保存されてある。これは松井須磨子を座頭に戴く一團を率ゐて、北海道興行からの歸途、仙臺、青森、弘前、その他を巡業して後、秋田驛を通過の際、投函されたものであつたらしい。

拜啓其後は御無音申上候。さて、藝術座復活劇の件、本月初旬、仙臺までは參り候へども、十日の帝劇開演稽古の必要上、一旦引返し申候ため、途に御地に參ることを得ず、殘念に存申候。其内には、是非出向度、計畫いたし居り候間、何卒、宜敷御願申上候。十月末の帝劇は、クレオパトラといたし申候。之は、小生が沙翁のを改作いたし候ものに御座候。先は右まで。匆々不一。

十月十五日　　島村瀧太郎

後藤老兄　几下

例の藝術座専用の書簡箋と封筒をつかつてある。抱月君の此の仙臺行の際には、登張竹風、土井晩翠二氏の主催で、十月三日、在仙の學者文士等の抱月歡迎會が開かれた。松島五大堂の寫眞葉書の寄せ書を私に送られたのである。竹風氏の筆で「抱月君と會飲、君無きが殘念」竹風。「久々にて竹風、晩翠諸兄と會飲して、」島村生、とある。この際のことであらう。須磨子と相携へて臨席し、少々來會者を驚かした、といふのは。最近、竹風氏の談話が『文藝春秋』に見えたので知つたことではあるが。これより先、抱月君は明治四十二年二月十四日、仙臺の講演に招かれ、登張竹風、片山正雄二君と合作の繪葉書を私に贈られてゐる。この大正三年の十一月六日の消印ある、須磨子がサインした、クレオパトラに扮装の寫眞繪葉書が、抱月君から贈られてある。右手に鎗をつき、左

に栖をとり、白毛の兜を戴いて武裝した女王の驕慢の氣に滿ちた立姿である。これは大正三年の帝國劇場に上演の藝術座一派の最盛期のものであつたであらう。當時の須磨子の心持は、或は此のクレオパトラに讓らぬ自負心に燃えて居たのでは無かつたか。

私は大正四年四月、資金缺乏で經營困難のため『秋田時事新聞』社を辭して、故郷の六郷町に退隱してしまつた。丁度、この年の八月、抱月君は一派を率ゐて、秋田市の劇場に乘込まれたのである。左の書簡は此の時、私に見物するやう勸めに來たけれども、行かれぬ事情を申送つたのに對し贈られたものであつた。

拜復、其後は御無音申上候。御近狀如何哉と存居候。御住所は、昨日此地に參りて承り、此地より左まで遠からぬ所と承り是非一度御出秋を乞ふか、小生が一訪いたすかして、拜眉いたし度と存候所に御座候。近頃は著述中の由承り候が、御寸暇も有之候はゞ、當宿へ御一泊の御つもりにて、御出向如何に候や。小生、或は片道三四時間と申せば、一日がゝりの故、參上の餘暇無之かと存じ候間、御都合如何。御老母さま始め、御家内皆様、御健康に御座候哉。御伺申上候。先は不取敢、右まで。匆々不一。

八月廿七日　島村生

後藤老兄　几下

この書面は、秋田市の石橋旅館止宿中に送られたものであつたらしい。この頃は、藝術座事務所

及び藝術倶樂部は、既に牛込横寺町九番地に新築されて居つたのである。その後、臺灣や、九州地方の巡業先からも、書面を貰つたやうに記憶するが、今は見えない。大正五年十月九日付の葉書が、私の手許に現存してゐる、抱月君の筆蹟の最終のものである。私が猪苗代湖畔の舊宅に滯在中、何かの機會に音問を通じた折の返事である。帝國劇場上演の『アンナ・カレニナ』のオプンスキー家書齋の場の寫眞の裏に、「久々の御たより難有拜見いたし申候。目下は又々淺草にて開演致居り、此月末よりは、京坂へと、殆ど寧處無きていたらく、御憫察被下度候。」とつゞけ、東京牛込横寺町九番地、島村生。」と署名してあつた。東行西走に寧日なく、困憊の狀が目に見えるやうにも思はれる。

大正七年十一月五日、抱月君は流星の隕つるが如く急に歿してしまひ、次いで、程なく松井須磨子も自殺を遂げてしまつた。此の時、在仙臺の登張竹風君から、電報が私の手許に飛んで來た。「島村抱月は日本一の色男だ」といふだけのものであつた。ちよつと驚かされた。抱月君は、好んで、斷崖に通ずる道を選んで進んだのであるから、餘り多くの悔恨は遺さないであらう。「抱月」の號は蘇東坡の「前赤壁賦」から取つた事實は、何人も知るところであらう。が、彼は、また東坡の「薄

薄薄酒二首」を常に愛誦して居つたといふ事は、餘り多くの人は知るまい。……珠襦、玉柙、萬人相送つて北邙に歸す。如かず、懸鶉百結、獨坐して朝陽を負ふには。生前の富貴、死後の文章。百年、瞬息にして、萬世、忙はし。夷齊、盜跖、倶に亡羊。……机に凭つて微吟する彼の寂しい、低い聲が、まだ耳にあるやうにも思はれる。そして、これが彼の短命の讖をなしたかのやうに思はれる。

大正十四年七月、講演旅行に秋田市へまはられ、序でに、私の町にも來られた巖谷小波氏は、小學校で講話を終つた翌廿一日に、拙宅を訪はれ、東京の文壇の近況について、お話を色々せられた末、つい故抱月君の事にも及ばれ、「先年旅行中、東北本線のどこかで、偶然須磨子一座を率ゐて、旅興行にゆく島村君に遇ひましたがね、ひどく疲勞してゐる樣子が見えましたから、ちよつと注意して置きましたが、たう／＼若死をしてしまひましたね。全く惜しい人物だつたが……」といふ話をされた。彼は本來蒲柳の質であつた上に、惡戰苦鬪の末、身心の困憊によつて夭折したものであつたかに思はれてならない。それが本望であつたかも知れないけれども。もう十七回忌も過ぎてしまつた。（昭、十、一）

二〇、文藝革新會—雨聲會

—革新會の急先鋒—春潮、孤嶋、——同會の主張起草者臨風—發會式と講演會—各地方に於ける講演旅行—西園寺侯の雨聲會—紅葉館の招待會—大正五年の最終の雨聲會—

明治四十二年四月二十四日、神田一ツ橋學士會事務所に於いて、文藝革新會の發會式が擧げられた。發起人總代として、當日の幹事、樋口龍峽氏から、此の會設立の趣旨を説明し、やがて協議の末、左の規約を定めたのである。

一本會を文藝革新會と名づく
一本會は學士會事務所を以て會場に宛て、毎月一回第一金曜日開會す
　但し臨時會又は大會を開く事あるべし
一本會の目的を達せん爲め、左の事業を行ふ

一、中央及び地方に講演會を開く事
一、文藝上の時事問題を攻究する事
一、内外の著書の研究及び批評
一、適宜の方法を以て研究の結果を發表する事
一、著譯書の出版

その他、附帶の決議を擧げ、食堂に入りて、三宅雪嶺博士を始め、登張竹風、笹川臨風、樋口龍峽、小山東助、國府犀東、後藤宙外諸氏の卓上演説あり、更に會場に立ち戻り、昇曙夢、高須敏徳兩氏の講演を終つて、會を閉ぢたのである。當日は、右の人々以外、林田春潮、若月紫蘭、中島孤島、泉鏡花、瀧村斐男、大野酒竹、田口掬汀、寺田有秋、山田枯潮、その他の數名の參列があつたのである。

これより先、文藝革新會の趣旨のあるところを明かにする爲め、同會發起人の連名で、「主張」なるものが、左の如く發表せられた。

惟ふに現代の日本は、高遠雄大なる理想が、新なる文明の下に、實現せられんとする途上にあり。從つて、吾人の文藝は光明ある新時代の精神を基礎として、人生の爲にせる文藝たらざるべからず。現代英雄的日本の要求は、剛健なる思想と、清新なる趣味との鼓吹にあり。至醇たる新思想の建設にあり。生命ある新技巧

の發揮にあり。眞摯なる人生の新價値を認むるにあり。文藝革新の機運は、今や方に熟せるに庶幾し。吾人同志の士は時代の要求に應じ、此機運に乘じて、沈滯せる局面の轉回に、一臂の力を效さんことを期す。

明治四十二年三月　　　文藝革新會

發起人　林田春潮　登張竹風　小山鼎浦　中嶋孤嶋　栗原古城　後藤宙外　姉崎嘲風　齋藤野の人
佐佐醒雪　笹川臨風　樋口龍峽

かう云ふ風に形をとゝのへて、此の會の出現するまでには、多少の徑路を經て來たものであつた。世間では、此の會の發起者の中でも、私などが、主謀者の一人であると見られてゐたやうである。左樣に見られても、今更、回避も辯疏もする必要もない。が、眞の主謀者は、寧ろ當時、世人の氣のつかざりし方面に存在して居つたのである。即ち林田源太郎（號春潮）中島茂一（號孤島）の二君が、笹川種郎（號臨風）氏を動したことが、この運動の第一の發軔であつたかのやうに考へられる。この事實は、或は當事者以外には、現在に於いても、眞相は知られずにゐるであらう。當時この事に關係した諸君の書翰を公開して、――御迷惑にならざる範圍に於いて、――その實情を明かにして置きたいと思ふ。

この問題の起こる少し以前、私は、明治四十一年十一月末、相州鎌倉の僑居を引き拂つて、東京市[illegible]

榎町一丁目五十九番地に轉居したのである。その頃の借家通帳が保存されてあるが、家賃一ケ月金拾七圓であつた。然るに現在の東京に於ける事情と、當時の私の此の借家とを知る或人の話では、今日ならば、約五倍の金八十五圓内外に取られるであらうと。僅か三十餘年間に時勢の激變したのにも驚く。何かの資料にもと考へ、餘計なことではあるけれども、書いて置く。同四十三年の一月末には、この二本榎町から本郷區駒込動坂町三百五十四番地に移つた。この借家賃は金拾五圓也。ついでに、明治三十年三月十日に牛込區神樂町二丁目十四番地に丁酉文社を置いた時の私の借室賃は、金五圓五拾錢で、六尺三寸の床間十疊の書齋兼客室と六疊の茶の間、長四疊の書生部屋、二疊の取次が備はつて居りました。

明治四十二年二月二十二日付の中島孤島君から、芝區二本榎の私宛の書面に、

　拜啓昨日は失禮致候、あれから小杉氏（天外）を訪ひ、御紹介の謁見所にて、瓦斯ストーブを圍んで氣焔を聞いて來た。ビールも出たが、兒玉（花外）が大に堅くなつてしまつたので、ウイスキーまでは言ひ出さなかつた。五六年振りで會つたのだが、成程、住居も堂々たるものであるが、態度も堂々たる一流の大家に背かずと、大に感服して歸つた。

　其節の會（文藝革新會）の話については、兎も角、笹川（臨風）。林田（春潮）。木村（豐二郎）あたりの三四人を發起人として、先づ發起人相談會をやつて見ては如何か、と思ふ。何れ、文壇のもの、文壇以外のもの新聞雜誌の關係者中より適當の人を吸收せねばならぬものなれど、最初は中心になる四五人のもの、及び其の深き知己だけに止めて置く方が得策ならずや、と思ふ。其の中には、種々の發展策も、對抗策も見つかるべし。御高見如何。

二十二日　　　　孤　嶋　生

宙　外　兄

とあるので、此の運動の中心は、何れにあつたかゞ、大體、想察し得るであらう。

同年三月二十三日付の笹川臨風氏よりの左の書信には、前掲の文藝革新會の趣意書、即ち所謂「主張」の原稿を封入して、私に遣はされたものであつた。

拜啓、先夜は失禮仕候。別紙、中嶋君（孤嶋）より御發申すべきやうとのことにつき、差出申候。昨日、右草案は林田君（春潮）の方に回送致置申候。匆々。

三月念三　　種　郎

宙外大兄　研北

これで、趣意書の執筆者は、笹川臨風氏であつたことが明瞭になる。孤島君の三月三十日付の書翰の一節にも、

前略）中島君の「主張」の件は、笹川君（臨風）に御依頼致し置候。同氏より御返事を差上げる筈になつてゐる。今日、林田君（春潮）から來月初旬、會合したいといつて來たから、大賛成で、林田君に今度は會場、時日等の取きめを一任するやう、返事致し置候。何分とも宜敷、打合せの上、決定していたゞきたい。（下略）

三十日　　孤　嶋　生

宙　外　兄

此の書翰は、革新會の趣意書、即ち「主張」が既に臨風氏より私の手許に達してゐたことを、福島君は未だ知らず、その事を云つて來たのである。「來月初頃會合」云々は、革新會の發會式を擧げることを指すものと見える。それが希望通りに初旬にやるやうには準備が出來ず、四月二十四日に到つて、漸く發會式を實現したものであつた。

笹川臨風氏より四月四日付で、此の件に關して送られた書翰に、

拜復、春意大に動き申候。さて○○君入會の件、御快諾なされては如何に候や。此際、多少の清濁は丼せ呑む方よかるべきか、と愚考致候。撰嫌(えりぎらひ)は會の爲に非常の不利益と存候間、御快諾有之度ものに御座候。今月は愈々發會の義と存候。有力なる多數同志を糾合して、花々敷致度ものに御座候。御賢慮被下度候。三越三階の六角堂内に、無數の極込(きめこみ)人形陳列に御座候。垂涎三尺の品多々、佇立久之致候。既に御覽相成候哉。拜芝萬縷。

四月四日夜　　　種　郎

宙外詞兄　研北

右書中の人名は憚りて闕字としたのである。以上掲げた書面の往復により、同會發會式に到るまでの内情は略ぼ窺知するに足るであらう。

文藝革新會の實際の爲事としては、第一には、例會、大會、臨時大會等の會合で、その次は中央

及び地方に講演會を開いたことで、その三は、會誌發行の計畫であつた。が、これは實現せずにしまつた。

會合としては、今、私の確かに承知してゐるだけを擧げて見ると、明治四十二年四月二十四日の學士會事務所に催した發會式を始め、同五月二十一日、神田美土代町青年會館に於いて、例會を開いた。また同年六月六日、神田一ツ橋學士會事務所に於ける例會。次に同年七月九日の京橋區八重洲町中央亭に於ける臨時大會。この際の幹事は小林愛雄、守田有秋、笹川種郎の三氏であつた。同年九月十七日には、麴町區富士見町富士見軒に於いて例會を開いた。それから、同年十月二十九日には學士會事務所に於いて例會を開き、席上、數名の講演があつた。翌四十三年四月十日には京橋區八重洲町中央亭で、春季大會を開いたのである。その以外にもあつたやうに思ふが、今は明かに記憶せないのである。

講演會としては、中央に催されたのは、明治四十二年五月二十一日、神田美土代町青年會館に於て、第一回講演會を催し、小山鼎浦氏の開會の辭、高瀨火海氏の「文士と修養」中島孤島氏の「文藝至上主義を排す」笹川臨風氏の「明治趣味」後藤宙外の「無準備の破壞思想」樋口龍峽氏の「文

藝革新とは何ぞ」登張竹風氏の「ハイネとニイチェ」佐々醒雪氏の「肉慾文藝」姉崎嘲風氏の「哲の意義」を始め、この外歡迎の意味で、來賓の湯原音樂學校長の「文藝と音樂觀」三宅雪嶺博士の「文藝革新について」井上巽軒博士の「所感」の演説があつた。

地方主張の同會の講演は、四十二年八月十六日、遠州濱松町青年會の招請により、同地小學校講堂に開いたのが最初で、講師は姉崎嘲風博士、樋口龍峡、後藤宙外等であつた。此の時は、十五日に東京を出發して、其の夜、濱松の某旅店に一泊した。その翌十六日の朝のことである、嘲風博士は衣裳を着換へる時のことであつたらしいが、古々しい擦り切れた胴巻を如何にもなつかしさうに眺めて、撫でまはしながら、「この胴巻は僕が故鄉（京都）から東京に始めて出て來る時分に、母から旅費を入れて行くやうにと、貰つて締めたのが始めで、それから何處へ行くにも、始終、離さずに締めてゐる。思へば、隨分長く保つもんだね。」としんみりと述懐された。かねて同氏の親孝行で有名なことは聞いてはゐたが、成程と感心させられてしまつた。そして學者らしい質素無頓着にも驚かされた。やがて同地の學僧某が尋ねて來て、嘲風博士は比較宗教學で名高いからでもあつたらう、『法華經』異本の話を持ち出した。すると博士は、問ひに應じて、早速、普通のはかう、異本の

方はかやうと、坊さんが讀經するやうに、朗朗と、かなり長い一節を背誦したものだ。そこで、件の學僧も忽ち兜を脫いで、引きさがつたものである。此の日、講演を終つてから、慰勞といふ譯で、主催者側の內田正、大橋精一兩氏等の案內で、舞阪の辨天嶋に在る花屋別館で懇親會が開かれた。そこは濱名湖の一嶼の松林の中に建てられた瀟洒たる別莊といふべきものであつた。

背景はよし、酒はよし、といふ譯で、宴會の參列者は悉く去つても、姉崎博士は容易に盃を捨てない。靑年會幹事の大橋精一氏たゞ一人最後まで踏み留つて、お相手を勤めたものだ。博士はいよいよ酒仙の本領を發揮して、夜が追追とふけて、三更となり、四更となつても、一向、興の盡くるを知らぬといふ超絕ぶりであつた。私達は、かねて其の事を聞いてゐたので、早く室へ退避して、寢に就いたのである。が、隣室の談論風發にまじる折々の哄笑には夢を破られた。翌朝になつて見ると、流石の兩豪傑も相討のていで、倒れてゐた。大橋氏の如きは、餘程の苦戰であつたと見え、向ふ鉢卷の大鼾で、前後不覺の狀であつた。朝飯の膳に向つた際、受持の女中の話では、昨夜、一時になつても、二時になつても、二雄は酒を汲み續けて、止めさうにない。あきれ果てゝ、宿の者はいくら手が鳴つても知らん顏で、火を落として寢てしまつた。そこで、酒を探しに、臺所へ兩雄

みづから出張して、方々歩きまはしたが、到頭見つからずにしまつた。已むを得ず、盃を捨てゝ杜に就いたといふ次第であつたといふ。件の女中は、両雄の顔を見て笑ひながら、「あなた方に見つかるやうな所にお酒は置きやアしませんわ。穴蔵にしまつてあるので御座いますよ。」と罵倒したものである。『法華経』の難問は手早く排し去つた流石の博士も、これには頗るあしらひかねたと見えて、黙笑したのみであつた。

四十二年九月十二日には、宇都宮市壽座に於いて、文藝革新會の地方講演會の第二回を催した。笹川臨風、後藤宙外、登張竹風、泉鏡花、姉崎嘲風、樋口龍峽諸氏の講演あり、聽衆満堂。後、夜に入りて、八百駒本店に於いて、市長、聯隊長以下、同市一流の諸名士五十餘名より招請の歡迎會に列した。

明治四十二年十一月には、文藝革新會の關西講演旅行があつた。一行は泉鏡花、笹川臨風、樋口龍峽、小林愛雄、瀧村斐雄、本多嘯月、それに拙者を加へて七名。十八日に東京を出發して、先づ伊勢の山田に向つた。確か講演會の主催者は度會郡教育會であつたかと思ふ。我々の一行は、十九日午前に、はやく山田驛に下車、同地の有志の出迎で、二見ケ浦朝日旅館に旅裝を解いたのである。

この時、山田名產赤福餅本舗故濱田種三氏が、特に我々の歡待斡旋に遺憾のない厚意を發揮したものであつた。同日は休養といふ譯で、一行中の泉、笹川、樋口、後藤、本多の五人、伴を連れて志摩の鳥羽港に遊び、日和山に登臨して、島々の絶景を賞した。東京の宅に送つた當時の繪葉書がある。志摩の岡崎の寫眞に、

　帆柱も大根ゝ立てり鳥羽の浦　　　鏡花

　散紅葉かと見れば白帆の小舟かな　　　臨風

また鏡花君の二見ケ浦にてよまれた句に、

　烏帽子きて稲かくるたり神の松　　　鏡花

二見ケ浦、角屋旅館の寫眞葉書に、但諦が雅健な筆でかいてある。

蔦がからんだ青竹柱、月がさしこむ、さも侘住居、二人して聽く山杜鵑、別れのつらさ。

　十一月二十日　　　臨風生

その裏にも同君の筆で、

うき世はなれて奥山住居(すまゐ)、戀もりんきも忘れてゐたが、鹿の啼聲、聞けばむかしが戀しいわいな。　　　臨風

他の同館玄關正面の繪葉書に、

峯のしら雪ふもとの氷、今は互にへだてゝ居れど、やがて嬉しく、とけてながれて添ふのじやわいた。　　　鏡花

此の一行中に四十歳を越えた者は私だけで、他の諸君は、悉く三十代の男盛りであつたし、その上、いづれも水入らずの親しい同志であつたから、かなり彌次喜太氣分が横溢して居つたかに思はれる。當時の鏡花君は、右の「峯の白雪」の唄が非常にすきで、醉ふと之れを愛誦しない事はない程であつた。柳川春葉君などは、鏡花君の別號でゞもあるかのやうに「今日途中で峯の白雪にあひましたよ。」といふ調子で、「峯の白雪」を泉君の綽名にしてしまつた時代もあつた位だ。

五人一行の者が、鳥羽見物から二見へ歸つて、跡に殘られた小林、瀧村の二君と一緒に、此の夜は角屋事、朝日館に一泊したのである。

翌二十日には、早朝、濱田種三氏の案內で、宇治山田市に歸り、內宮に參拜、山田有志が我等一行の爲め、お神樂の獻納があつたので、一同それに列し、終つて外宮に參拜の後、五二會ホテルに入つて晝飯をすませた。やがて度會郡役所にゆき、田岡嶺雲氏の叔父さんに當る方だとかいふ、郡長さんに敬意を表し、度會中學校の講堂の講演會に臨んだ。そして、小林、瀧村、樋口、泉、笹川の諸君が熱辯をふるひ、拙者も一席雜感をのべて、御挨拶に換へたのであつた。講演を終つてから五二會に投宿した。この夜、戸田屋に慰勞の宴が催されたのであつたが、宿に歸つてからも、上口

當は再び酒を汲みかはしたのであつたかに思はれる。一同寢に就いたのは十二時過であつた。然るに、二十一日の朝、夜の白らむ頃、大騷動が起つてしまつた。誰いふとなく、本多嘯月君が二階から墜落して死んでしまつた、といふのである。「どこだ」！「どこだ」と二階の雨戸を繰つて見ると玄關前で、誰かに介抱されてゐる人影が見える。一同そこへ駈つけると、確かに本多君は玄關の上に、どういふ風に玄關の家根に躍び出して落ちたものか、墜落した際、何處かをひどく打つたらしい。けれども、何處が痛むのか、どうして落ちたのかも分らない。二階の欄干は四尺も高いのだから、それを躍(と)び越えて家根へ出なければならんし、殆ど墜落した徑路も、わけもわからなかつた。兎も角、室内に移し醫者に來て貰つた。診察の結果、一二週間で全快するであらうとの事で、やつと安心した。腰の邊を打つたものであつたらしい。當人も至極恐縮してゐるので、何も尋ねはしなかつたが、今もつて何うして、何の爲めに、玄關の屋根などに躍び出して落ちたものか、不審は終に解けずにしまつた。鏡花君の説では「今夜は全く魔がさしたんですよ。通り魔の術(しわざ)でせう。私と竝んで寢てゐた瀧村君の顔が、怪物(ばけもの)に見えた位なんですからね」と云ふのであつた。もう本多君が歿してから、二十餘年にもなららうか。この講演旅行の準備、その他で、同君の斡旋するところ勘な

からずであつた。此の災難のため、當惑したけれども、豫約の日程が決してゐるので、滯留もならず、本多君の事は、鶴と宿の人々に頼み、相當の手當をして、跡に殘して靜養さして貰ふことに取きめ、我々は山田を出發することになつた。然るに、東京から電報があつて、姉崎嘲風博士が、此の度會郡教育會の講演に參加する考へで、今日夕方に山田驛に着くといふのである。日取を一日考へ違ひせられたか、或は通知した方が間違つてゐたか、兎に角、一日遲れて來られることになつた。そこで、我等の出發後へ着かれては、甚だ禮を失することになるといふので、夕方、停車場に出迎へ、主催者側に紹介をすませてから、明日、博士單獨の講演をして戴くことになつた。そこで我々の一行は汽車で出發。桑名驛で下車。停車場から桑名町まで、かなり長い丁場を車にゆられ、揖斐川の河口に沿ふ船津屋に一泊したのである。いふ迄もなく事件の筋は全く無關係ではあるが、當時の桑名の夜景は鏡花君が、此の翌月―四十二年の春―に起草されて、翌四十三年の一月號の『新小說』に揭げられた『歌行燈』に目に見るやうな逼眞な描寫をして居られる。

鏡花君の『歌行燈』には、船津屋を湊屋としてあるし、座敷の額は、題して曰く臨風傍可小樓としてある。けれども、これは、故意に少し變へたものであらう。實際は十時梅崖の書で「臨風小可樓」であるといふ。昨年二月七日付の書面で、臨風氏から示敎せられた。

思ひ出のたねにもならうか、鏡花君の寫した當時の桑名の夜景のくだりを少し引いて見よう。

「湊屋だよ。」「おいよ。」で、二臺、月に提灯のあかり黄色に、廣場の端へ駈込むと……石路をかた〳〵したがら、板塀の小路、土塀の辻、捷路を縫ふと見えて、寂しいところ、幾まがり。やがて二階屋がたて續き、町幅が絲のやう、月の光を廂で覆ふて、兩側の暗い軒に、掛行燈がまばらに白く、枯柳に星が亂れて、壁の蒼いのがところ〳〵。長い通りの突當りには火の見の階子が、遠山の霧を破つて、半鐘の形いけるが如し、……火の用心さつさりやせう、金棒の音に、夜ふけの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達は宵寢と見える。寂しい新地へ差掛つた。

幅の下に流るゝ道は、細き水銀の川の如く、柱は黒い家のさま、恰も獺が祭禮をして、白張の地口行燈を掛連ねた、鐵橋を渡るやうである。

我々は揖斐川の河口に臨む臨風小可樓の額のある座敷に通され、いづれも心持よくくつろひで、晩餐の膳に就いた。名物の燒蛤を賞味して、酒のいける人達は、旅愁を拂ふ盃を呼ぶのであつた。鏡花君は程よく醉がまはつて、女中からの只今の傳授を速座に應用に及び、蛤の殼の裏を、ちよツと指頭でくすぐる。と、奇妙に貝柱がコロリと取れる。その不思議を面白かつて、幾度も、いくども、蛤をくすぐる。その飄輕な身ぶり態度に、一座、興じて笑ひどめいたものであつた。當時、桑名から東京の拙宅へ送つた木曾川鐵橋遠望の寫眞繪葉書に「眺恩樓」の朱印のあるは船津屋のこ

とであらう。これに、

蛤のやかれながらに時雨れけり　　臨風

冬の月焼蛤の二階にて　　鏡花

とかうものされてある。

この家を眺望楼といふのは、或は遠眺、遊憩共によい所であるの意であらうか。桑名は古へより四方の游子、輻輳の要津であつた。翌朝、二階から見はらせば、揖斐川の河口につゞく伊勢湾の長汀曲浦、遙かに、知多半島の翠黛を一眸に收むる風景である。晉の羊祜が、峴山に登つた時の、感慨の口眞似ではないけれども、宇宙ありてより此の游あり、由來、賢達、勝士、こゝに登りて遠望する者も多かつたであらう。が、悉く湮滅して聞ゆるなし、人をして悲傷せしむ、とも云ひたい感じが、むら／＼起るのであつた。佳境に對しては感傷を發するは、自然ではあるけれども、興亡、百變すれども、萬有、法爾として、おのづから閑なり、といひたいには、當時、私どもの年が餘りに若かつたのである。

臨風氏が此の時のお話に依れば、氏が中學時代には、嚴君が地方官を勤めて、岐阜の縣廳に居ら

れた關係から、暑中休暇などには、東京から御兩親の膝下へ歸省の往復に、幾回ともなく、此の船津屋に泊まられた思ひ出が多い、と感慨無量のていで語られたのも、つい昨日のやうにも思はれる。

二十二日の朝、桑名を出發して、三重縣員辨郡大泉原の講演會に赴いた。一行六名、いづれも數里の田舍道を人力車にゆられながら、初冬とはいへ、春のやうな和暖な好天氣に惠まれたのであつた。一同いづれものび〳〵した旅心地であつた。鏡花君の如きは、懷中より聖書と稱して、『膝栗毛』の古本、第五編を恭く取り出し、車上に立ち上つて、彌次郎兵衛が同作の喜多八にはぐれた伊勢山田のくだりを開き、咳拂を一つして、「もし此の邊に棚からぶら下つたやうな宿屋はござりやせんかと、賑やかな町の中を獨りとぼとぼと尋ねあぐんで、もう落膽しやした……」と捧げ讀むのである。

それを見て他の嬉しがるのには一向無頓着に、「當人至極すましたもので、「これは少々內證ですがね、內宮樣へ參る途中、古市の藤屋の前で、先度はいかいお世話になり申したといふ氣で、略儀ながら、車の上から、お辭儀をして參りましたよ」などゝ大まじめで笑はせたものである。愉快で、暢氣な旅行であつたことも想像されるであらう。——此等のことは少し變へて、同君作の『歌行燈』の中に取り入れてある。

大泉原は郡役所の所在地で、主催者は員辨郡教育會であつたかと思ふ。小杉、瀧村、樋口の諸君の講演が終つて、鏡花君の順番になつたけれども、同君の羽織袴を收めた鞄が迷子になつて、いくら氣を揉んでもなか〳〵着かない。いよ〳〵登壇となつたので、已むを得ず、拙者のを――行(ゆき)たけの合はぬ代物(しろもの)なれど――急場しのぎに御用達申したといふ次第。身にあはぬ羽織を氣にしながら、得意の快辯をふるつて滯りなく無事にすまされた。が、口の惡い仲間は「それ『膝栗毛』に祟られましたぞ、彌次さんの代りに、鞄にはぐれるとは、これは新趣向だ」なぞとからかつたものである。次いで、拙者も何か一席お茶を濁して、殿(しんがり)は笹川臨風氏であつたかと思ふ。大泉原の記憶は、茶と杜松の盆栽が名産のところであつた、といふ以外には、何も遺つて居らぬ。

同地の講演を終つて、大急ぎで何處かの停車場から汽車に乘り、この夜は名古屋市に一泊。翌日東京から新たに俳人醫の大野洒竹氏が來て、一行に馳せ加はつた。所が、我々の泊つた宿は、土地で第二流であるとか云ふので、洒竹氏は勝手に上段の間に床柱を脊負つて、大あぐらで、睥睨しながら、「苟も東京の名士を招待するのに、一流の旅館に案内しないのは無禮だ、」なぞと罵倒するので、主催者側に對して、氣の毒でたまらなかつた。いよ〳〵劇場に乘り込んで、一行の講演となつ

た。酒竹氏の番になると、散々な大脱線をやり、猥雜至極な艶話を長々とつゞけるので、縣の警察部から、講師に警告せよ、早く止めないと、中止の嚴命を下すかも知れぬ、と頻りに電話が來るといふ騷ぎである。けれども、兎も角、無事にすんだのであつた。樋口、笹川兩君の如き能辯家がゐるから、拙者などはどうでもよからうと油斷して、再三同じ事を繰返すのも面白くない、といふ不料簡から、腹案なしに、一寸とした思ひ付きを種にして辯じ出した。が、自分ながら、何を云つてゐるのか、わからぬ程の始末であつた。冷汗を拭き切れずに、やツと壇を下ると、小林愛雄君が樂屋裏から私を迎へて「君！今日はどうしたんだい。滅茶苦茶だつたぢやアないか。」と正直な批判だ。私は偏へに恐縮してしまつた。

二十三日は發起人有志の歡迎會があつて、後に衆議院の副議長になられた小山松壽氏が、特に斡旋に力められたものであつた。そして、二十五日になつて歸京したものである。文藝革新會の活動に依つて、思想界に如何なる影響があつたかは局外者の御判斷にお任せする。私等も實のところ其の點に就いては多く知るところが無かつた。

雨聲會

明治四十年六月中旬、私は會津猪苗代湖畔の蝸廬に住んでゐた時である、時の首相西園寺公望侯――後の公爵――の書簡を受取つた。新聞報道で、西園寺首相が、文士若干名を招いて、一夕の款談を試みようとの計畫のある由が見えてゐたので、確かに其の事であらうと、直ちに察しられた。讀むと、其の通りで、實に鄭重な辭句をつらね、多忙ではあらうが、一夕、諸君と款晤したいから、繰合せて出席せられるやうに、との趣意であつた。神田駿河臺の侯爵の御本邸まで來る十七日午後五時に御來臨云々といふことも添へてあつた。

この招待に應じて、私は會津から東京へ出かけたのである。丁度、梅雨の頃で、毎日の霖雨に惱まされる時節であつた。駿河臺の同邸奥の客室に集まる者、幸田露伴、森鷗外、巖谷小波、塚原澁柿園、內田魯庵、廣津柳浪、川上眉山、島崎藤村、泉鏡花、小栗風葉、國木田獨歩、德田秋聲、小杉天外、大町桂月、田山花袋、柳川春葉、及び拙者の十七人で。坪內逍遙、夏目漱石、長谷川二葉亭の三大家は、招待を受けたけれども、都合あつて出られなかつたと云ふことであつた。新橋美人

の斡旋で、美酒佳肴の開宴となり、席上、侯のお望みで、來者の全部が各自の流儀で紙の上に筆を走らせたのである。この會を以後、繼續したいから、何か會名を選むように、との侯の發案があつた。丁度、私の隣席に居られた廣津柳浪君は「雨聲會はいかゞ、」と申し上げた。侯は之れを承けて、成程、某の詩に雨聲云々といふのがあるから、「雨聲會がよからう、」と云ふことに忽ち決したのである。烈しい雨の聲が絶えず聞えてゐたところから、柳浪君が思ひついたものであつたらしい。と思つてゐた。が、その後、同君に聞いて見ると、「單に雨聲を聞いたからといふだけではなく、杜甫の詩に「雨催」詩」といふ句があるし、文士の會でもあり背景にもピッタリするからと思つてね、」と云ふのであつた。同邸の庭は當時雨中にけむる青楓が、遠く、斜につづいて、如何にも山村の趣致があつてよいと思つた。今もその印象が頭にのこつてゐる。

雨聲會は、此の時から、大正五年四月までの間に、六回ほど開催されたのである。今、年月日と場所とを左に表にして掲げる。

（一）　明治四十年六月十七日　　　駿河臺侯爵邸

（二）　同　　年十月十八日　　　紅葉館

（但し、この時は、會員の主催で、西園寺侯を御招待したものである。）

（三）明治四十一年五月二十七日　築地　[illegible]屋

（四）同　四十二年六月十六日　濱町　常盤屋

（五）同　四十三年十一月二十五日　濱町　常盤屋

（六）同　四十四年十一月十七日　濱町　常盤屋（？）

（七）大正五年四月十八日　濱町　常盤屋

右の中、第三回目頃には、既に眉山、獨歩が歿した後で、補缺として江見水蔭と永井荷風の二氏が擧げられたが、水蔭氏は辭したのであつたといふ。

第六回目の當番幹事は、内田魯庵、田山花袋の兩氏で、此の兩君からの豫報の葉書は今も私の手許に保存してあるが、正式の侯爵家からの招待状が見えぬので、場所だけは明かではない。しかし多分濱町の常盤であつたかと思はれる。

大正五年四月十八日の最終の雨聲會には、私は既に秋田の鄕里に退隱後のことであつたので、お招ぎには預つたが、出席することは出來なかつた。その代りといふ譯ではないけれども、後の思ひ

出の料にしたいといふ考へから、當番幹事の巖谷小波氏にお頼みして、別に掲げる寫眞のやうに、當日出席の皆樣に御揮毫を願つたのである。

右の七回目、即ち最終とも云へる雨聲會の詳細の記述が、某新聞の切抜に依つて保存されてある、今それに據つて當時の狀況を偲びたい。その記事は次の通り。

風流宰相の名を謳はれた西園寺侯（今の公爵）の文士招待會は、去る明治四十四年以來、久しく中絶されてゐたが、雨聲會の名に背く春も朧の月さゆる四月十八日の夜、五年ぶりで濱町花屋敷の常盤で開かれた。當日參着の先登は幹事役の巖谷小波氏で、六時過ぐる頃には主人役の侯爵が例の二つ巴五つ紋の羽織袴の裝ひ、悠然として自動車を乘着ける。そのすぐ後からフロックコート姿の横井時雄氏が入つて來た。續いて田山花袋、泉鏡花、永井荷風、小杉天外、塚原澁柿園、柳川春葉、内田魯庵、竹越三叉、齋藤實男(後の子爵)等が、いづれも羽織袴で參會する。小金井の花見がへりの一杯機嫌で、大町桂月氏はおくれ馳せに飄々として參ずれば、最後に森鷗外氏が今は官を去つて閑生活に入つた故か、珍らしく和服姿で乘りつけた。

招客十三人の顔が揃ふと、やがて一同は二階廿四疊の大廣間の設けの席に居ならぶ。床には應擧筆の花鳥圖

二幅對の軸を掛け、古銅の花瓶に木瓜と白百合とが活けてある、床を背にした上席には齋藤實男、次に鷗外、澁柿園、小波の順に居ながれ、左側には、魯庵、花袋、春葉、天外、横井。それに對して右側には、桂月、鏡花、霞風、三汶、侯爵といふ順序の着座で、やがて築地[illegible]家の女將がわざ／＼新橋から選りぬいて引率した美妓桃太郎一派の長唄、新曲「鳥羽の戀塚」が餘興として演ぜられた。侯を始め何れも謹聽して暫くは其の美音に醉うた。春の夜とはいへ、美くしく澄みわたつた滿月が、前栽の木々の葉を洩れて銀砂をまく。衣を襲ね月に歩して花影を踏む、婀として流水の青蘋を涵すの趣致があつた。箏曲が拍手の中に終ると、侯の所望で、再び小三郎の「越後獅子」が唄はれた。郷里秋田に引込んでゐる後藤宙外氏の許から「盧會を亂す、春雨の音に都の友を思ふ我がみちのくは梅も咲かねば」といふ電報が來た。尾州半田に居る小栗風葉氏からも「風葉は花なき里で早寢かな」と心細い電報が屆いた。一座の人々は今宵の宴に連なることの出來なかつた宙外、風葉、柳浪氏、並びに海外に在る島崎藤村氏に宛て、それ／＼自署の葉書や半切を送つた。

酒は廻つて、今宵は宙外氏の脫線的追分を聞かざるが怨み多く、醉つた桂月氏の詩吟の出ないのも何となく寂しく感じられた。澁柿園氏は鰻料理の通を一人で振りまはし、陶庵侯は葡萄酒のコツプを擧げて頻りに舊い旅行談を試みられた。斯うした夜は次第に更けて、興はなか／＼盡きない。やがて膳が下げられる。用意の筆墨が運ばれて吉例の寄書に移り、鷗外氏を先鋒に思ひ／＼の詩句が書きなぐられた。

枯魚過河泣。何時悔復及。作書與魴鱮。相教愼出入。　鷗外高湛

十歳更登舊酒樓。哀絲豪竹惹春愁。當時意氣依然在。滿座唯看白頭翁。　桂月

よこしまに足を投げけり春の宵　天外

女の盛りなるは十四五六歳、廿三四とか卅四五にしなりぬれば紅葉の下葉に異ならず

梁塵抄の内より　花袋

紺地に茶の竪縞の一枚小袖、緋の紋縮緬の長襦袢、共に對丈けにして袖長し、極薄いクリーム色に枝垂れ櫻を縫つぶしの半襟、青磁色に銀で縫ひわけの手綱染の帶、白木の兩くりの駒下駄、襟脚雪の如く白く、緋鹿子の肌襦袢の襟かすかに見ゆ、キリリとした仇な顔、細面、右正に危く見染め申候所、下町の娘、花見の風俗

（昨日の所見）　鏡花

島田女の横顔を描きたるに

屋上之諸嬢誰以此描出老翁意中人　六十九翁　澁柿

時は今あめが下知る雨聲會

酒戰のてがら誰が立てにけん　荷風

小雨降る銀座の夜を女傳話　魯庵

ゴンドラの唄口づさみ行く

海燕西飛不回頭。河中流水却東流。莫愁湖上有愁女。總爲愁多名莫愁　三叉

友禪の袖幕かぬる手すりかな　春葉

龍吟雲雨起　皐水

三五夜中新月色。二千里外故人心。　時雄

月に雲を描き

されぱここに雨蛙會も

十歳に及びければ

雨聞きし昔語りやおぼろ月　小波

于時大正丙辰四月十八日也　陶庵主人記

かくて寄書を終る十時半散會したのであつた。

昭和十一年三月三十日、補訂の際、此の一節を追記す。　宙外

第一回の侯爵邸の時かと思ふが、短冊に、左の御揮毫をして戴いた。

昨夜扁舟雨一簑。滿江雨風夜如何。
今朝試卷孤蓬看。依舊青山綠樹多。

公望錄宋詩

それから四十一年末に、島崎藤村氏と拙者とが當番幹事の時である、雨聲會を開くことにつき豫め交渉を開いた際には、侯爵みづから執筆せられて、左の回答を大磯の別莊から寄せられたものであつた。

拜啓秋期雨聲會に付縷々御示之趣承領候。公望に於ても年内是非今一會願度、諸公に拜眉御清話承り度と、實に不堪戀々候得共、何分不快がちにて、現に過日も一週間程、歸京仕居候處、又々寒氣に當れ、直に東京を逃出し候仕合せ、右之次第に有之、來る二十日には御約束仕兼候。不惡御諒恕願上候。御懇情之段感泣不啻候。先は不取敢御理り迄如斯候。乍憚諸君へ宜布御傳聲被下度候。草々頓首

十二月十日　公望

島崎藤村様
後藤宙外様
梧下

そこで、此の年末の會は翌年迄りとなつて、第四回は四十二年の六月十六日に開かれたものであ

る。この時の記事が『新小説』第十四年第七卷にあるから、左に掲げる。

西園寺陶庵侯主人となり六月十六日夕五時より、濱町花屋敷の常磐屋に開かる、來會者は主人側には陶庵侯と竹越三叉氏にて、招待されたる文士側には巖谷小波、泉鏡花、德田秋聲、田山花袋、塚原澁柿、内田魯庵、柳川春葉、小杉天外、後藤宙外、島崎藤村、廣津柳浪、森鷗外の十二氏、小栗風葉、大町桂月の二氏は旅行中にて缺席したり。新橋の阿嬌十有餘名例に由つて杯盤を周旋し、清談閑話の間に、書畫の寄合書きなどあり。清興盡くるなく、十時過る頃散會せり。當夜は會名に因める雨聲を聞くを得ざりしも、主人が數寄は庭前の樹木に打水の滴りを聞かせ其點滴に鳴けよとて、河鹿を放てるなどの風流心憎き程なりしと。

第三回目の築地瓢屋の時であつたと思ふ。陶庵公は會員の望みに任せて、白雲紙(?)鵝箋紙半裁ものに、盛んに揮毫せられた。拙者も其の一枚を頂戴して今も珍襲してある。

冷村陵水淡村秋。遠陌初窮見渡頭。
賴是丹青無處畫。畫成應遣一生愁。

陶庵錄宋詩

右の書簡も詩も句讀は勿論ないのであるけれども、讀者のために、便宜上添へたものである。

(昭、十、二)(完)

明治文壇回顧錄

定價貳圓

LIBRAIRIE
OKAKURA — SHOBO

昭和拾壹年五月拾五日印刷
昭和拾壹年五月貳拾日發行

著作者　後藤宙外

發行者　岡村祐之
東京市神田區淡路町貳丁目七番地

印刷者　松坂兵吉
東京市神田區表神保町參丁目貳拾九番地

印刷所　山浦印刷所
東京市神田區表神保町參丁目貳拾九番地

發行所　岡倉書房
東京市神田區淡路町貳ノ七
電話神田貳〇壹〇—壹
振替東京貳五九參五番

